

平成26年度指定
スーパーグローバルハイスクール
研究報告書・第5年次

平成31年3月
静岡県立三島北高等学校

はじめに

静岡県立三島北高等学校
校 長 齊藤 浩幸

平成26年度から研究指定を受けたスーパーグローバルハイスクール（SGH）が平成30年度末で終了します。国際的視野から地域の課題を解決できるグローバル人材の育成を目指し、地域課題であり、世界的課題である「安全な水の確保」をテーマに様々な取組をしてきました。研究指定の間、課題探究にご尽力くださいましたアクアスフィア 橋本淳司代表を始め多くの方々に感謝申し上げます。

5年間のSGH事業を次の三点からまとめてみました。

第一に、「課題探究に関するカリキュラム開発」です。

本校の最大の特徴は、全ての先生方がファシリテーター役となり、全校生徒がLWI、GWIという学校設定科目で課題探究を行い、フィールドワークで内容を補完し、ポスターセッションを成果の発表の場、ゴールとして取り組み、シラバス等改善を重ねてきました。「社会に貢献する活動や自分を高めるための活動に積極的に取り組みたい」「課題解決をしていく上で、物事を多面的に見る姿勢が身に付いた」など行動の変容や思考の変化を感じている生徒が増加している結果を得ています。また、「SGHで身に付けた思考プロセスをその他の場面で応用するようになった」との質問に対し、「非常にそう思う」「そう思う」と回答した生徒の割合は、平成29年度入学生では34.5%、平成30年度入学生では60.3%に伸びており、週1回の打ち合わせを通して、経験に加え、指導教員のシラバス理解度が向上したものと考えています。

第二に、「英語の四技能向上」です。

課題探究の英語プレゼンを通し、発表する生徒の目覚ましい英語力の向上によって聴取する生徒の英語力が課題であることが浮き彫りになってきました。この課題を克服するために、今年7月に静岡県教育委員会から3年間の研究指定を受けた英語教育コアスクール事業を活用し、「英語でやりとりする力」の育成に取り組み始めました。積極的に言語活動を取り入れた授業を実践し、Proficiency Testを学期末に実施し、その成果を検証しました。また、TOEFL講座、立命館アジア太平洋大学の外国人学生とのオンラインによるディベート練習会の実施など、授業の成果を感じることができる事業も展開しています。

第三に、「成果の活用とアクション」です。

課題探究の内容も年々密度の濃いものになってきました。しかし、その成果を還元するアクションもSGHの大きな使命です。昨年度から行っている小中学生への出前授業に加え、仮想水を定量化するアプリの開発にチャレンジしているグループもあります。SGHを切り口とした、STEMへの展開であり、文系理系を超えた、教科科目を横断する思考が根付き始めた証です。

この3点を踏まえ、平成31年度入学生から、「総合的な学習の時間」を課題探究の時間に替え、主テーマをSDGsとし、引き続きグローバルな課題解決に取り組んでいきます。併せて1・2年次では課題探究を支える幅広い教養やそれらを活用する思考力を育成し、3年次で文理選択を行い、専門性を高める教育課程に変更しました。

今後は、すべての教育活動が「三島北高生に身に付けさせたい力」に向かうよう、課題探究の評価方法の研究、新教育課程の検証をしていきます。

目 次

巻頭言「はじめに」

平成30年度 S G H 研究開発完了報告書（別紙様式 3）	1
--------------------------------	---

第 1 章 教育課程開発の経緯及び成果

1 シラバス・指導法・評価方法の改善	1 8
2 課題探究に関する外部人材の活用	2 1
3 平成31年度以降の課題探究について	2 3
4 平成31年度入学生教育課程編成の考え方と将来像	2 5
5 英語教育の改善経緯及び成果	2 6

第 2 章 修学旅行・海外研修の実績及び成果

1 平成30年度シンガポール修学旅行	3 1
2 平成30年度ベトナム研修旅行	3 3
3 海外研修を通じた生徒の行動や意識の変容	3 5
4 S G H 指定期間終了後の海外研修について	3 5
5 総括	3 6

第 3 章 校外への広がり

1 一般市民対象の講座等	3 7
2 生徒による講座・授業等の取組	3 8
3 国際交流部・海外研修参加生徒の取組	3 9
4 静岡県高校生グローバル課題研究ポスターセッション大会	4 2
5 入学者選抜	4 3

第 4 章 課題探究を通じた論理的・批判的思考力の育成

1 測定ツールの開発	4 4
2 校内実施結果	4 5
3 他校実施結果	4 7
4 総括	4 8

<参考資料>

1 平成30年度教育課程表	5 0
2 学校設定科目シラバス	5 1
3 生徒・卒業生対象アンケート	5 5
4 教員対象アンケート	6 5
5 生徒作成授業案（第 3 章関連）	6 7
6 論理的思考力テスト（第 4 章関連）	7 9
7 S G H 国際交流だより	8 1
8 新聞記事	9 7

(別紙様式3)

平成31年3月29日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所	静岡県静岡市葵区追手町9番6号
管理機関名	静岡県教育委員会
代表者名	教育長 木苗 直秀 印

平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成30年4月2日（契約締結日）～平成31年3月29日

2 指定校名

学校名 静岡県立三島北高等学校

学校長名 齊藤 浩幸

3 研究開発名

→「国際的な視野から地域課題を解決できるグローバルな人材の育成」

4 研究開発概要

世界的な課題である「安全な水の確保」をテーマにした課題研究を通じ、大学・企業・行政・NPO法人・国際機関・海外学校等との連携の下、コミュニケーション能力、発信力、問題解決力、課題設定力、行動力など、グローバルな課題に対応できる能力を育成するための、全生徒を対象としたプログラムを開発する。課題研究では、プロブレム・ベースト・ラーニングやフィールドワーク等、生徒の主体的で対話的な学びを促す方策を取り入れ、グローバルな視点を持って社会に貢献できる実践力を培う。また、静岡県グローバル人材育成事業や静岡県総合教育センター等との連携を図り、開発したプログラムの普及に向けた取組を実施する。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
ア 授業支援 (ALT派遣)	←											→
イ 運営指導委員会				○							○	

(2) 実績の説明

ア 授業支援（ALT派遣）

(ア) 学校設定科目GWI支援

日 程 平成30年4月～平成31年2月

支援者 県庁PA

内 容 個人英語レポート・英文レジュメ・英語ポスター作成及び英語プレゼンテーション指導

対 象 2年生生徒全員（284人）

(イ) 英語表現Ⅱ支援

日 程 平成30年4月～7月

支援者 県庁PA

内 容 個人英語レポート評価補助

対 象 3年生生徒全員（287人）

イ 運営指導委員会の開催

(ア) 第1回SGH運営指導委員会

日 時 平成30年7月4日（水）午後2時10分～4時

場 所 県立三島北高等学校会議室

出席者 委員長、副委員長、委員5人、校長、副校長、教頭、SGH推進室職員
オブザーバー4人

内 容 ・平成30年度事業計画
・静岡県版グローバルハイスクールの取組について

(イ) 第2回SGH運営指導委員会

日 時 平成31年2月1日（金）午後2時50分～4時40分

場 所 三島商工会議所

出席者 委員長、委員4人、校長、副校長、教頭、SGH推進室職員
オブザーバー1人

内 容 ・今年度の振り返り（質疑応答・協議）
・次年度に向けて

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（平成30年4月2日～平成31年3月29日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
SGH推進委員 委嘱		○←										→
学校設定教科	←											→
国内フィールドワーク					○							
課題研究成果発表				○	○	○	○	○	○		○	○
海外研修	事前研修				○		○	事後研修				
事業成果普及活動	←			○							○	→
教員研修	←											→
生徒評価改善	←											→

(2) 実績の説明

ア SGH推進委員の委嘱及び諮問

水ジャーナリストの橋本淳司氏にSGH推進委員を委嘱し、事業計画、事業評価及び事業の円滑な実施に関する諸項目について諮問した。また、授業支援を仰いだ。

イ 課題研究

(ア) 学校設定科目LWI、GWIの実施

・シラバスの見直し

プレゼンテーション作成の流れや発表のタイミングを見直し、改善した。

・大学生等の協力

本校を卒業し、大学生になった学校設定教科SGHの初回履修生徒を中心に、支援を依頼した。また、外部支援者との連携を密にした。

・生徒間の技能継承機会の設定

2年生が作成した授業案による授業を1年生を対象に担当教員が行った。

・地域での活動（参照：エ(イ)）

近隣の小学校児童や中学校生徒を対象に、複数の課題研究チームが課題研究内容を授業で発表したり、作成したリーフレットやゲームを紹介したりした。また、課題研究の内容をコミュニティラジオ番組で紹介したり、地域の公園やショッピングセンターで来客を対象に説明したりしたチームもあった。

・その他

学校設定教科等の授業案や教材は汎用性のあるデータとして蓄積し、県総合教育センターホームページ等で、県内公立学校教職員に公開する。（予定）

ウ 国内における研修・フィールドワーク

(ア) 協力団体等による事業

a 雨庭実験

主 催 雨水市民の会

対 象 「雨水とグリーンインフラ」分野課題研究チーム生徒 25人程度

日 程 平成30年7月13日（金）

場 所 本校校地内「紫苑の森」

- 内 容 小規模の「雨庭」（雨水を活用した庭園）整備
 - b 長泉町ニコニコ水力発電設備見学
 - 主 催 静岡県駿東郡長泉町くらし環境課
 - 対 象 「水とエネルギー」分野課題研究チーム生徒 41人
 - 日 程 平成30年7月23日（月）午後2時～4時
 - 場 所 静岡県長泉町役場（集合）、長泉町桜堤三丁目付近
 - 内 容 河川を利用した小水力発電設備現場を見学
 - c 狩野川台風被災現場視察ツアー
 - 主 催 国土交通省沼津河川国道事務所
 - 対 象 「災害対策」分野課題研究チーム生徒 25人
 - 日 程 平成30年7月23日（月）
 - 場 所 狩野川資料館、放水路、小坂排水機場、畑洞砂防堰堤
 - 内 容 狩野川台風の歴史とその後の対策に関連する施設の見学
- (4) 生徒の自発的な計画によるもの
- 実施生徒数 191人（上記(ア)除く）
 - 内 容 所属するチームの課題研究に係り、自治体担当部署での聞き取り調査、近隣小中学校等でのアンケート調査等、データ収集のための実験等生徒の計画により実施

エ 課題研究成果の発表

(ア) 学校主催事業

- a オープンスクール
 - 日 程 平成30年11月17日（土）午後2時～
 - 場 所 本校校舎内
 - 内 容 L W I ・ G W I 課題研究のポスターセッション（日本語）
 - 実施生徒 本校1・2年生全員
 - 来校者 保護者、中学生とその保護者 等
- b 事業報告会
 - 日 程 平成31年2月1日（金）午後1時～
 - 場 所 三島商工会議所
 - 内 容 L W I ・ G W I 課題研究のポスターセッション（英語）
 - 実施生徒 本校1・2年生 各HR代表チーム
 - 来場者 県内外教育関係者及び一般の方々

(イ) 学校設定科目に関連する生徒の自発的な課題研究成果の発表

- a 長泉町立長泉小学校
 - 日 程 平成30年12月19日（水）
 - 実施生徒 1年生「水とエネルギー」分野課題研究チーム生徒 6人
 - 内 容 小学校5年生児童を対象とした「ニコニコ小水力発電」の周知活動
- b イトヨーカドー三島店
 - 日 程 平成30年12月22日（土）～24日（月・祝日）
 - 実施生徒 1年生「地下水」分野課題研究チーム生徒 5人
 - 内 容 買い物客を対象とした「三島市の地下水減少現象」の周知活動

(ウ) 海外研修参加生徒による課題研究成果の発表

- a 三島市立北中学校
日 程 平成30年10月15日（月）
実施生徒 2年生海外研修参加チーム生徒 6人
対 象 中学校3年生
内 容 理科の授業で、生活排水に関する周知啓発授業を実施
- b 三島市北第一放課後児童クラブ
日 程 平成31年1月21日（月）
実施生徒 2年生海外研修参加チーム生徒 4人
対 象 放課後児童クラブに通所する児童
内 容 雨水を利用した家庭でもできる緑化活動について説明
- c 大阪大学国際公共政策コンファレンス
日 程 平成30年4月21日（土）22日（日）
実施生徒 3年生 3人
内 容 「仮想水」に関する課題研究を発表

(エ) 外部団体からの依頼による課題研究成果の発表等

- a コミュニティラジオ番組への出演
放送日 平成30年6月30日、9月29日、12月22日（いずれも土曜日）
実施生徒 各回2人
内 容 海外研修やSGH事業についてパーソナリティとの対話を通じて紹介
- b 「第23回水シンポジウム2018 in ふじのくに・沼津」での発表
日 時 平成30年8月23日（木）
会 場 プラサヴェルデ
内 容 市民団体発表部門で、2年生生徒7人が昨年度の課題研究を発表
- c 「水の循環講座―すみだと世界をつなぐ水の大切な話―」第3回
実施日 平成30年12月25日（火）
会 場 ライオン（株）平井研究所
主 催 墨田区、NPO法人ウォーターエイドジャパン
内 容 一般市民を対象に、SDGsについて考える講座を担当
- d 「泉のまちカレッジ」講師
実施日 平成31年1月12日（土）
会 場 駿東郡清水町交流センター
主 催 清水町教育委員会、NPO法人ウォーター・ビジョン
内 容 1年生海外研修参加生徒が、ベトナム研修の成果について説明
- e 「水の循環講座―すみだと世界をつなぐ水の大切な話―」第7回
実施日 平成31年2月16日（土）
会 場 国際ファッションセンター（KFC）ホール2nd
主 催 墨田区、NPO法人ウォーターエイドジャパン
内 容 一般市民を対象に、生活排水とGIについて考える講座を担当

(オ) SGH校対象

- a 第4回全国SGH校生徒成果発表会（平成30年11月8日（木））
参加者 6人

- b 2018年度SGH全国高校生フォーラム（平成30年12月15日（土））
参加者 2人
- c 第3回関東・甲信越静地区SGH課題研究発表会（平成30年12月23日（日））
参加部門等 英語ポスターセッション部門5チーム参加、金賞・銀賞独占
英語プレゼンテーション部門2チーム参加
- d SGH甲子園（平成31年3月23日（土））
参加部門等 研究成果プレゼンテーションの部 1チーム
研究成果ポスタープレゼンテーション部門 1チーム出場

(3) 海外研修

ア シンガポール修学旅行

- 日 程 平成30年10月7日（日）～11日（木）第1団
平成30年10月8日（月）～12日（金）第2団
- 参加者 2年生280人 引率教員16人
- 訪問先 シンガポール大学、ジュロンウエスト中等教育学校、
バイオポリス、ニューウォータービジターセンター
- 内 容 高校では、事前研修で研究した水問題やそれぞれの文化について互いに英語でプレゼンテーションを実施。ニューウォータービジターセンターでは、シンガポールの水事情に関する施設見学。

イ ベトナム海外研修

- 日 程 平成30年8月20日（月）～8月24日（金）
- 参加者 生徒14人（全員1年生） 引率教員2人
- 訪問先 ベトナム社会主義共和国 ハノイ市
- 内 容 チュウバンアン高校：水問題に関する相互の英語プレゼンテーション
JETROハノイ事務所：所長によるベトナム経済事情講話聴講
水資源大学：大学教授による講義聴講と同大学学生との質疑応答
ドンラム村：農村体験
ハノイ市内治水施設：河川氾濫を防ぐ治水施設建設現場の視察

ウ 事前・事後研修

- 日 程 平成30年4月～平成31年2月
- 対象者 ベトナム研修参加者14人、シンガポールプレゼン代表者11人 計25人
- 内 容 研究課題設定、研究、プレゼン練習、研修報告会、各種ポスターセッションへの参加準備

エ 次年度以降の取組に関する協議等

- 日 程 平成30年8月23日（木）
- 内 容 在ベトナム日本大使館の紹介を受け、ハノイ市内の中等教育学校訪問
Skypeなどを利用したプレゼンテーションやディベートなどの実施可能性を探り、協議を行った。（引率教員担当）

(4) 事業成果の普及に向けた活動

- ア 本校SGH特設ウェブサイト更新43回（平成30年4月1日～平成31年1月31日）
- イ SGHサイト提供記事42件

ウ 平成30年度事業報告会

日 時 平成31年 2 月 1 日（金）午前10時30分から午後 2 時40分

場 所 三島市商工会議所

参加者 県内外高等学校教員他

内 容 本年度事業・成果報告

エ 静岡県総合教育センターのホームページを利用し教材等を公開（未実施）

オ 静岡県グローバルハイスクール指定校（3校）との連携

日 程 平成30年 7 月 4 日（水）

場 所 本校会議室

内 容 第1回運営指導委員会に、各校代表がオブザーバーとして参加
各校の事業紹介を実施

(5) 教員研修

ア 学校設定科目ファシリテーター研修

日 時 平成30年 4 月10日（火）

参加者 L W I 担当教員

講 師 2 年生海外研修参加生徒

イ 学校設定教科振返り

日 時 毎週水曜日 6 ・ 7 時限

参加者 学校設定教科担当教員、海外交流アドバイザー、S G H推進委員

(6) 生徒評価の改善

ア 論理的思考力テスト

・試 行 日時 平成30年 5 月

方法 Classi（授業・学習支援クラウドサービス）配信

対象 1 年生生徒 294人

・本校生徒 日時 平成30年 9 月 6 日（木）午前 8 時10分～20分

方法 マークシート式

対象 全学年生徒 855人

・他校生徒 日時 平成30年 9 月 3 日（月）～14日（金）任意の10分間

方法 マークシート式

対象 県内 4 校に依頼し、本校生徒と同じ問題で実施

開発にあたり、静岡大学教育学部・河崎美保准教授の指導を受ける。

イ ポートフォリオ作成

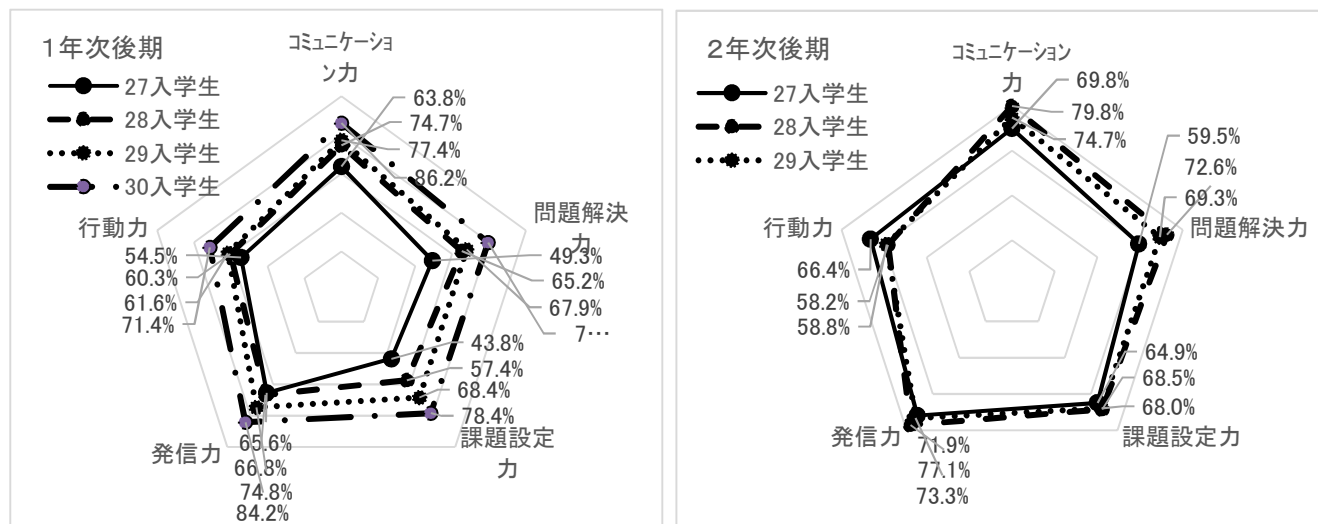
対 象 1 年生生徒 294人

内 容 Classiを利用：研究内容や成果を蓄積するポートフォリオの利用を開始

7 目標の進捗状況、成果、評価

(1) 研究開発の成果とその効果

検証及び評価にあたっては、生徒、卒業生、教員及び保護者を対象としたアンケート及び生徒対象論理的思考力テストを実施した。生徒対象アンケートは、SGHに関するアンケート（年2回）に加え、授業振り返りアンケートを毎週実施し、成果検証にはSGHに関するアンケートを利用した。



アンケートでは、項目を「SGHでつきたい力」として設定した「コミュニケーション力」「発信力」「問題発見力」「課題解決力」「行動力」の5つにわけ、その肯定的な回答の割合をまとめ、生徒からの主に課題研究活動に関する事業への評価とした。その結果が次のレーダーグラフである。

1年次後期は、年度ごとに五角形が大きく、また形も正五角形に近づいていることから、1年次のSGH事業から生徒が感じた能力の伸びが年々増加し、カリキュラム開発はほぼ完成に近づいている。一方2年次後期のグラフは、平成28年度入学生と平成29年度入学生の五角形がほぼ等しく、また1年次後期と比較しても、割合が高くなっていることから、カリキュラムとしては相応の成果があったものの、更なる改善の可能性も感じる結果となった。

卒業生アンケートは、平成27年度入学生有志を対象に平成30年10月に実施したが、回答数が極めて少なく（卒業生287人中16人）、有意なデータを得ることができなかった。時期、方法等工夫する必要がある。

教員対象アンケートは、教員自身の変容と生徒の変容についてどう感じるかを問う内容とし、平成28年度より12月前後に年1回実施してきた。生徒の変容に関する質問では、コミュニケーション力が伸び「話し合いの場面で話をする生徒が増えた」「面接や面談で話をする生徒が増えた」といった記述が見られた。また「物事を多面的に見る姿勢」「課題を発見する力」「協調性」「社会問題への関心」の伸びを感じている教員もいた。

保護者対象アンケートからは、進路との結びつきへの不安が感じられた。事業の一層の周知と、公開性を高めることにより、生徒の伸びを実感していただくことに課題が残った。

論理的思考力テストは、平成29年度から開発を開始し、現在改良を重ねているが、学力検査との興味深い相関も見られ、大学入試改革に向けた利用方法も含め、SGH事業指定終了後も継続して開発研究していく価値のある取組であると考えます。

(2) 申請時目標設定に対する達成度

申請時より目標設定シートにあった成果目標のうち、「文部科学省が支援する国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合」「海外大学へ進学する生徒の人数」「SGHでの課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合」は、いずれも大きくは変わらず、目標値への到達は叶わなかった。この5年間では大学入試の内容に大きな変化がなかったこと、主体的に学習する姿勢は伸びたものの、それが全生徒の学力の急激な伸長には繋がらなかったことが主な要因である。また、1年次半ばで類型選択を行い、進学を希望する学部学科を決める必然性があることから、課題研究の結果が専攻分野に影響を与える時間的余裕がなかったといえる。ただ、「大学在学中に留学または海外研修に行く卒業生の数」については、平成27年度入学生卒業直前のアンケート結果から、大学在学中の留学や海外研修を希望する生徒が多いことが読み取れたため、目標値には達成しなくとも、増加することは確実と思われる。一方、回答数からもわかる通り、全生徒の追跡調査の困難さにも直面しており、成果目標の達成が明確に報告できない問題も抱えている。

(3) 評価

留学や海外研修に興味があっても、経済的な理由から、海外の大学への進学を誰もが実行に移せるわけではないのが現実であり、実際に進学する生徒の数はそれほど増加しなかった。しかし「自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数」は大きく伸び、社会課題への関心が大幅に高まったことも事実である。平成27年度入学生のうち7割以上の生徒は、卒業時のアンケートで、グローバル人材として必要な力が身に付いたと考えており（次ページ参照）、将来のグローバルリーダーとしての基礎力はついたものと理解する。

<添付資料> 目標設定シート

8 5年間の研究開発を終えて

(1) 教育課程の研究開発の状況について

本事業の目的である「グローバル・リーダー育成に資する教育」に係る教育課程は、課題研究を取り入れた学校設定科目LWI（1年次）とGWI（2年次）を全生徒対象に実施することや、シンガポールへの海外修学旅行を行うことにより、主に実施してきた。それら事業の有意性は認められたものの、研究期間中の新たな教育課程の実施までには至らなかったが、平成31年度入学生より、教養教育（リベラルアーツ）を重要視した教育課程を導入する予定である。また、「SGHでつきたい力」を素地にしながら「本校でつきたい力」を整理しなおし、平成31年度学校経営目標に入れ込む形で、すべての教育課程に反映させ、カリキュラムマネジメントにつなげていくことを計画している。

(2) 高大接続の状況について

県の教職5年経験者研修対象者や各教科の授業改善リーダーを中心に授業改善の取組が進んでおり、主体的で対話的な深い学びを目指した教育活動が進んでいる。教員の意識改革も進んでおり、知識偏重型から、学力の3要素を育成する教育へと徐々に変化している。前掲の平成31年度学校経営目標に挙げた「本校でつきたい力」は「学力の3要素」に基づいた構造となっており、SGH事業をとおして高大接続に対する理解が深まった結果といえる。

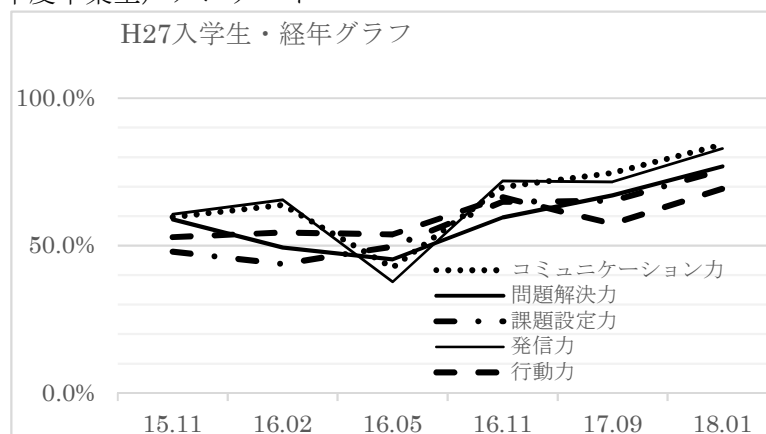
学力の三要素	対象世界との関係	他者との関係	自己との関係
知識・技能	広く深い教養	協働性	情報活用・解析能力
思考力・判断力・表現力等の能力	課題発見力	情報発信力	論理的構成力
主体性をもって 多様な人々と協働して学ぶ態度	批判的思考力 ⇒ 省察性	自己肯定感（主体性につながる資質） 挑戦する姿勢・粘り強さ	
生涯学習し続けることができる力 ⇒ 主体性			

(3) 生徒の変化について

ア 平成27年度入学生（平成29年度卒業生）アンケート

平成27年度に入学し、平成29年度末に卒業した生徒を対象とした調査を、平成30年3学期及び平成30年10月期に実施した。

この学年は、SGHの学校設定科目LWIとGWIの授業を初めて受講し、課題研究に取り組んできたメンバーである。また高校入学試験の際、SGH事業で活躍することを希望した別枠で入学した生徒が10人いる。また、その枠の入学生ではなくても海外研修に参加した生徒もあり、様々な活動に果敢に挑戦した学年といえる。昨年度は3年生ということで、アンケートは大学受験直前の1月ではなく卒業式前日の2月28日にアンケートを実施した。その結果をそれまでのアンケート結果と比較したのが、右のグラフである。いずれのつけたい力も最も高い割合となっており、3年間の成果として肯定的にとらえた生徒が多いことがわかる。



平成30年10月に実施したアンケートは、卒業時にメールアドレスを登録した生徒に対し、グーグルフォームを利用して実施した。アンケート項目は、経年的に質問してきた項目を書き換え、SGHの課題研究で学んだことが、大学生活等でどのように役に立っているかを問う内容とした。メール送信対象が72人だったのに対し、回答は16人からしか戻らず、データが有意であるとは言えないが、総じて肯定的な回答が多い。中でも、「SGHの学習で身に付けた思考のプロセスを、大学の授業等で応用している」「（他校出身者と比較して）周囲と協力して取り組む姿勢（協調性、リーダーシップ）」に対し半分の生徒が「非常にそう思う」と回答していることは、課題研究活動にチームで取り組んでいることに対する評価と理解したい。

肯定的な回答が9割を越えたアンケート項目は、「高校生のときに研究した水に関する課題が、その他の国際的・社会的・文化的課題と関係していることを実感した」「SGHの学習で身に付けた思考のプロセスを、大学の授業等で応用している」「身につけた考える力（洞察力、発想力、論理力）を活用している」の3項目である。

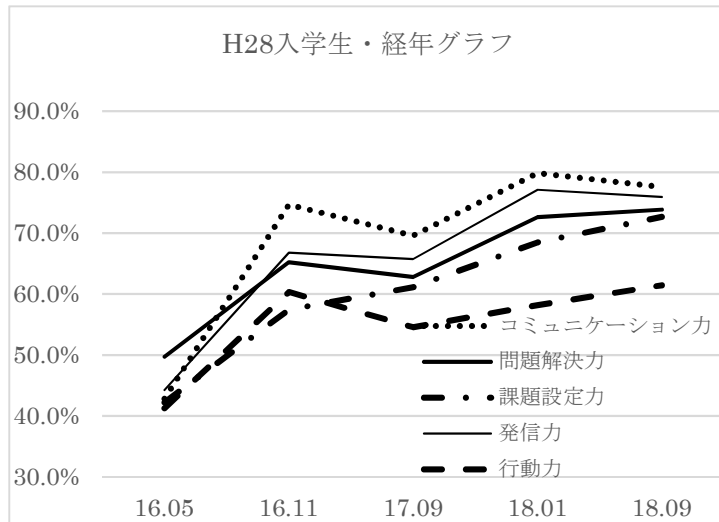
アンケートでは同時に、SGH事業のうち学校設定科目と海外研修が「SGHでつけたい力」を付けるのに役に立ったかを問う項目も設けた。その結果、LWI・GWIの授業につ

いては、本校のつけない力を身に付けるのに役に立ったと回答している卒業生がほとんどであり、また「高校生の時に体験しておいてよかった」と感じている卒業生はLWIで100%。GWIも93.8%と非常に高い。海外研修についても、「高校生の時に体験しておいてよかった」の回答が多かった。

ただ前述のとおり、回答数が極めて少なかったことは課題であり、追跡調査の難しさの実感に加え、より良い実施方法を検討する必要があったと言える。

イ 平成28年度入学生の結果

1年次から改善を加え、前年度より環境の整った学校設定科目LWIとGWIの中で課題研究に取り組んできたこの学年の生徒には、海外研修などを通して積極的にSGH事業に取り組む生徒と同時に、従来の大学入試に向けた教科教育を重視する生徒もあり、課題研究やプレゼンテーションの捉え方に個人差が見られた。一方、全体の傾向を見ると、3年次9月に実施したアンケートでは、ほぼすべての項目で肯定的な回答が、これまでのアンケートの中で最も高い割合となった。



特に肯定的な回答が高かったのは、「地域課題に対して興味や関心を持ち、ニュースや新聞を意識して見るようになった」「社会問題に対して興味や関心を持ち、ニュースや新聞を意識して見るようになった」の2項目である。また「社会に貢献する活動や自分を高める活動に積極的に取り組みたい」という項目では、「非常にそう思う」と回答した生徒が40.7%に上ったほか、「高校卒業後、留学や海外への研修に行きたい」に肯定的

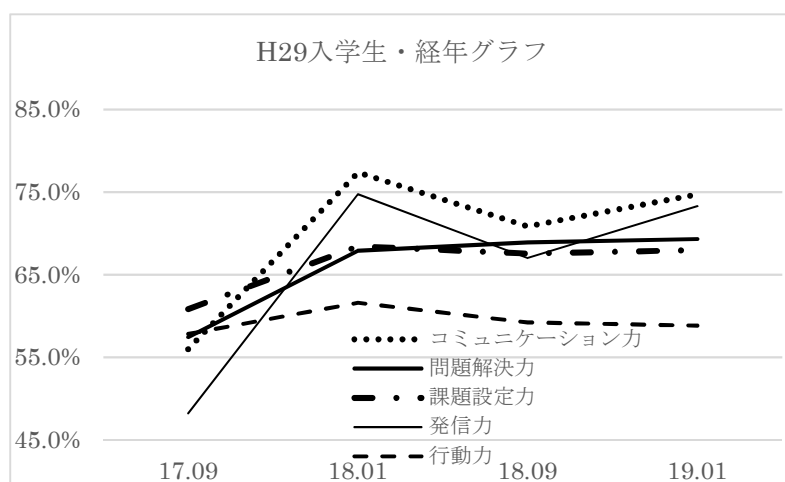
的に回答した生徒も5割を超え、自ら学んできたことを行動に移していきたい意欲が高まったことが理解できる。

各項目を、本校のSGH事業で育てたい力である5つの「コミュニケーション力」「問題解決力」「課題設定力」「発信力」「行動力」に従って分析を行った。いずれの力も上下動はあるものの、入学時から着実に伸びているが、コミュニケーション力と発信力が2年次より落ち込んでいるのは、3年生になった時に何らかの発表の機会がなかったことによるものと思われる。

ウ 平成29年度入学生の結果

この学年が平成27・28年度入学生と大きく違うのは、課題研究活動に批判的な態度で臨む生徒がほとんどいなかったことである。それは本校の教員の意識の変容に加え、三島北高校では課題研究活動が必修となることに関する中学校側の理解が進んだ結果とも考えられる。また、平成27・28年度入学生は、2年次前期のデータが1年次と比較して低くなる傾向にあり、この学年の生徒も同様に、1年次よりも肯定的な回答の

割合が少なくなっている。しかし、その落ち込み方は緩やかで、「社会問題に対して興味や関心を持ち、ニュースや新聞を意識して見るようになった」「地域課題に対して興味や関心を持ち、ニュースや新聞を意識して見るようになった」「自分で設定した水に関する課題がその他の課題と関係していることがわかった」「SGHで身に付けた思考プロセスを他の場面でも応用するようになった」「課題解決をしていく上で、物事を多面的に見る姿勢が身に付いた」の各項目では、1年次よりも肯定的な回答割合が増えている。肯定的な回答の減少率が高い「日本語で自分の意見や考え、探究の成果を多くの人に伝える力が身に付いた」「英語で自分の意見や考え、探究の成果を多くの人に伝える力が身に付いた」の2項目については、GWIのシラバスで発表の機会を後期に集中して設定していることから、前期の段階ではあまり実感できないことに要因があったとも考えられ、後期のアンケート結果では、回復を見せている。



本校で育てたい5つの力で比較しても、例年通り1年次後期からの落ち込みは見られるが、問題解決力や課題設定力は微増となり、課題研究活動が、1年次のまとめから2年次の課題設定へとスムーズに移行できたことによるものと思われる。ただ後期になっても1年次後期ま

では回復せず、平成28年度入学生よりも若干低い数値で2年次を終了することになった。この要因は、GWIのシラバスが、10月以降探究を深める作業よりも、発表に重点が置かれたことが考えられる。2年次の課題研究は、平成31年度は情報の授業に、平成32年度以降は「総合的な探究の時間」に移行する予定だが、そのシラバス作成の際に反省を生かしていきたい。

エ 平成30年度入学生の結果

多くのアンケート項目で、肯定的な回答の割合が増えており、特に後期は、コミュニケーション能力に関連した項目が大きな伸びを見せた。中でも、「英語で自分の意見や考え、探究の成果を多くの人に伝える力が身に付いた」項目については、肯定的な回答が前期よりも2倍以上増加し、後期の英語プレゼンテーションに向けた取組が功を奏した結果となった。

また、アンケート結果を模擬試験の結果や論理的思考力テストと比較してみたところ、目立った相関は見られなかった。ただ、第1回アンケートで項目「高校在学中に留学や、海外への研修に行きたい」「高校卒業後、留学や海外への研修に行きたい」「将来、国際関係や英語を使う職業に就きたい」の項目に肯定的な回答をした生徒の方が、模擬試験での英語の偏差値は高く、英語や国際交流への興味・関心は、英語の成績向上につながる、という極めて順当な結果が見られた。

(4) 教師の変化について

教員自身の信念や実績についての質問項目は、OECD国際教員指導環境調査の質問項目を利用し、平成28年度から同じ内容で実施した。この3か年で比較すると、「教員としての私の役割は、生徒自身の探究を促すことだと思う」と回答した教員が95.7%を超したほか、「生徒は、問題に対する解決策を自ら見出すことで、最も効果的に学習すると思う」「生徒が学習の価値を見出せるよう手助けをしている」「生徒が理解できていないようなときには、別の説明の仕方を工夫している」の項目で、前年度より割合が高まっている。

記述項目では、SGH事業を通して、「生徒が他の授業で学んだことを自身の授業に関連付けたいという思いが強まった」「様々な課題が一つの課題に関わってきていることが意識されるようになった」といった教科横断型学習活動への心的姿勢の変化や、「対話や協働、発信といったプロセスを意識して授業を行うようになった」「生徒が主体的な学びができるような工夫を意識するようになった」「生徒の自主性や問題解決能力を尊重している」といった主体的・対話的で深い学びに取り組む姿勢に関する回答があった。SGH事業全体の目的には、高大接続の在り方に関する研究開発も含まれていたが、本校においては、高大接続改革の一端である高校教育改革に係り、教員の資質能力の向上が図られたものと判断することができる。

(5) 学校における他の要素の変化について（授業、保護者等）

ア 保護者の意識

保護者へも、平成28年度から同じ項目について質問を行った。今年度は1年生保護者240人、2年生保護者157人、3年生保護者118人から回答をいただいた。全体としては、「本校でSGH事業に参加できたことは、お子さんにとって良かったと思う」に対する肯定的な回答が、減少していることが課題である。これは、SGH事業によって育った力を、保護者に示す機会が少なかったことに要因があると思われる。このことは、今回の調査では「わからない」という選択肢が加わり、その回答も1割弱あったことから推測できる。一方「お子さんはSGH事業を通じて、英語力や国際性が高まった」に対しては、肯定的な回答が、年次を経るに従い増加しており、効果を実感した方も増えたのではないかと考えられる。

「とてもそう思う」「そう思う」の 回答割合 ※（ ）は昨年度同集団の割合	1年生	2年生	3年生	(参)H29 3年生	(参)H28 3年生
お子さんは、SGH事業を通じて、地域や 社会の問題に対する興味・関心が高ま った	68.8%	65.6% (69.4%)	56.8% (62.8%)	68.4%	42.3%
お子さんは、SGH事業を通じて、英語力 や国際性が高まった	48.3%	49.7% (43.2%)	58.5% (50.4%)	61.0%	47.9%
本校でSGH事業に参加できたことは、 お子さんにとって良かったと思う。	84.6%	79.0% (88.6%)	78.0% (82.5%)	84.3%	67.6%

(6) 課題や問題点について

運営指導委員会等からは以前より、専門学科高校における課題研究と比較すると、研究内容が深まらないことが指摘されていた。理由としては、学年ごとに別チームとして授業の中で取り組むことから、同じ生徒が複数年度にわたって研究を進められないこと、先輩の研究を継続して実施できないことが挙げられる。平成28年度以降、前年度のレポート集作成により、研究内容の充実度は増してきたが、特にGWIにおいて、歴史的背景の理解などに研究の浅いところが散見された。

また中間評価の際に、3年次に課題研究に取り組めない教育課程の在り方が課題として指摘されたが、専門分野の指導力の限界や、生徒や保護者の四年制大学への進学意識の高さといった要因で、解決できないまま残ってしまった。

さらに、課題研究の最終発表の場を、プレゼンテーションではなくポスターセッションに設定したことから、英語で説明ができて受け答えまでは難しいという生徒も多く、英語の技能の中でも「やりとりする力」の伸長を図る指導の必要性が新たな課題として認識されるようになった。

(7) 今後の持続可能性について

ア 課題研究活動について

開発してきたシラバスを利用し、「総合的な学習（探究）の時間」において、課題研究活動を継続していく。専門家の支援が少なくなくても、教職員が対応できるようにするため、共通テーマをSDGsとする予定である。

イ 希望者対象海外研修

ベトナムへの海外研修は、ベトナムへの進出やベトナム人研修生の受入に積極的な企業との連携を計画している。方法として「①年度当初に、ベトナムに現地法人や工場等を持つ日本企業が抱える課題について、海外研修に参加を希望する生徒が説明を受ける。②説明を受けた課題内容を、個々の生徒がSDGsの経済的な豊かさに係る目標と自然環境問題に係る目標双方の観点ですり合わせ、年間を通じた課題研究のテーマとする。③夏季休業中に、生徒がベトナムを訪問し、課題を提案した現地法人や工場等でフィールドワークを行う。④帰国後、探究活動を進め研究をまとめる。⑤年度末を目途に、課題を提案した企業に、研究成果をプレゼンテーションする」という流れを考えている。企業にはフィールドワークの旅費負担を依頼することで、双方が満足できる仕組みを構築し、まずは5年を目途に継続していきたいと考えている。

【担当者】

担当課	高校教育課	T E L	054-221-3165
氏 名	河田 純次	F A X	054-251-8685
職 名	教育主幹	e-mail	junjil_kawata@pref.shizuoka.lg.jp

ふりがな	しずおかけんりつしみきたこうとうがっこう	指定期間	26～30
学校名	静岡県立三島北高等学校		

平成26年度スーパーグローバルハイスクール 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）								
	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(31年度)
自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数								
a	SGH対象生徒:		150人	138人	138人	240人	321人	200人
	SGH対象生徒以外:		人	人	人	人	人	人
目標設定の考え方: 授業改善の取組が学年進行にしたがって進み、研究開始後3年で意欲関心を持つ生徒が全校の25%を占めることを目標とする。								
自主的に留学又は海外研修に行く生徒数								
b	SGH対象生徒:		21人	19人	20人	21人	20人	30人
	SGH対象生徒以外:		8人	6人	人	人	人	人
将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合								
c	SGH対象生徒:		-	35%	49%	51%	55%	70%
	SGH対象生徒以外:		50%	50%	%	%	%	%
目標設定の考え方: 留学意識調査に基づく推計だが、大学在学中の留学意識は現在でも高い。大学入学後に高くなることが推測される。								
公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数								
d	SGH対象生徒:		2人	6人	25人	17人	15人	20人
	SGH対象生徒以外:		0人	0人	人	人	人	人
目標設定の考え方: 具体的にどのような大会があるかが調査不十分であるが、数値目標は3%とする。								
卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベル（英検2級～準1級・TOEFL57点程度以上）の生徒の割合								
e	SGH対象生徒:				22%	35%	%	60%
	SGH対象生徒以外:		(20%)	(20%)	—	—		%
目標設定の考え方: 研究が全校体制となる4年目以後は割合が安定すると考えられる。								

1' 指定4年目以降に検証する成果目標								
	24年度	25年度	29年度	30年度	31年度	32年度	33年度	目標値(34年度)
a	文部科学省が支援する国際化に重点を置く大学 へ進学する生徒の割合							
	目標		30%	35%	40%	50%	50%	50%
	実績		20%	20%	10%	0%	0%	0%
目標設定の考え方: 現状卒業生の約2割程度であるが、主体的な学習により学力が付き、国際化重点大学への進学率が高まると考えられる。								
b	海外大学へ進学する生徒の人数							
	目標		5人	10人	10人	10人	10人	10人
	実績		0人	0人	0人	1人	人	人
目標設定の考え方: 治安、経済的な理由から海外大学への進学意欲はほとんどないが、研究の結果、意欲を見せる生徒が出ると考えられる。								
c	SGHでの課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合							
	目標		30%	30%	35%	60%	60%	60%
	実績		-	-	59.4%	%	%	%
目標設定の考え方: 研究開始から卒業生が出るのは4年後である。従って、32年度以後は飛躍的に高まると考えられる。								
d	大学在学中に留学又は海外研修に行く卒業生の数							
	目標		10人	20人	30人	100人	100人	100人
	実績		-	-	149人希望	人	人	人
目標設定の考え方: 例年約10名前後の卒業生が短期を含めて海外大学に研修に行っているが、研究実施後は飛躍的に増えると考えられる。								

目標設定の考え方: 例年約10名前後の卒業生が短期を含めて海外大学に研修に行っているが、研究実施後は飛躍的に増えると考えられる。

2. グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット）								
	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(31年度)
課題研究に関する国外の研修参加者数								
a	0 人	0 人	12人	298人	303人	302人	296人	300人
目標設定の考え方：2年目までは課外活動が中心。3年目以後修学旅行で研修に参加する。短期留学への意欲も高まると考えられる。								
課題研究に関する国内の研修参加者数								
b	0 人	0 人	80人	162人	168人	138人	153人	600人
目標設定の考え方：初年度は課外活動が中心。2年目以後学年進行で研究事業に参加する。最終学年は40名前後に対象生徒を絞り込むため。								
課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数								
c	0 校	0 校	2校	4校	4校	6校	6校	6校
目標設定の考え方：現地協力校から始め、毎年協力相手校を1校ずつ拡充していく。								
課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
d	0人	0人	39人	125人	60人	38人	37人	100人
目標設定の考え方：初年度は教員研修が中心。2年目以後は教員、1年生。3年目以後に1,2学年で大学教員、学生と協力する。								
課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
e	0人	0人	35人	25人	98人	71人	73人	50人
目標設定の考え方：企業との探究・体験活動を軸とするため複数回の研修機会が必要である。								
グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数								
f	0 人	0 人	114人	150人	160人	189人	189人	20人
目標設定の考え方：高校生英語ディベート大会、スピーチコンテストが中心。国連機関主催事業への応募が見込まれる。								
帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む。)								
g	12 人	2 人	0人	3人	2人	5人	5人	20人
目標設定の考え方：初年度から各クラス1名程度までの留学生の受け入れが可能である。								
先進校としての研究発表回数								
h	0 回	0 回	1回	3回	3回	2回	2回	1回
目標設定の考え方：毎年の県内対象と隔年の全国対象発表会を実施する。視察は随時受け入れる。								
外国語によるホームページの整備状況								
i	○整備されている △一部整備されている ×整備されていない							
	×	×	△	○	○	○	○	○
目標設定の考え方：初年度中に課外活動で準備を進め、2年目以後は完成し、随時更新する。								
j								
目標設定の考え方：								

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度
全校生徒数(人)	843	844	874	869	866	865	865
SGH対象生徒数			287	576	866	865	865
SGH対象外生徒数			587	293	0	0	0

第1章 教育課程開発の経緯及び成果

1 シラバス・指導法・評価方法の改善

(1) シラバス・指導法改善の経緯

ア 1年目（平成26年度）

初年度は教育課程の変更が間に合わなかったため、実際の授業は行わず、各教科から1人ずつ代表を決め、授業案作りをしてきた。プロジェクトWET※の講座を受講した教員を中心に、プロジェクトWETのテキスト内容を利用しながら、水についての知識を得る授業を計画した。

※ プロジェクトWET：アメリカに本部を持つProject WET Foundationが開発した、水に関する体験型学習プログラム。日本では、公益財団法人河川財団が使用权を持ち、プロジェクトWETジャパンとして活動している。

イ 2年目（平成27年度）

2年目は、1年部の担任の中から、各教科1人ずつ主担当を決め、副担当とペアを組み合わせながら、1年目に考えた指導案をベースに授業を行った。水についての知識理解を深めることと、水の課題を解決するために、考え方のヒントを与えることを目的としており、アクティビティーが多い授業が中心だった。そのため、生徒が課題研究をしていくための時間が十分作れず、常に「時間がない」という問題があった。教員側はとにかくシラバス通りに進めないと、オープンスクール時の発表や2月の発表に間に合わないということで、授業だけでは間に合わない部分を放課後や自分の授業または副担当の授業を利用しながら補うこともあり、生徒にとっては「与えられたタスクをこなしていく感」＝「やらされ感」が多くあった。

ウ 3年目（平成28年度）

3年目は2年生の学校設定科目GWIが開始されたこともあり、教員の授業の持ち方を変更し、実施してきた。

1年生のLWIは、担任＋副担でのTTで授業を担当することとなった。前年度の経験をいかし、アクティビティーを精選し、課題について考える時間を多くするようにした。また、前年度の授業例や研究例があることで、生徒の研究の取りかかりと内容の深まりは良くなってきた。実験やアンケート、関連ある場所へ出かけてお話を伺うなどのフィールドワークを行うチームが多くなってきた。

2年生のGWIは、担任＋情報担当と国際交流アドバイザーにも多く関わってもらい、授業を2時間続きとすることで、教科「情報」の授業内容を担保するようにシラバスを作ってきた。課題研究のテーマは、生徒個々の興味関心に従って研究対象の国と課題を決めるようにした。また、英語での発表を意識させるために、本校および県から派遣されたALTに出身国の水課題についてプレゼンテーションをしてもらったり、レジュメやポスター作りについて英語で授業をしてもらったりする機会を多く設定した。

しかし、テーマについては、かえって幅が広がりすぎてチーム作りに苦労するとともに、専門家からの有用なアドバイスを受けられないチームも出てきてしまい、チームと課題テーマによって研究の深まりや課題研究に対する取組に差が出てきてしまった。また英語への意識付けについては、生徒側は、その時間を「楽しい」と感じる者と「英語なので難しい」と感じる者の差があり、担当教員側も、英語の理解程度に差が出てきた。さらに、修学旅行先のシンガポールを水の課題のフィールドワークの場所という位置づけで考えていたが、シンガポールの課題を扱っているチーム以外は上手に利用することは難しかった。

エ 4年目（平成29年度）

GW I では、教科「情報」の教員が非常勤講師から常勤教諭となったため、連携がとりやすく、GW I 担当のHR担任にとっては、情報分野で教えている内容がわかりやすくなり、2時間続きの良さをいかせるようになった。また、課題研究対象の国や地域を数か所に絞ることで専門家のアドバイスを受けやすくなり、修学旅行の水施設見学等も研究にいかせるチームが多くなった。

フィールドワークの面では、LW I でフィールドワークをより充実させるため、先輩たちの事例を研究する時間をもつことで、「フィールドワークはするものだ」という意識が高まり、国土交通省沼津河川土木事務所が実施するツアーを紹介するなど、可能な限り多くの生徒が参加できるように進めてきた。

オ 5年目（平成30年度）

LW I の授業は、担任＋英語科教員がTTで担当し、2年目と同様複数クラスを持つ教員がいるような形にはなったが、年度後半の英語による発表の準備がスムーズにできるようになった。また、GW I は海外交流アドバイザーが非常勤講師を兼務し主担当となり、各HRの担任を副担当におくことで、一貫した指導が可能となった。さらに2時間連続ではなく、別の日に1時間、教科「情報」の内容を行うことになったが、基本的には2時間続きと同じようにシラバスを組んできた。

カ シラバス・指導法の改善による生徒の意識・行動の変容の関係性

LW I、GW I の授業は、常に研究を深める「時間」についての問題がついてまわった。2年目にあげたように、知識を与えようとしていくと活動をする時間が確保されず、2時間続きになった時には、かえって間延びしてしまうという問題が生じることや、1時間ずつのGW I は授業がGW I と情報とで前後ずれてしまうという問題があり、紙の上で作っているシラバスは必ずしも上手に回ることがなく、生徒には、負担感や手持ちぶさた感を持たせる場面もあったように思う。

しかし、毎年の積み重ねのおかげで、生徒たちの行動には以下のような変化が見られた。

- ①課題の設定をオリジナルのものにした
- ②課題設定自体は先輩のものを踏襲しても、さらにアイデアを深めた
- ③フィールドワークで、単に文献調査だけでなく、実際に現場に出かける生徒が増えた
- ④解決策のための検証まで積極的に取り組むチームが増えた
- ⑤フィールドワークや検証の結果が、ポスター内容と発表にしっかり活かされるようになった

(2) 課題探求評価方法の研究・改善（参照：第3年次報告書 pp. 23-24）

ポスターセッション等に活用している評価は、第3年次にルーブリックを確定し、その後継続して使用している。

GW I の英文レポートは、1人のALTに一貫して評価してもらうことで、評価に人為的な揺らぎはない。しかし課題としては、担任が読んでいるわけではないので、最終的な評価者である担任教員が、それを説明する際に自信を持ってない、という不安が残る。

ルーブリックも英語評価も、どの教員が評価を行っても同じ評価結果となるような客観性を持たせる必要がある。そのために、ポスター内容と発表の評価のすりあわせを、日本語の段階で1回、英語の段階でもう1回実施するような手続きが、不安の解消につながるのではないかと考えられる。

(3) 教員対象アンケートから見える生徒の変容（参照：pp. 65-66）

生徒自身の変容に関する主観的な意見は、平成30年度SGH研究開発完了報告書（pp. 10-12）に詳しい。ここでは教員対象アンケートにより、客観的な変容について分析する。

ア 実施

期 間：平成30年12月～平成31年1月
方 法：Classiアンケート機能を利用
対 象：本校全教員（回答数46）

イ 設問

事業第3年次から同じ設問で、ある項目について、SGH事業を通して「ほとんどの生徒（100～70%程度）に変化があった」「ある程度の生徒（70～40%程度）に変化があった」「一部の生徒（40～10%程度）の生徒に変化があった」「変化はほとんどなかった」から選択する形式をとっている。この選択肢にしたのは、本校で開発を進めた教育課程の対象が全生徒であり、効果の広まりこそが、研究開発の評価として適切であると考えからである。

また項目は、文言の違いはあるものの生徒対象のアンケートに揃え、同じ内容を生徒側の主観的な評価と教員側の客観的な評価の両面から見るようにしている。

ウ 分析

「日本語で自分の意見や考え、探究の成果を多くの人に伝える力が身に付いた」「周囲と協力して取り組み姿勢が身に付いた」に対し、8割以上の先生が、ある程度多く（40%以上）の生徒に変化があった、と回答している。また、「社会貢献活動や自分を高める活動に積極的に取り組むようになった」「社会問題に対して興味や関心を持つようになった」「地域課題に興味関心を持つようになった」生徒もある程度いると感じている教員が多い。

一方、「進路選択に影響を与えた」に対しては、一部の生徒に対してのみだったとみなす先生が多かった。確かに、SGH事業を通して、国際関係学部や外国語学部への進学を目指すようになった生徒は少ないと思われるが、A0入試や推薦入試などで自らの課題研究を自己アピール材料に利用した生徒は多い。さらに、「学習に対して、自分から意欲的に取り組む姿勢が身に付いた」「学習以外のことに對して、自分から意欲的に取り組む姿勢が身に付いた」についても、一部の生徒にしか変化がないとの回答が半分を超えており、教員側からは主体性の伸長が見えなかったといえる。

記述回答では、「聞く力」「伝える力」「表現力」「プレゼンテーション力」など、コミュニケーションにかかる力がついたという記述が多く、「話し合いの場面で話をする生徒が増えた」「面接や面談で話をする生徒が増えた。それは、課題研究の授業以外でも、面接などの時に発揮されている」との回答もあった。

またその他に「物事を多面的にみる姿勢」「課題を発見する力」「協調性」「社会問題への関心」の伸びを感じている教員もいた。普段の生活でも「グループでの活動に抵抗がなくなっていると感じる。他者とかかわりあう姿勢は身についた」「（ホームルーム活動や部活動で）課題を自ら発見し、問題解決に向けて考察できるようになった」「知識同士を細切れでなく結び付けようとする力がついている。正解がないものへの違和感を克服し、前に進めようとする力がついている」といった行動の変容を認める教員もいた。

2 課題研究に関する外部人材の活用

(1) 総括

どの機関や企業も、講師等快く引き受けていただいた。特に企業からは、CSR事業や広報で高校との連携が期待されているように感じた。

(2) 活用実績

ア 教員支援

機関・団体名	日程	職名・氏名	内容
静岡大学	5/16	河崎 美保 准教授	論理的思考力テストの評価
静岡大学	年間	熊野 善介 教授	静岡STEMアカデミー in 三島

イ 1年生課題研究支援

(ア) 授業支援

機関・団体名・職名等	日程	内容
学生：慶應義塾大学、静岡大学、静岡県立大学、横浜国立大学※、明治大学、滋賀大学※（※ 平成27年度入学生） 院生：静岡大学 卒業生：東京学芸大学	5/23	グループのテーマ決めと発表
	10/3	日本語プレゼン（紙芝居）・レジュメ作成
	11/14	日本語ポスター（完成）セッション練習
	12/12	英語ポスター・発表原稿・日本語レジュメ作成
	1/23	英語ポスターセッション大会
東京大学生産技術研究所 芳村圭准教授	8/2	水の同位体に関する講義（希望者80人対象）
関東地方ESD活動支援センター （一財）自然エネルギー公益利用協議会 2～3人	4/11	水問題に関する講義（小水力発電）
	7/4	外部有識者による課題策定指導
	7/23	小水力発電現場への生徒フィールドワーク支援
	9/19	外部有識者による課題策定指導
沼津河川国道事務所調査課水防調整係 2～3人	4/11	水問題に関する講義（豪雨対策）
	7/4	外部有識者による課題策定指導
	7/23	豪雨被害箇所等への生徒フィールドワーク支援
	9/19	外部有識者による課題策定指導
八千代エンジニアリング 環境グループ社員 7～8人	4/11	水問題に関する講義（富士山の地下水）
	7/4	外部有識者による課題策定指導
	9/19	外部有識者による課題策定指導
（公財）雨水貯留浸透技術協会 1人	4/11	水問題に関する講義（雨水活用）
雨水活用市民の会 代表	4/25	課題研究初期指導（アクティビティ指導）
	7/4	外部有識者による課題策定指導
	7/13	学校敷地内での雨庭整備
	9/19	外部有識者による課題策定指導
NPO法人ウォーターエイドジャパン	4/18	課題研究初期指導（アクティビティ指導）
アクアスフィア代表	随時	授業支援

(イ) フィールドワーク支援（7月20日～23日中心）

県総合庁舎東部地域局、三島市（水道課・水と緑の課、危機管理課、浄化センター、市立図書館）、沼津市（危機管理課、図書館）、清水町（都市計画課）、長泉町（くらし環境課）、横浜市戸塚区、鎌倉市、FMみしま・かなみ、楽寿園、白滝公園、JR三島駅、JR伊東駅、JA三島本店、戸田温泉磯味の宿魚庵ささや、道の駅くるら戸田、田中産婦人科医院、柿田川公園、命の水神社、東レ三島工場環境保安課、沼津市消防団、沼津市教育委員会、三島市教育委員会、長泉町教育委員会、イトーヨーカドー三島店

ウ 2年生課題研究支援

機関・団体名・職名等	日程	内容
栗田工業株式会社 新事業推進部	7/5	課題策定指導
	9/27	レジュメ、プレゼン制作前指導
東レ株式会社 環境保安部	7/6	課題策定指導
	9/28	レジュメ、プレゼン制作前指導
JICA専門員 2人	7/5, 6	課題策定指導
	9/27, 28	レジュメ、プレゼン制作前指導
雨水市民の会	7/5, 6	課題策定指導
	9/27, 28	レジュメ、プレゼン制作前指導
NPO法人ウォーターエイドジャパン	7/5, 6	課題策定指導
	9/27, 28	レジュメ、プレゼン制作前指導
アクアスフィア代表	随時	授業支援

エ 海外研修での連携

(ア) ベトナム研修（平成30年8月20日～24日）

機関・団体名	職名等	内容
水資源大学 Thuy Loi University	副学長 ドン教授	ベトナムの水問題に関する講義 現地フィールドワーク先紹介、案内
在ベトナム日本国大使館	二等書記官 他	現地高校との連絡調整
Jetro	静岡事務所	連絡調整
	ハノイ事務所長	ベトナム現地事情に関するブリーフィング

(イ) シンガポール研修（平成30年10月8日～13日）

機関・団体名	職名等	内容
シンガポール大学	Cecilia Tortajada教授	シンガポールの水問題に関する意見交換
静岡県東南アジア事務所	所長	研修旅行全般、現地高校との連絡調整

(ウ) その他国内機関等

機関・団体名・職名等	内容
NPO法人ウォーターエイドジャパン	墨田区水の講座への講師支援
ライオン株式会社	生活排水による汚染問題の啓発キャンペーン協力
NPO法人ウォータービジョン	ラジオ番組への出演支援、「泉のまちカレッジ」主催

3 平成31年度以降の課題探究について

(1) 継続に向けた考え方

本校の課題探究活動に関する教育課程等の研究開発は、シラバス改善の経緯や生徒の変容を鑑み、SGH当初の目的を果たし一旦完了を見た判断できる。しかし、SGH指定期間終了に合わせて生徒の課題探究活動を取りやめることは考えられず、教育課程の見直しにより課題探究活動を継続することとした。見直しにあたっては、SGH指定期間中特例により必修科目を読み替えて実施してきた課題探究のための学校設定科目を担保する方策が課題となったが、平成34年度実施の新学習指導要領における「総合的な探究の時間」の理念を受け、「総合的な学習の時間」の内容を見直し、週時程に組み入れて、横断的・総合的な課題探究活動を行うこととした。

(2) 「三島北高生につけたい力」の分析

「総合的な学習（探究）の時間」の内容見直しにあたっては、その目標は、新学習指導要領解説において「教科・科目等横断的なカリキュラム・マネジメントの軸となるよう、（中略）各学校における教育目標を踏まえて設定すること」とされていることから、まずは学校の教育目標の見直しから取り掛かることとなった。そのため、平成30年7月5日（木）県総合教育センター指導主事の学校訪問に併せた全教職員対象研修において、生徒の強みと弱みを分析した後「本校生徒につけたい力」についてKJ法により分析を行った。

その結果、知識・技能として「教科横断的な広い視野と能力」「社会の事象への関心・知識」「英語が強い理系」、思考力・判断力として「物事の本質を考える習慣」「多面的に物事を捉えられる」「イマジネーション」「創造性・創造力」「課題を見つけそれを解決するために持続的かつ論理的に考える力」、学びに向かう姿勢として「チャレンジ精神」「逆境に動じない精神力」「忍耐力」「先を考えて行動する能力」「自己管理力」「主体性」「自分から社会に発信する」「リーダーシップ（巻き込み力・他者への働きかけ）」「周囲も巻き込んで全員で向上しようとする」といった言葉が挙がった。

さらに、この結果について8月「総合的な学習の時間」委員会において検討を重ね、下記の表に整理した(p.10再掲)。作成にあたっては、「資質・能力の新たな枠組み「3・3・1モデル」の提案一」（松下佳代, 2016）を参考とし、「学力の三要素」をさらにOECD-DeSeCoのキー・コンピテンシーにおける「道具を相互作用的に用いる（対象世界との関係）」「異質な人々からなる集団で相互に関わりあう（他者との関係）」「自律的に行動する（自己との関係）」という3つのカテゴリーで分類した。分類にあたり、協働性は「態度」よりも活動を通して身につける「技能」、批判的思考力は「思考力」よりも「学びに向かう力（取り組み方）」とした。

学力の三要素	対象世界との関係	他者との関係	自己との関係
知識・技能	広く深い教養	協働性	情報活用・解析能力
思考力・判断力・表現力等の能力	課題発見力	情報発信力	論理的構成力
主体性をもって 多様な人々と協働して学ぶ態度	批判的思考力 ⇒ 省察性	自己肯定感（主体性につながる資質） 挑戦する姿勢・粘り強さ	
生涯学習し続けることができる力 ⇒ 主体性			

それぞれの「つきたい力」の具体的内容は、以下の通りである。

学力の3要素	育てたい力	具体的内容
知識及び技能	広く深い教養	現代社会の諸問題を理解するための多様な背景と手立てに関する知識
	協働性	話合いや企画調整等、チームでの活動に必要な技能 例：自分の意見を述べる／他者の意見を聞く／複数の意見をまとめる／日程調整／役割分担／アイディアの具体化／情報共有
	情報活用・解析能力	データや資料を分析し、論証に活用できる技能 例：文献を探す／文献やデータから必要な情報を読み取る／データをグラフにする／グラフを読み取る
思考力・判断力・表現力等の能力	課題発見力	知りえた情報から課題を見つけ、自らの問題と繋げられる判断力
	情報発信力	自らの思考やチームのアイディアを他者にわかりやすく伝える表現力
	論理的構成力	課題発見から解決策の提案に至るまで論理的に組み立てられる思考力
学びに向かう力・人間性 (主体性をもって多様な人々と協働して学ぶ態度)	批判的思考力	知的好奇心に溢れ、自己／他者の考えや意見に興味や関心を持ち、その考えや意見を深化させる問いを抱く姿勢
	自己肯定感	自らの思考や意見に自信を持って、主体的且つ肯定的に取り組む姿勢
	挑戦する姿勢 粘り強さ	失敗や躓きに臆することなく新たな課題に果敢に挑む姿勢 地道で先の見えない作業でも粘り強く取り組む姿勢

(3) 平成31年度「総合的な学習（探究）の時間」（案）

以上を踏まえ、平成31年度からの「総合的な学習（探究）の時間」は、以下のような内容での実施を考えている。

ア 課題探究のテーマ

大テーマを「持続可能な開発目標(SDGs)」とする。

→ 専門家を招聘しなくても、個々の教員が興味・関心を持つ分野を担当できる。

イ 実施方法

(ア) 生徒

年度当初に、SDGs 17のゴールのいずれかをテーマとして選択し、内容が重なった生徒4～6人でチームを作る。そのチームでテーマを掘り下げ、1年間をかけて課題探究を行う。

(イ) 教員（HRを超えた「ゼミ」形式。将来的には学年の枠も超えたい。）

A 学級担任：課題探究の進め方、テーマの掘り下げといった一般的な部分を受け持つ。副担任（または英語担当）とTTで実施する。

B 他の教員：SDGs17のゴールのうち、興味関心のある複数のゴールを選択し、「共に研究できるゴール」として生徒に提示する。テーマを決めた生徒チームの依頼により、1～4チームの指導担当教諭となり、課題探究の内容を深める支援をする。

4 平成31年度入学生教育課程編成の考え方と将来像

(1) S G H事業との関連及び主旨

S G H指定校となったメリットとして、課題研究活動の取組が他校に先立って実施できたことに合わせて、文部科学省が求める新しい学習指導要領の理念や、後期中等教育に対する期待や不安、そして21世紀中盤に必要とされる人材像、といった学校を取り巻く外的な視点を得たことが挙げられる。それらの視点から、本校がS G H指定前から抱えてきた課題と、指定期間中に顕在化した課題を同時に解決し、否応なしに進む高大接続改革に対応するため、平成31年度（2019年度）入学生より、教育課程を全面的に改訂することとした。

(2) テーマ 類型選択を2年次に行い、リベラルアーツを実現できる教育課程の編成 (=新教育課程への本質的な対応)

(3) 現状と課題

本校は、入学生の学力が上がってきている一方で、高校入学後に力が伸長する生徒が次第に減少し、特に3年の後半になるほど伸びが頭打ちになる傾向がある。

本校は男女共学になって以来、進学実績を伸ばそうと「対策」「対応」に力を入れてきた。それが「面倒見の良い学校」という評価につながる一方で、効率重視の受験対策につながることは避けられない。「本物の基礎力」は、受験勉強だけではなく、卒業後の社会を生き抜く上で最も必要とされる力であり、新しい教育課程において求められる力でもある。

(4) 平成31年度入学生の教育課程

「学問の相互作用によってリベラルアーツを実現することで、新しい教育課程への本質的な対応ができるのではないか」との仮定に基づき、以下の考え方で変更にした。

新しい教育課程で求められる3つの柱（生きて働く知識技能の習得、未知の状況にも対応できる思考力判断力表現力、学びに向かう力・人間性等）は、更に整理するならば、「汎用性」「他者性」の獲得と位置づけられる。類型を早期に分けて対応するのではなく「本物の基礎力」を手に入れること、文系理系という類型に分けることなく多様な人材が集まる教室で学習すること、こういった力が今の本校の生徒には必要である。又、傑出したところはなくとも素直でマルチに力を発揮できる本校の生徒の能力を最大限に活かせるものである。

(5) 今後のビジョン

「3年生の最後」に「最大の力」を発揮できることが目標である。途中経過の模擬試験の結果などに一喜一憂せず、腰を据えて彼らが高校3年間で最も長い時間を費やす「授業」を大切に生徒と向き合っていきたい。

又、カリキュラムマネジメントの視点に立つならば、学習だけではなく部活動、行事、HR活動を楽しめる生徒、即ち「マルチ」で「ハイブリッド」な北高生を本校の特色にしていきたい。

5 英語教育の改善経緯及び成果

(1) 英語コアスクール事業

課題研究発表の際に、プレゼンテーションはできてもそれに対する英語の質問に答えられない、という課題意識があった。そこで、30年度に静岡県英語教育コアスクールの指定を受け、英語でやり取りする力の育成のために、株式会社アルクとの協働により、スピーキングテストの開発を行っている。指導と評価の一体化を狙い、普段の授業で生徒がやっていることがスピーキングのパフォーマンステストで十分に評価できる仕組みを研究している。4技能を測るテストには、GTECや実用英語技能検定でタブレットやPCを用いることが予定されており、AIの導入も今後進むことが予想されている。このことから、対面式ではなく、マイクに向かって録音する形でのテストの開発を目指した。スピーキングのパフォーマンステストにおいてどんな言語機能を測ることが可能となるか、またそのための具体的な設問はどのようなものになりうるかについてアルクの講師と意見交換をしながら研究しており、他校でも実施可能な手法の確立を目指している。

(2) 授業における取組み～Mission in Talking～

従前より1年生のコミュニケーション英語Ⅰの授業の最初の数分間を使い、全クラスでMission in Talkingという独自のスピーキング帯活動を行っている。1学期までは既習レッスンの語彙定着を目的としたWord Quiz方式を中心としたが、2学期は、よりコアスクール事業で目指す力を伸ばすための活動となるよう、内容を改善し、求められた内容を即座に応答する練習をするために、「描写・叙述」の言語機能に絞って15個のトピックを示し、取り組んだ。



Mission in Talking

英語で話をするときに
① 正確さ：受け手が理解できるための正確性がある。
② 構文：英語としての文章を構築できている。
③ 目的達成：質問に対して回答できている。

目標設定【描写・叙述（自分の生活や経験について）】

No.	Questions	1	2	3	4	5
1	(自) Please talk about your classmate's hobby.					
2	(自) Please talk about one of your teachers' (person).					
3	(自) Please talk about your knowledge of the (place).					
4	(自) What do you do in your free time?					
5	(自) How do you usually spend your time?					
6	(自) Please talk about one of your best friends.					
7	(自) Please talk about your hometown (place).					
8	(自) What do you do during the school day? (person)					
9	(自) Please talk about your club team (activity).					
10	(自) What do you do before coming to school every day? (person/subject)					
11	(自) Please talk about your other hometown (city/town).					
12	(自) What is your plan for the next week? (subject)					
13	(自) Do you have any plans for the next weekend? (activity)					
14	(叙) What did you do after school yesterday? (past)					
15	(叙) What did you do last weekend? (past)					

中間集計

○ ()

○ ()

△ ()

総集計

○ ()

○ ()

△ ()

【評価基準】①量：言語機能が成立するための一定以上の情報量がある。
 ②正確さ：受け手が理解できるための正確性がある。
 ③構文：英語としての文章を構築できている
 ④目的達成：質問に対して回答できている。

英語で話をするときに
4点を意識しよう！

HRNO{

NAME{

}

(3) スピーキングテスト

ア 実施方法の開発

授業で行っているMission in Talkingの帯活動で十分練習してきた「叙述・描写」の言語機能を測るために、パソコン教室のノートパソコンに接続するヘッドセットをコアスクール事業予算で購入した。既存の環境の範囲内でプレテストを実施し（次の項目に詳細）、1クラスの生徒がスムーズに解答を音声として録音し、そのファイルを管理する方法について試行錯誤した。写真付きでマニュアルを作ることにより、生徒の多くは混乱なく操作を終えることができ、普通科高校の基本的なパソコン教室の環境でも、ヘッドセットさえあれば実施可能であることがわかった。

0.（事前）ファイル保管用のサーバー上のフォルダをあらかじめ作る
1. マイクロソフト標準アプリ「ボイスレコーダー」の起動

2. 問題文の提示
3. ヘッドセットを装着して録音開始指示
4. 解答開始
5. 解答終了
6. 録音終了指示
7. 「ボイスレコーダー」内の音声ファイルの名前を識別できる名前に変える
8. 保存保管用のサーバー内の指定ファイルにコピー

イ プレテストの実施と採点基準の調整

- 目 的：・生徒と教員が実施手順に慣れる。
- ・生徒の様子を観察するとともに、実施手順の不備を見つける。
 - ・生徒の解答音声データを担当教員とアルクの講師で採点し、採点基準のすり合わせを行う。

対 象：1年生1クラス（12HR）41人

実施日：11月14日（水）

内 容：設問は What is your ideal friend like? の1問のみとし、実施手順を示して録音後ファイルの移動までを生徒に体験させた。すべての操作が終わるまで25分かかったが、生徒は概ね手順を理解できることがわかった。

採点基準：量、正確さ、構文、目標達成の4つの観点で、それぞれA, B, Cの3段階で評価するとした。発話量が少なくても正確な英語を話す生徒に対し、発話量が豊富でもその分エラーが増えてしまう生徒の評価の評価が低くなることや、とぎれとぎれだが正確である発話に対しての評価が高くなる事態を踏まえ、正確さの評価基準として、スムーズさが前提となるということを確認した。また、量においては発話量ではなく付加情報の量を評価するものとし、構文については複文が使えていることを評価Aの基準とした。

★評価基準【12月10日打合せ後】

【量】	A:情報を深めている（付加情報が豊富） B:最低限の言語機能を使用できている（2～3文以上） C:量が少なく言語機能が発揮できていない（完成文が1文以下）
【正確さ】	A:スムーズ且つほぼミスがない B:途切れ途切れでミスもあるが、意味は理解できる C:沈黙が多く且つ意味が理解できない
【構文】	A:複文が*使えている B:単文や重文を*使えている C:単語の羅列、英語としての文になっていない *「使えている」＝途切れ途切れでミスもあるかもしれないが、意味は理解できる
【目的達成】	A:質問に対して回答している B:話題を自分が話せる内容に摩り替えている 質問と回答がすれ違っている C:質問と異なることを答えている

ウ 全員を対象としたテスト実施

実施日：12月17日（月）、18日（火）

場 所：校内パソコン教室

実施クラス：1年生全7クラス（294人）；

実施体制：授業担当者1名＋補助（空き時間の1年生英語担当教員1～2名＋副校長）

設 問：① What do you usually do after school?

② What was your best memory from your junior high school?

いずれも設問を目にしてから準備時間10秒、解答時間30秒とした。

(4) スピーキングテスト実施後生徒対象アンケート結果（回答数70）

Q：三島北高校入学後に、あなたが英語で話をしてやり取りをする力は入学前と比べて伸びましたか。

入学後に英語で話してやり取りする力がかなり伸びた	9人(12.8%)
入学後に英語で話してやり取りする力が少し伸びた	47人(67.1%)
英語で話してやり取りする力に変化はない	12人(17.1%)
英語で話してやり取りする力は後退した	2人(2.9%)

Q：三島北高校入学後に英語で話してやり取りする力を伸ばすのに役立ったものは何ですか。（複数選択可）

授業内の活動	ペアワークによるMission in Talking	35人(50.0%)
	ペアワークによる前時の復習のretell活動	14人(20.0%)
	教員が発問する前時の復習のQA活動	9人(12.9%)
	ペアワークによる内容理解のための意見交換	24人(34.3%)
	教員が発問する内容理解のためのQA活動	11人(15.7%)
パフォーマンス テスト	ALTによる面接式のスピーキングテスト	17人(24.3%)
	GTECの受験	4人(5.7%)
	コアスクール事業の録音式のスピーキングテスト	9人(12.9%)
表現活動のため の副教材	Q:Skillsの授業内の活動	22人(31.4%)
	Q:Skillsのグループプレゼンテーション発表	23人(32.9%)
家庭学習	週課題・小テスト・長期休暇中の課題等学校から指示があった家庭学習	11人(15.7%)
	自主的な家庭学習	8人(11.4%)

【考察】英語で話してやり取りをする力を伸ばす手立てとして、Mission in Talkingが役立っていると感じている生徒が多い。

Q：コアスクール事業の録音式のスピーキングテストについて、あなたの感想や考えに近いものは以下のどれですか。（複数選択可）

Mission in Talkingでやってきたことが役立った	35人(50.0%)
解答する（録音する）時間が足りなかった	35人(50.0%)
録音やファイル移動の操作が難しかった	4人(5.7%)
自分の実力が出せた	2人(2.9%)

【考察】Mission in Talkingと同じタイプの設問であったにもかかわらず、Mission in Talkingが役立ったという生徒が半数にとどまっている。毎回の実施時にどれほどの時間をかけるべきか、フィードバックをどうすれば「授業で練習していることを身に付ければ評価を得ることができる」という実感を生徒が持つことができるか、という点に留意して今後は実施していかなければならない。

(5) G T E C、英語検定試験、コンテスト参加実績等から見える成果

ア G T E C 技能別スコア

平成29年度入学生は平成28年度入学生と比較すると、リーディングやリスニングの点数は振るわず、合計点はそれほど高くなかったが、スピーキングの点数が過去2学年と比較しても良好だった。発信力の向上が、英語においても同様の傾向を示したものといえる。また平成30年度入学生もスピーキングのスコアが極めて高く、英語コアスクールで取り組んでいる「やりとりする力」向上に向けた取組が功を奏しているのでは、と考えられる。

(R：リーディング、L：リスニング、W：ライティング、T：左記3技能計、S：スピーキング)

	H27入学生					H28入学生					H29入学生					H30入学生				
	R	L	W	T	S	R	L	W	T	S	R	L	W	T	S	R	L	W	T	S
H27	168.7	185.0	117.1	470.8	96.5															
H28	181.3	204.7	121.9	508.3	102.7	170.8	191.1	123.3	485.3	96.8										
H29						193.2	206.7	123.6	523.5	113.5	164.3	188.9	120.9	474.0	105.7					
H30											180.2	195.5	121.6	497.3	123.7	169.0	184.6	122.2	475.9	121.6

イ 実用英語検定試験結果（合格者数／受検者数）

「卒業時の英語検定2級以上合格者60%」を目標とし、2級の筆記及びリスニング試験は校内受検を実施した。結果的に、3年生の2級合格者は累計146人と、50.1%だったが、半分強の生徒が2級をもって卒業することとなった。また、全生徒の在学中の2級受検を推奨し、受検者数と合格者数は増加した。

級	準2級			2級			準1級		
学年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年
～前年度		29	12		11	74		0	1
第1回	7／8	10／12	1／1	2／10	24／41	46／63	-／-	-／-	2／14
第2回	19／28	2／2	-／-	4／15	23／154	26／43	0／1	0／4	0／6
第3回	20／28	1／3	-／-	15／45	46／146	0／2	1／4	2／21	-／-
小計	46／64	13／17	1／1	21／70	93／341	72／108	1／5	2／25	2／20
計	60／82			186／519			5／50		

ウ コンテスト参加実績他

- (ア) 静岡県高校生英語スピーチコンテスト 東部地区大会 1位 県大会 4位
- (イ) 第3回関東・甲信越静地区スーパーグローバルハイスクール課題研究発表会
英語によるポスターセッション発表部門 金賞 銀賞
- (ウ) JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2018高校生の部 学校賞
- (エ) 全国英語ディベート連盟主催 高校生英語ディベート大会 静岡県大会4位
- (オ) 日本高校生パラメンタリーディベート静岡県大会 優勝 全国大会出場

第2章 修学旅行・海外研修の実績及び成果

1 平成30年度シンガポール修学旅行

(1) 実施内容

ア 仮 説 シンガポール修学旅行の事前研修と、現地での水関連の施設訪問や水問題についての聴講、現地高校生や大学生との交流、フィールドワーク等をととして、GWIの学習意欲を高めるとともに、社会問題への興味関心・国際的視野からの課題解決能力を高めることができる。

イ 日 程 平成30年10月7日(日)～10月11日(木) (第1団)
平成30年10月8日(月)～10月12日(金) (第2団)

ウ 参加者 2年生282人 引率教員16人

エ 事前研修

(ア) 1学期末～夏休み

- ・ B & S プログラム(シンガポールの大学生との交流)で用いる質問事項の準備
GWIで研究しているテーマに関する英語での質問事項の準備。
- ・ シンガポールに関するポスター作成
班でテーマを決定(歴史、法律、宗教、風習、食事等)。個人でレポートを作成。

(イ) 夏休み～2学期

- ・ 個人レポートの内容を班、クラスで共有。班でポスターを作成し掲示。

オ 課題研究関連研修①(10月9日午前:複数グループに分かれ実施)

(ア) ニューウォーター・ビジター・センター(NEWater Visitor Centre)訪問

参加者 GWIにおいてシンガポールを研究しているチーム25人

内 容 英語ガイドの案内で見学。シンガポールの浄水過程や水の使用方法、NEWater(下水を真水化するシステム)について学習。

(イ) シンガポール大学(National University of Singapore)訪問

参加者 海外研修生徒12人

内 容 シンガポールの水事情・水問題に関する講義を拝聴後、本校生徒が3チームに分かれ、英語で水問題に関するプレゼンテーションを実施。その後の意見交換においても、多くの御示唆・御教示をいただいた。教員間でも探究学習の指導体制等についての意見交換を実施。

(ウ) ジュロンウェストセカンダリースクール(Jurong West Secondary School)訪問

参加者 文系特別進学クラス31人

内 容 本校生徒が複数チームに分かれ、英語で日本文化に関するプレゼンテーションを実施。相手校からもシンガポール文化に関するプレゼンテーションを実施。その後、相手校生徒とペアになり、施設見学や英語による意見交換を通じ交流。

(エ) ニーアンポリテクニク(Ngee Ann Polytechnic)訪問

参加者 文系普通クラス92人

内 容 本校生徒は、昨年度事業報告会で発表した水問題の課題研究を英語でプレゼンテーション。相手校からも2チームが環境問題に関するプレゼンテーション。その後、相手校生徒とペアになり、説明を受けながら施設見学・意見交換をし、交流。教員間でも探究学習の指導体制等についての意見交換を実施。

(オ) バイオポリス(Biopolis)訪問

参加者 理系特別進学クラス・理系普通クラス122人

内 容 本校生徒が3チームに分かれ、日本語によるシンガポールの発展と科学技術に関する講義、施設見学及び近隣施設を含め都市計画に関する説明を拝聴。

カ 課題研究関連研修②（全員対象）

(ア) B & S プログラム（10月9日午後）

シンガポールの大学生と本校生徒が少人数のグループに分かれて、英語で交流及び市内見学。事前準備として、GWIでの研究テーマに関する質問を用意し、当日大学生から意見を聞き、帰国後の研究につなげた。

(イ) カンポン体験（第1団：10月8日、第2団：10月10日）

マレーシアに入国し、国境付近のプライ村を訪問。模擬結婚式への参加、油ヤシ園・ゴム園の見学をまず行った。その後、各家庭に分かれ、民族衣装の試着、昼食、遊具を使つての文化体験を実施した。

(2) 評価

修学旅行先をシンガポールに変えてから4年間、修学旅行全体に対する満足度は、常に9割を超えている(今年度約98%、昨年度約97%)。さらに今年度は、異文化に触れる機会として、昨年度までの学校訪問やB & Sプログラム等に加えて、マレーシアに訪問し、カンポン体験を実施した。そのカンポン体験に対する生徒の満足度も約95%と高い数字を上げ、生徒の異文化理解をより深めることができたと考える。しかし、出入国に際しかなり時間を要し、現地での滞在時間を十分に確保できなかったこと、全体の行程もきつくなってしまったことなど、今後に向けて課題もみられた。

<参考>・修学旅行全体に対するアンケート結果

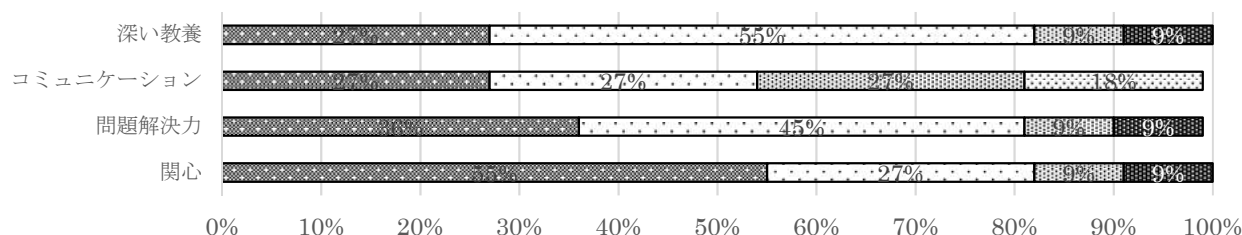
とてもよかった	64%
それなりによかった	34%
あまりよくなかった	1%
よくなかった	1%

・カンポン体験に対するアンケート結果

とてもよかった	58%
それなりによかった	37%
あまりよくなかった	4%
よくなかった	1%

修学旅行で伸ばせたと思う力

■非常に □十分 ■ほぼ ■あまり □できない



2 平成30年度ベトナム研修

(1) 実施内容

ア 目 的 ベトナムの水問題についての事前・事後研修や、現地の高校生とのプレゼンテーション・意見交換、フィールドワーク等を通じて、学校設定科目LWI・GWIの学習意欲を高めると同時に、社会課題への興味関心・国際的視野からの課題解決能力を向上させる。

イ 日 程 平成30年8月20日（月）～24日（金）4泊5日

ウ 参加者 1年生希望者14人 引率教員2人

エ 行程及び主な研修内容

訪問日・訪問先	主な研修内容
8月21日（火）午前 国立Chu Van An高校	① 現地高校生による、節水啓発や水質浄化実験に関するプレゼンテーション ② 日本、静岡県、三島北高校に関する英語でのプレゼンテーション ③ 8月までの研究内容について、本校生徒4チームによる英語でのプレゼンテーション  
8月21日（火）午後 JETROハノイ事務所	JETROハノイ事務所長による、ベトナムと日本のビジネスパートナーシップについてのブリーフィング
バッチャン村	伝統工芸体験を通じ、水利と交易の歴史を学ぶ
8月22日（水）午前 水資源（チュイロイ）大学	副学長とのブリーフィング、および治水の専門家教授によるハノイの治水事業についての講義  
8月22日（水）午後 ドゥオンラム村	ベトナム文化遺産となっている、古い家屋や生活様式が残る村内のフィールドワーク
夕刻 ハノイ市街	水上人形劇観劇：水をめぐる伝統文化の体験

8月23日（木）午前 治水施設	内水被害を減らすためのポンプ施設工事現場でのフィールドワーク
	

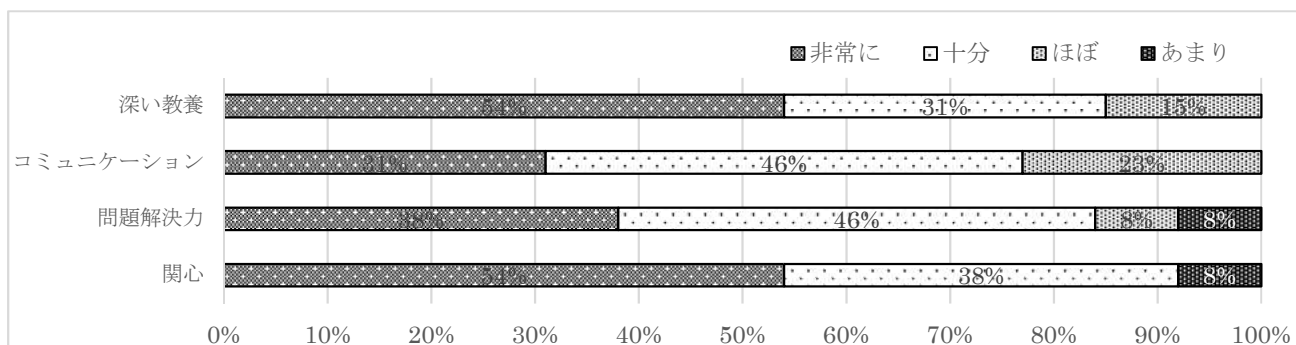
(2) 評価

ア Chu Van An高校生との交流についての生徒の感想（抜粋）

- ・向こうの学生と触れ合えるのは、このような研修でないとできないのでとても貴重な経験ができて良かったです。僕たちがうまく説明できないことがあっても理解をしようとしてくれたのでとても良かったです。
- ・日本の高校との違いを探しながら見学して行くなかで一番感じたことは英語の発音です。ベトナムの高校生たちは英語の発音がとてもきれいで自分たちも発音の練習を強化しなければと思いました。また、話を聞く態度は日本と違うなとも感じました。
- ・現地の日本語のテキストを見させていただいたことが印象的でした。私たちが使っている英語のテキストも英語が母語の人からするとこのように見えるのかな、と思いました。
- ・新学期始まって時間も経っていない中、生徒さんたちがダンスや、プレゼンテーションなどといった、素晴らしいパフォーマンスをしてくださって、感動しました。

イ 海外研修で伸ばせたと思う力

海外研修を通じた、課題研究の目標である「深い教養」「コミュニケーション能力」「問題解決力」「社会課題に対する関心」の伸びに関する自己評価アンケートの結果は以下の通り。



ウ 総括

4年間のベトナム研修を通じ、複数年の継続実施により現地の学校や大学とのつながりができ、今後生徒の課題研究の共同実施など、様々な展開が期待できる事業となった。SGH指定期間終了後も、この関係を継続していきたいと考えており、ICTを通じた交流を実施していく予定である。また自分の目で課題を見ることができる海外での体験は極めて重要であると考えられ、引き続き研修旅行を実施できるための手立てを検討中である。（後述）

3 海外研修を通した生徒の行動や意識の変容

(1) 海外研修概要

修学旅行先は従前より海外で、比較的スムーズに進められたが、海外研修は、課題研究を前提とする必要性から、様々な工夫をしながら取り組んできた。進め方としては、希望者を中心とした海外研修参加生徒が基本的に、事前研修で課題を決定し、現地フィールドワークを通して研究を深め、年度末にポスターセッションで発表という流れをとった。課題研究は課外授業形式とし、毎週水曜日に1時間30分ほど時間をとって実施してきた。

(2) 生徒の行動や意識の変容

S G H指定1年目から海外研修を実施したが「S G H事業＝海外研修」といった1年で、他の事業との繋がりや膨らみはほとんどなかった。しかし2年目からは、進め方は同じでも、学校設定科目L W Iの開始に伴い全生徒が課題研究に取り組むようになったこと、入学時から「S G H指定校」を意識する生徒が増えたことから、研修に対する取組もより活発になってきた。

2年目の生徒からは、次年度の生徒のために活躍できるファシリテータを育成すべく、様々な機会をとらえて学習してきたことを発表できるようにし、実際3年目には、1年生対象の全体授業や、教員対象の模擬授業などでレクチャーできるまでになった。3年目からの生徒も同じように後輩の良い手本となるファシリテータとしてのスキルを身につけ、校外での発表にも積極的に取り組み、立教大学での成果発表で、良い成績を収めるようになった。

先輩の獲得した賞が明確な目標となり、4年目はトビタテ！留学ジャパンに参加するなどし、海外での活動を充実させる生徒が増えた。また成果発表の場で上位を狙える深い研究に取り組み、発表や研究の進め方に関するより高いスキルを身につけた。その結果、3月の課題研究発表終了に伴い研究を終了するチームが多い中、研究成果をアクションとして発展させ、自分たちの考えたゲームを新社会人対象に実施し、その成果を4月の外部発表会で披露した生徒もいた。

5年目は、前年度の研究を踏襲するチームが複数見られた。先輩の研究を深めるチームと、自分たちの課題に取り組むチームが混在することで、研究そのものに対する意識が高まった。自分たちの授業案を実際に中学生や一般の方に対して複数回行ったり、大学の先生や企業の方に多くアドバイスをいただいたりする機会を得、「高校生でもできること」「高校生だからできること」を意識して活動することができるようになってきた。

また自分たちの研究を進める中で、様々な支援を受ける場面が増えてきたが、それを「特別に頑張っているから当然」ではなく、むしろ当たり前ではないこととして、感謝しながら進められる生徒も増えてきた。そのような生徒の姿勢が好感を与え、協力を継続していただけるというサイクルになっているように思う。修学旅行においても、現地高校の生徒のレベルの高さに触発され、英語に対する積極的な学習姿勢も見えてきた。

4 S G H指定期間終了後の海外研修について

(1) 主旨

前述のとおり、現地校との良好な関係が生まれたことで、今後の展開が期待できる事業となったため、①予算がなくてもできる交流、②海外研修費用を捻出するための方策、の2方向から継続の手立てを模索してきた。②は現時点では調整中のため、ここでは①の経過をまとめる。

(2) 調査概要

ベトナム訪問時に、引率教員1名が生徒とは一部別行動をとり、生徒訪問先以外に2校を訪問

し、次年度以降の交流の可否や要望のヒアリングを行った。この訪問は（一財）企業経営研究所の助成を受け実施した。また訪問先高校紹介は、在ハノイ日本大使館の協力を得た。

ア 継続的で経済的な交流に向けた調査の観点

(ア) 生徒・学生の語学レベル

相手校生徒の英語と日本語のレベルを知ることで、今後の交流が可能となる場面を絞り込む。例えば、英語の能力が本校生徒と拮抗していれば、英語によるディベートを中心に活動している国際交流部の部員生徒との交流が可能となる。

(イ) 相手校側が求める具体的な交流内容

どちらかに無理のある交流は長続きしないことから、過剰な期待や誤解を避ける作業は、長期にわたる連携事業の基盤として重要である。

(ウ) 相手校のICT環境・設備状況

インターネット回線の速度や、Skype等機器整備状況などのICT環境確認を実施することは、相互に利用できる通信手段の選定に不可欠である。

イ 訪問先2校の特徴と交流の可能性

Amsterdam高校	国立。95%の卒業生が国内外の大学に進学。海外の高校とやりとりをする場合、教育委員会や政府の許可が必要なため手続きが煩雑。
Vin高校	創立5年目。不動産関連財閥が設立した小中高一貫校。オンライン交流に積極的で、生徒が取り組めるタスクの提案もあった。

ウ より経済的な交流を実現するための考察

ベトナムの一般社会のネット環境は、飛躍的に拡大されつつある。社会主義ながら強力な統制はなく、SNS好きという国民性もある。一方で国立（公立）学校は、教育現場のハード面でICT環境自体が今後さらに整ったとしても、ソフト面で詳細な実施計画の提出が求められ、学校及び教育省からの許可が必要となることもわかった。その点、Vin高校は私立であるため、学校長の判断のみで、柔軟な対応が可能とのことであった。現実的には、まずVin高校とオンライン交流活動*を行い、その結果を踏まえ、今後現地の他校も含めた本格的なオンライン交流の実施に向け、準備を進めていくことが妥当と思われる。

※ 平成31年2月15日（金）午後3時40分～5時30分、本校国際交流部生徒とVin高校生徒がオンラインで英語プレゼンテーション大会を実施。内容は充実。本校側設備に不安が残る。

5 総括

本校は平成16年度入学生から、海外修学旅行を実施している実績があり、SGH指定期間終了後も、海外を目的地とした修学旅行を継続していく予定である。渡航先は、治安の良さや英語圏であること、また費用の面からも適切であると考え、引き続きシンガポールとした。SGH事業の中で培った現地大学や高校との連携関係を継続していくために、「総合的な学習の時間」における課題研究のフィールドワークの場としての修学旅行の内容を、今後具体的に計画していく。

5年間を通して、上級生の姿を見ながら生徒が成長していく様子や、生徒の活動が社会に広がるようになったことは、研究開発の成果目標のひとつ「自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数」の結果が、開始当初の設定を大きく上回っていることに反映している(p.15)。また、研究開発完了報告書「7 目標の進捗状況、成果、評価」にあるとおり、実施年度を重ねるに連れ、「SGHでつけた力」が伸びたと感じる生徒が増えていることにも表れている(pp.8-9)。SGH指定期間終了とともに、上級生から下級生への心的態度の継承を断ち切ってしまうことは、本校にとっても地域にとっても大きな損失であることから、今後の教育課程編成の中で、研究内容ばかりではなく心構えをも繋いでいく場面の設定や手立てを講じていきたいと考えている。

第3章 校外への広がり

1 一般市民対象の講座等

(1) ラジオ番組（FMみしま・函南）への出演

ア 放送日 平成30年6月30日（土）、9月29日（土）、
12月22日（土）12:00～13:00

イ 番組 ボイス・キュー 「ウォーター・ビジョン」

ウ 内容 海外研修参加生徒が2名ずつ、30分の番組に出演した。パーソナリティとの対話を通じて、海外研修の意義、SGHで学んでいること、発表活動の様子などを紹介した。



(2) 市民向け講座「泉のまちカレッジ」講師

ア 実施日 平成31年1月12日（土）14:00～16:00

イ 会場 駿東郡清水町交流センター

ウ 運営等 主催：清水町教育委員会、
企画運営：NPO法人ウォーター・ビジョン

エ 内容 1年生の海外研修参加生徒の発表チーム4チームが、プレゼンテーションスライドを用いて日本語で発表した。発表後は市民の方々から、研究の動機や今後の展望についてなど、鋭い質問を頂くことができた。



(3) 墨田区主催「水の循環講座ーすみだと世界をつなぐ水の大切な話」第3回・第7回

ア 運営等 主催：墨田区

運営：NPO法人ウォーターエイドジャパン

イ 第3回

(ア) 実施日 平成30年12月25日（火）13:00～16:45

(イ) 会場 ライオン(株) 平井研究所（東京都江戸川区）

(ウ) 内容 一般市民の参加者に向けて、持続可能な開発目標（SDGs）について考える授業を実施した。家庭排水が処理されずに流れる様子を、模型を使って参加者に体験してもらい、家庭排水削減のためのアクションを促すワークショップを行った。



ウ 第7回

(ア) 実施日 平成31年2月16日（土）13:00～16:00

(イ) 会場 国際ファッションセンター(KFC) ホール2nd（東京都墨田区）

(ウ) 内容 ウォーターエイドスピーカーとして、一般市民の参加者に向けて、生活排水とグリーンインフラストラクチャー（GI）に関する授業を担当した。

2 生徒による講座・授業等の取組

(1) 概要

前項(3)では、海外研修に参加した生徒が、NPO法人ウォーターエイドジャパンや橋本淳司氏の監修のもと作成した授業案に基づき、講義を行った。以下その授業概要を紹介する。

(2) 授業案①「生活排水ラボ」

- ア ねらい
 - ・ 普段、台所や風呂場などから排出される生活排水について考える。
 - ・ 授業後も生活排水の削減について考えながら生活する。
- イ 対象等 対象：中学生以上
人数：4人～30人程度を想定(1グループ4～5人が望ましい)
- ウ 内 容
 - ・ 生活排水に関するクイズ
 - ・ 排水管模擬実験
 - ・ 家でできるアクションを考える(グループワーク)
 - ・ 生活排水によって川が汚れる理由についてのレクチャー
 - ・ 「生活排水削減宣言！」自分が実施したいアクションを発表
- エ 実施先 平成30年10月15日(月) 三島市立北中学校 3年生理科授業で実施
平成31年2月16日(土) 墨田区水の循環講座第7回

(3) 授業案③「SDGs for beginners」「SDGs for our future」(参照：pp. 67-78)

- ア ねらい
 - ・ SDGsの認知度を上げる
 - ・ 受講後の参加者がSDGsを意識しながら生活する
- イ 内 容
 - ・ SDGsの紹介(ショートレクチャー)
 - ・ 課題事例紹介→複数のSDGsに関連する問題の発見
 - ・ Tシャツやジーンズを使ったSDGs 6、12の理解
- ウ 実施先 平成30年11月8日(木) 第4回全国SGH校生徒成果発表会分科会
平成30年12月25日(火) 墨田区水野循環講座第3回
平成31年2月13日(水) 本校1年生LWI授業(担当教員が授業案に基づき実施)

(4) 授業案②「GI(グリーンインフラストラクチャー)」

- ア ねらい
 - ・ GIに対する認知度を上げる
 - ・ 住みやすい街づくりのための雨水対策について考える
- イ 内 容
 - ・ GIの認知度調査
 - ・ GIに関するレクチャー
 - ・ アクティビティ(ペットボトルを利用した小さい雨庭づくり、GI体験カードゲームなど、年齢や人数に応じて複数用意)
- ウ 実施先 平成31年1月21日(月) 三島市北第一放課後児童クラブ
平成31年2月16日(土) 墨田区水の循環講座第7回

3 国際交流部・海外研修参加生徒の取組

(1) 国際交流部生徒の取組

ア 全国英語教育研究団体連合会主催 第57回全国高等学校生徒英作文コンテスト

(ア) 指導の経過

標記コンテストに応募するために、国際交流部の1・2年生32人（うち裁量枠選抜入学者は29年度6人、30年度5人）が夏休みに約500語の英語エッセイに取り組んだ。1年生の部は” A Local Place I Want Tourists to Visit”、2・3年生の部は ” A Society I Want to Be Realized” とタイトルが指定されており、それぞれのテーマについて顧問とディスカッションをしながら何度も書き直すプロセスライティングの手法により、論理的に書く技術を磨いた。各学年10篇ずつの優秀作品を顧問が選出し、応募に至った。

(イ) 結果 1年の部 入選2人（2人とも裁量枠選抜入学者）

イ 英語ディベート

(ア) 活動内容

4月	新入部員が「外国人と結婚したいかどうか」をテーマに簡単な日本語によるディベートを体験。（目的：論拠に基づいて議論することの楽しさを味わう）
5月	HEnDAによる今年度の論題定義解説を詳細に読み込む。 課題：2年生：課題図書、1年生：関連するネット記事を読む。
7月	肯定・否定ごとにチームを作り、立論を準備
8月	静岡県英語教育研究会主催の英語ディベート学習会（会場：掛川）に参加 本校部員3人がモデルディベーターに選出され、デモ試合を実施
9月	滋賀県立守山高等学校とのSkypeによるオンライン試合を実施 
10月	本校国際交流部主催で、東部地区を中心とした6校による練習試合大会を初開催
11月	静岡県大会（会場：掛川）に2チーム参加。 10校18チーム中、本校Aチームは2勝2敗、Bチームは2勝1敗1引き分け。
12月	藤枝明誠中学校・高等学校において、即興ディベート練習会に参加（1回目）
1月	藤枝明誠中学校・高等学校において、即興ディベート練習会に参加（2回目）
2月	パラメンタリーディベート（即興型ディベート）県大会参加、優勝

(イ) 目的・概要

コミュニケーション能力、課題設定能力、発信力などを涵養することを目的とし、海外交流アドバイザーと顧問の指導の下、アカデミック型英語ディベートに取り組んだ。平成30年度の全国高校生英語ディベート連盟（HEnDA）による論題は、” Resolved: That Japan should

legalize voluntary active euthanasia.”（日本国は、本人の意思による積極的安楽死を合法化すべきである。是か非か。）であり、生徒は英語でのディベートの技術を身に付けるとともに、治る見込みのない患者に医師が安楽死を施すことを合法化するメリットとデメリットについて議論した。

また30年度はアカデミック型だけでなく、即興型ディベートについても研究を進め取り組みを始めた。証拠となる資料を検討し約1年間同じ論題で取り組んでいくアカデミック型に対し、論題が発表されて20分後に試合を行う即興型のディベートは、論題にすばやく反応して論を立てやり取りをする必要がある。アカデミック型と即興型の両方にスタイルのそれぞれに習熟し、議論を楽しむ生徒を育てている。

平成29年度入学者（2年生）は、SGH裁量枠選抜での入学者6人のうち、英語ディベート県大会には5人が選手として出場した。また、30年度入学者（1年生）は同様に5人が補欠として登録し、レギュラーメンバーを補佐した。

（ウ）評価

ディベートの強固な立論作成のためには、入念なリサーチと論理的な構成が必要である。想定されるアタックを様々な可能性から考えることにより、異なる立場で多角的にものごとを捉える力が鍛えられた。また、ジャッジを説得するための効果的な論理構成について、教員のアドバイスはもとより、生徒自らが考えて実践に移す場面も多く見られた。単に流暢な英語を話すだけではなく、論理的で分かりやすい内容のスピーチを作成するために、選手だけでなく部員全員が何度も意見を交換した。この活動を通して、コミュニケーション能力、課題設定能力、発信力のさらなる向上が期待できる。

また、即興型ディベートでは、リサーチによって得られるエビデンスに頼らず、論の立て方自体を鍛えると共に、英語ですばやくやり取りをする技術をさらに磨くことができた。

（2）海外研修参加生徒の発表活動

裁量枠選抜の生徒が参加している海外研修では、成果を校外で発表する機会を通じ、研究をさらに深めることができた。

ア 三島函南農業協同組合ワークショップ

- （ア）日時 平成30年3月12日（月）
- （イ）会場 JA三島函南本店
- （ウ）対象 平成30年度新入職員
- （エ）経緯 研修内容を生徒自らが売り込み、新入職員への研修としての実施が実現した。
- （オ）内容 仮想水をめぐる問題について理解を深めるための独自に考案したゲームを用いたワークショップをファシリテーターとして運営

イ Water Literacy Open Forum 2018（主催：Water Literacy Open Forum 2018 実行委員会）

- （ア）日時 平成30年3月21日（水）
- （イ）会場 国際基督教大学
- （ウ）参加状況 3チームが英語ポスターセッション発表、うち30年度裁量枠入学者は4名
水とSDGsの関係性を伝える授業づくりのワークショップに参加

ウ 大阪大学国際公共政策コンファレンス（主催：大阪大学法学部国際公共政策学科）

（ア）日時 平成30年4月21日（土）、22日（日）

（イ）会場 大阪大学

（ウ）参加状況 事前の論文審査を通過した3年生3人のチーム（日本語プレゼンテーション）

（エ）発表内容 「持続可能な社会と『仮想水』」に関する課題解決のための新しい仕組み

エ 第7回高校生ESDシンポジウム

第4回全国SGH校生徒成果発表会（主催：筑波大学附属坂戸高等学校）

（ア）日時 平成30年11月8日（木）

（イ）会場 筑波大学附属坂戸高等学校

（ウ）参加状況 ポスターセッションおよび分科会のファシリテーター（前項参照）

（エ）発表内容 生活排水の影響の考察と解決のためのアクション

オ SGH全国高校生フォーラム（主催：文部科学省、筑波大学）

（ア）日時 平成30年12月15日（土）

（イ）会場 東京国際フォーラム

（ウ）参加状況 英語ポスターセッション1チーム

（エ）発表内容 バーチャル・ウォーター（仮想水）に関する研究

カ 第3回関東・甲信越静地区SGH課題研究発表会（主催：立教大学）

（ア）日時 平成30年12月23日（日）

（イ）会場 立教大学

（ウ）参加状況 英語ポスター部門5チーム、英語プレゼンテーション2チーム

（エ）発表内容 生活排水の影響の考察と解決のためのアクション、
日本をグリーンインフラストラクチャー大国にするための方策、
仮想水に対する意識付けを目的としたアクション、
植物による水質浄化システムを用いたトイレの普及、
ベトナムの教育機会均等を目指した活動の経緯報告、
カエルを通じた水環境の研究、
自然由来の物質を用いた水質浄化の意義

（オ）結果 英語ポスター部門 金賞1チーム（4人全員が29年度裁量枠選抜による入学者）
銀賞2チーム（6人中3人が30年度裁量枠による入学者）

キ 全国スーパーグローバルハイスクール課題研究発表会（SGH甲子園2019）

（ア）日時 平成31年3月23日（土）

（イ）会場 関西学院大学

（ウ）参加状況 研究成果プレゼンテーションの部1チーム、研究成果ポスタープレゼンテーションの部1チーム

（エ）発表内容 仮想水に対する意識付けを目的としたアクション、生活排水の影響の考察と解決のためのアクション

4 静岡県高校生グローバル課題研究ポスターセッション大会

(1) 趣旨及び概要

静岡県内唯一のSGH指定校として、常に県内他校への普及活動の在り方が課題となっており、特に普通科高校としての課題探究型活動への先進的な取組を多くの学校に知っていただく場の必要性を感じていた。また、新学習指導要領において課題探究型活動が重要視されることを鑑み、県内でチーム或いは個人で課題研究に取り組んでいる生徒のいる高校に呼びかけ、それぞれの課題研究をポスターセッション形式で発表するための場として、標記大会を実施することとした。

参加チーム募集にあたっては、公私立・課程問わず県内全ての高等学校に呼びかけ、県立高校7校、市立高校1校から計9チームの応募があった。課題研究のテーマは、SDGsのいずれかに関連したものとし、申込書に関連するゴールを明記してもらった。当日は参加者相互投票により前半・後半各1チームに「いいね！賞」、高校教育課長他来賓等の合議により最優秀賞を決定した。

これまで、専門学科の高校で集まる機会があったが、今回のような設置者や学科・課程の枠を越えた課題研究発表会はなかったと思う。このような発表会の必要性は今後増していくと思われることから、継続実施の方策を検討中である。

(2) 実施詳細

ア 日 時 平成31年2月2日（土）午後1時から午後3時30分

イ 場 所 ふじのくに千本松フォーラム プラサヴェルデ コンベンションホールB

ウ 日 程 13:00 開会式 本校校長挨拶、参加校紹介、進め方説明

13:15 ポスターセッション開始（前半・後半に分かれそれぞれ20分×2回）

14:45 三島北高生徒によるショートワークショップ（開票作業と同時作業）

15:10 閉会式 結果発表・表彰、高校教育課長講評、閉会の言葉

エ 他校からの参加チームとテーマ（富士市立高校以外は静岡県立）

校名	チーム名	課題研究テーマ	関連SDGs
吉原	吉原商店街活性化チーム	地域を活性化！さらに暮らしたい地域へ!!	11
富岳館	農業クラブきのこ研究班	被災地に緑を！	9, 13, 15
駿河総合	M-SIPP	SDGs学習すごろく	1, 10, 12
静岡農業	生物工学部	在来作物「かつぶし芋」の保護を目指して	15
静岡中央	自然科学部	学校周辺にゲンジボタルを復活させる取り組み	11, 13
藤枝北	食品サイエンス部 (最優秀賞)	過疎化地域の活性化プロジェクト ～高校生農家民宿への挑戦～	8, 9, 11
掛川西	チーム掛プロ（いいね！賞）	SDGsから見た掛川城プロジェクションマッピング	4, 11
富士市立	丘地区チーム	ソーラーライトで街を明るく	11
	吉永地区チーム	YOSHINAGA GREEN PROJECT	11

オ 本校からの参加チーム 1・2年生HR代表チーム、海外研修チーム 計21チーム

5 入学者選抜

(1) 静岡県の高校入試制度について

静岡県の公立高等学校の入学者選抜制度を受け、本校一般選抜では、県共通の方法による共通枠と本校が独自に定める学校裁量枠との2つの選択枠を設けている。共通枠では調査書・学力検査・面接の選抜資料を用い選抜作業を行う。一方学校裁量枠では、共通枠の選抜資料に加え、実技検査などの学校独自の選抜資料を加えた審査により、合格者を決定する。

(2) 平成29年度までの本校学校裁量枠入試について

平成26年度入学生選抜試験までは、本校では上記入試制度の学校裁量枠により、実技と意欲を審査した結果を選抜資料とし5つの運動部での活躍を目指す生徒を選抜してきた。

しかし、SGH指定校となったことを、入学者選抜にも生かすべきではないか、との運営指導委員会等からの指摘により、平成27年度入学生選抜試験より、「スーパーグローバルハイスクールへの適性」を見る選抜方法として、入学定員の3%（9人相当）を「グローバルな社会課題に対する関心及びグローバルリーダーとしての活動意欲、実績や適性」の審査を、学校裁量枠Ⅱとして実施することとした。志願状況は以下の通りである。

	平成27年度			平成28年度			平成29年度		
	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計
志願者数	5	15	20	3	9	12	1	11	12
合格者数	2	8	10	1	6	7	1	6	7
内海外研修参加者数	1	4	5	1	6	7	1	6	7
海外研修参加者総数	4	10	14	2	11	13	2	11	13

(3) 平成30年度からの学校裁量枠について

平成30年度入試に当たっては、入学生がSGH指定期間に活動できるのは1年間のみという時間的な課題を受け、本校のSGH後の教育活動に資する裁量枠入試の枠組みを構築する必要があった。そこで、国際交流部が部活動としても活躍していることを受け、運動部で実施してきた実技能力や意欲に関する審査を行う裁量枠Ⅰに、これまでの裁量枠Ⅱの定員を加えて実施することとした。

実技はディベートを軸に構成したが、中学校でディベート活動を行う部活動はほぼ無いことを鑑み、中学校の学習指導要領における総合的な学習の時間の目標にある「自ら課題を見付け、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力」や「問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度」を軸に評価項目を構成し、ループリックを作成したうえで評価を行った。また意見交換のテーマも同様に、総合的な学習の時間の目標から「自己の生き方を考える」ことができるものとし、平成30年度入試では「日本は英語を公用語とし、小学校から全ての教科を英語で教えるべきである」とした。結果としては、志願者5人（内男子1人）が受験し、全員を裁量枠Ⅰでの合格とした。

この選抜方法は、平成31年度入試でも同様に実施する予定である。

第4章 課題探究を通した論理的・批判的思考力の育成

1 測定ツールの開発

(1) 概要

昨年度から作成及び実施を始めた論理的思考力テストを、今年度は全学年生徒を対象に9月に実施した。また、同時期に県内の複数校に、同問題での実施を依頼した。

(2) 平成29年度問題の分析

平成29年度1回目のテストについては、本校の課題意識としては「生徒にもともとあった力なのか、それとも学習の結果習得した力なのか、差異が結果に出てこないこと」「勉強していなくても、新聞を読んでいるだけで(現代社会への関心度が高ければ)9月の問題は解けてしまうこと」があげられる。また、河崎准教授よりご指摘いただいた点も、改善すべき点だった。

SGH事業の中で作成したい論理力テストは、授業でやったことではなく、普遍的な論理的思考力を図るためのテストである、という前提を確認しながら、昨年度に引き続き、静岡大学の河崎美穂准教授に御指導をいただき、昨年度第2回目のテスト問題を検証・分析していただいた。

河崎准教授の分析は以下による。

- ・昨年度の1月のテストの方が直接踏み込んだ出題になっている。出題の不自然さが少ない。ある結論に向けた根拠の妥当性を問う問題であり、生徒に対してフェア。
- ・問題解決の手法の効果の妥当性を問う問題もよい。
- ・設問が簡単すぎると、もともと本人が持っている力だけで解けてしまう。
- ・1年生では正答率が低く、2・3年生は正答率が上がったという結果が最後にデータで出てくるテストが良問。
- ・測りたい力(問題解決力)に近い問題かどうかと、結果が序列化できる問題かどうかは別。
- ・単純に選択肢を増やせば難易度が上がって差異が出る、というわけではない。(センター試験でも、選択肢が増えると受験生は選択肢の分析に走ってしまう。局所的にしか読まないテクニックに走ることがわかっている。)
- ・まずは妥当な問いを作ることが肝心。選択肢数などは後付け。
- ・昨年度の1月の問題が、それぞれの程度の正解率だったのかをしてみる必要がある。
- ・今年5月の時点で1年生がある程度解ける昨年の9月型の問題は、他の学校の生徒も解けると思われる。

(3) 平成30年度の問題作成方針 (参照：pp. 79-80)

平成30年度は、他校との比較や、普通教科学力との相関分析も念頭におき、ある程度点数に差がつくような問題作成に取り組んだ。そして、河崎准教授の「設問が簡単すぎると、もともと本人が持っている力だけで解けてしまう」との助言もあり、考える必要のある問題作成に心がけた。

前述の指摘から、【1】には「問題解決の手法の効果の妥当性を問う問題」として、昨年度第1回テストで利用した課題解決の流れに関する問題を修正し、流れの中に論理の飛躍や方向性のズレ等があり、課題解決の妨げになる部分を探す問題を作成した。これは複数回答も可とした。【2】には、2文のつながりを正しく理解できているかを問うために、接続詞の使い方に関する問題を新たに加えた。【3】は、昨年度第2回で実施したディベートの賛成論と反対論の考え方を応用した問題とした。

2 校内実施結果

(1) 調査概要

実施日時 平成30年9月6日(木) 午前8時10分から8時20分(10分間)

対象者数 1年生 291人 2年生280人 3年生284人 計855人

(2) 結果概要

問題	【1】		【2】		【3】										平均点
マーク番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
全体	12.4%	38.4%	74.0%	40.0%	78.7%	89.9%	67.7%	16.0%	39.6%	65.6%	31.2%	8.8%	26.5%	89.6%	6.79
1年生	13.1%	33.7%	70.8%	37.1%	74.9%	86.6%	64.9%	15.8%	38.1%	66.0%	26.8%	8.9%	22.7%	89.7%	6.49
2年生	16.1%	42.1%	72.1%	42.5%	80.7%	94.3%	69.3%	18.2%	41.1%	66.8%	33.6%	8.9%	25.7%	91.1%	7.03
3年生	8.1%	39.4%	79.2%	40.5%	80.6%	89.1%	69.0%	14.1%	39.8%	64.1%	33.5%	8.5%	31.3%	88.0%	6.85

(3) 問題別分析

ア 【1】課題解決のプロセスに関する問題

マーク番号1は3年生の正答率(8.1%)が2年生(16.1%)の半分という低い結果になった。誤答を分析すると、複数回答を完全回答とした設問だったにも関わらず、3年生は1か所しかマークのない生徒が他学年より1割程度多かったことから、ここに原因を探ることはできる。マーク番号1、2とも、2年生の正答率が最も高かった。

イ 【2】2文の論理的関係を理解する問題

「なぜなら」「したがって」という二つの接続詞の間違った使い方を問う問題である。マーク番号3は全体正答率も7割を超え、3年生の正答率が最も高い。マーク番号4の問題は正答率が4割程度で、1年生と2年生の正答率は5%ほど違いがある。国語の表現力を測る問題とも捉えることができるため、工夫が必要である。

ウ 【3】ディベートの考え方を応用した問題

正答率が高かったのは、マーク番号6(89.9%)と14(89.6%)、低かったのはマーク番号8(16.0%)と12(8.8%)である。8、12ともに誤答が特定の選択肢に集中していることから、間違いやすい選択肢に惑わされた生徒が多かったといえる。

エ 総括

1年生の正答率が2年生よりも高かった問題はないが、3年生の正答率が最も高かった問題もマーク番号13のみだった。課題研究に携わっていない3年生の正答率が低いことは、このテスト問題で測った力はいったん身に付ければ永続的に使えるものではなく、常に使っていることで伸びていく力であると考えられる。

(4) 一般教科学力との相関

1・2年生の論理的思考力テストを、7月に実施したBenesse社の進研模試総合学力テストの結果と比較してみた。比較方法としては、Benesse社が偏差値レベルにより定めるゾーン別に、論理力テストの平均点をみる、という手法をとった。結果は以下のとおりである。

ゾーン	1 年生				2 年生	
	7 月		11月		7 月	
	人数	平均点	人数	平均点	人数	平均点
S以上	17	7.18	20	6.05	11	6.82
A1	21	7.10	19	7.67	8	6.75
A2	53	6.75	49	6.56	22	7.05
A3	68	6.54	64	6.90	41	7.00
B1	57	6.28	76	6.56	63	7.24
B2	60	6.22	49	5.98	78	7.17
B3以下	15	5.60	21	5.35	83	6.86

2年生では、ゾーンと論理的思考力テストの点数に相関はなかったが、1年生は、ゾーンが上がるのに従って、論理的思考力の平均点も高くなり、極めて関連性が高いことがわかった。7月期が入学から3か月しか経っていない時期の模擬試験だったことを鑑み、11月の進研模試総合学力テストの結果とも比較してみたが、Sゾーン以上の生徒の論理的思考力テスト平均点が低かったことを除けば、ほぼ比例している。

さらに、教科との関連性を見るために、1年生の論理的思考力テスト結果を教科別偏差値とも比較してみた。手法は、個々の生徒の偏差値と論理的思考力テスト合計点を比較する方法と、偏差値をもとにグループを作りそのグループごとに平均点を算出する方法の2種類をとった。個々の偏差値との相関はほとんどなかったが、11月の国語と英語の偏差値グループの平均点とはほぼ正比例の関係が見られた。

教科	国語				数学				英語			
時期	7 月		11月		7 月		11月		7 月		11月	
偏差値帯	人数	平均	人数	平均	人数	平均	人数	平均	人数	平均	人数	平均
65以上	31	6.75	53	6.96	34	6.82	26	5.96	37	6.70	39	6.95
65-60	55	6.89	67	6.76	41	6.24	29	7.31	59	6.88	54	6.67
60-55	60	6.62	69	6.52	62	6.89	36	6.83	68	6.44	79	6.47
55-50	77	6.22	51	6.12	68	6.51	76	6.58	75	6.40	65	6.43
50-45	42	6.55	36	6.14	54	6.26	76	6.14	42	6.00	37	6.11
45未満	26	5.54	15	5.60	32	6.03	48	6.44	10	6.50	17	6.06
相関係数	0.18		0.18		0.09		0.04		0.11		0.15	

2年生と1年生の模擬試験の大きな違いは、1年生のテスト問題から、大学入試の新しい傾向に合わせた設問が増えたことにある。新傾向の問題自体と論理力テストの点数に相関は見られないが、問題全体の質そのものが、知識を問うものから論理力を問うものにシフトしているとすれば、この結果は、開発している論理的思考力テストの有効性を示すものといえる。一方、国語力を問うだけの問題になってしまっている恐れもあり、慎重な判断が必要だと思われる。

この論理力テストは、SGH指定期間終了後も継続実施できれば、これからの学力観に添ったテストとして有効に利用できるものと考えられる。

3 他校実施結果

(1) 調査概要

対象校		1 年生			2 年生		
		偏差値※	人数	平均点 (順位)	偏差値	人数	平均点 (順位)
A	東部①	64.3	73	6.56 (－)	62.1	71	6.96 (－)
	理数科	－	35	6.70 (1)	－	39	7.69 (1)
	普通科	－	38	6.40 (3)	－	35	6.14 (4)
B	東部②	53.0	80	5.43 (4)	49.6	81	6.90 (3)
C	東部③	－	23	3.65 (6)	－	32	4.03 (6)
D	西部	－	38	5.26 (5)	－	42	5.64 (5)
E	本校	56.5	291	6.49 (2)	54.0	280	7.03 (2)

※ 偏差値はBenesse進研模試総合学力テスト7月（国数英総合 学校平均偏差値）

C校とD校は、データなし

実施時期 平成30年9月3日（月）から14日（金）任意の1日の10分間

問題内容 本校9月実施問題と同じ問題

(2) 結果概要 ※ 網掛けは、各問題の得点率上位3校／学科

問題		【1】		【2】		【3】									
マーク番号		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
1 年 生	A理	7.9%	34.2%	60.5%	44.7%	81.6%	97.4%	68.4%	13.2%	39.5%	78.9%	23.7%	2.6%	28.9%	89.5%
	A普	20.0%	20.0%	77.1%	37.1%	68.6%	80.0%	62.9%	17.1%	42.9%	57.1%	40.0%	20.0%	17.1%	80.0%
	B	13.8%	26.3%	63.8%	30.0%	52.5%	78.8%	52.5%	27.5%	23.8%	42.5%	20.0%	12.5%	27.5%	71.3%
	C	4.3%	21.7%	47.8%	17.4%	39.1%	60.9%	34.8%	21.7%	17.4%	21.7%	8.7%	17.4%	13.0%	39.1%
	D	2.6%	28.9%	60.5%	34.2%	47.4%	63.2%	55.3%	18.4%	47.4%	47.4%	10.5%	23.7%	18.4%	68.4%
	E	13.1%	33.7%	70.8%	37.1%	74.9%	86.6%	64.9%	15.8%	38.1%	66.0%	26.8%	8.9%	22.7%	89.7%
2 年 生	A理	20.5%	33.3%	92.3%	56.4%	87.2%	97.4%	79.5%	15.4%	46.2%	76.9%	20.5%	20.5%	28.2%	94.9%
	A普	14.3%	25.7%	71.4%	42.9%	80.0%	85.7%	71.4%	5.7%	37.1%	60.0%	25.7%	5.7%	14.3%	74.3%
	B	9.9%	38.3%	77.8%	44.4%	76.5%	87.7%	67.9%	21.0%	35.8%	66.7%	30.9%	23.5%	25.9%	84.0%
	C	3.3%	26.7%	63.3%	43.3%	30.0%	46.7%	26.7%	13.3%	20.0%	26.7%	10.0%	26.7%	16.7%	36.7%
	D	9.5%	23.8%	73.8%	40.5%	52.4%	76.2%	73.8%	14.3%	28.6%	47.6%	26.2%	4.8%	21.4%	71.4%
	E	16.1%	42.1%	72.1%	42.5%	80.7%	94.3%	69.3%	18.2%	41.1%	66.8%	33.6%	8.9%	25.7%	91.1%

(3) 分析

ア 偏差値レベルと論理的思考力テストの相関について

他校との比較調査では、まず、模試の偏差値の差異ほど、トップ校との差が出なければ、SGHの教育効果が論理的思考力に反映したことになるのではないかと仮説を立てた。そこで同じ

模擬試験を受けた3校A校（地区トップ校）、B校（地区中堅校）及びE校（本校）を比較すると、1年生の模擬試験の偏差値平均ほど、論理的思考力テストの平均点はA校とは変わらないことがわかる。2年生も、A校普通科の論理的思考力テスト平均点よりも本校平均の方が高く、本校が育てようと考えていた力を測れていたことが理解できる。一方、A校理数科の平均点や設問別得点率は、いずれも高水準であり、この要因を、偏差値に求めることも可能だとは考える。ただ、A校理数科の生徒は一般教科の学習に加えて、課題研究に取り組んでいることを鑑みると、自ら課題を設定し、その解決に向けてプロセスに従って取り組む活動は、この論理的思考力テストで測りたい力をつけるのに有意義な活動であるといえる。それは、課題研究活動に取り組んでいないA校普通科2年生の論理的思考力テスト平均点が、本校2年生平均点よりも低いことから理解できる。またB校の2年生の各問題の得点率が高いことも特徴的である。この要因の分析については、今後B校と協力し実施していきたい。

イ 設問別正答率の特徴について

A校理数科1年生の正答率が極端に低い問題がマーク番号1と12である。マーク番号1は、複数回答の問題であり、本校3年生も点数が低かったことから、同じ要因と考えられる。マーク番号12は、「ふるさと納税は促進されるべきだ」というお題に対する「役所の職員のモチベーションがあがる」という主張は「賛成とも反対ともいえない、もしくは、いえる」が正答の問題で、最も多い誤答は「賛成意見だが、客観的な事実や論理的なつながりがないため有効ではない」の選択肢である。C校は、受検者が少なかったことと同時に、この文だけでは実際のところ賛成か反対かわからない、という極めてシンプルな結論を素直に出せたことが1、2年生ともに正答率が高かった要因になるのではないかと考えられる。

4 総括

2年間かけて開発し、実施してきた論理的思考力テストは、ほぼ何もない状態から問題作成から始めたものの、バイアスのかかりにくい題材の選び方や設問の方向性などが整理され、今後活用していくためのパターンが完成したと考えられる。来年度から週時程に組み込み実施する「総合的な学習（探究）の時間」では、ルーブリックによる評価が中心となると考えられるが、例えばこの論理的思考力テストを学年の途中で実施し、生徒の批判的思考力や課題発見力を客観的に測ることで、その後の指導に生かしていくような形で利用できるのではないかとと思われる。

また、この結果を一般教科の学力テストと組み合わせることで、例えば、学力テストの点数が低くても、論理的思考力に長けている生徒には、課題研究の実績を使ったAO入試受験を勧める、逆に学力テストの点数が高く、論理的思考力テストの点数は低い生徒には、一般入試受験を勧める、など進路指導に生かせる方法も考えられる。

複数の高校の先生方と協力しながら、生徒が楽しくできるようなテストの開発を、今後も継続していきたいと考えている。

<参考資料>

1 平成30年度教育課程表

学校番号			12	学校名		静岡県立三島北高等学校			課程等		全日制	
平成30年度 教育課程表 (甲)												
教科	科目	標準時数	学科等	普通科					週当たり授業時数			
			学年	1 年		2 年		3 年				
			類型	普通	文系	理系	文系	理系	科目別	教科別		
国語	国語総合	4	5 (7)							35	112	
	現代文B	4		2 (4)	2 (3)	3 (4)	2 (3)		32			
	古典B	4		3 (4)	2 (3)				18			
	国語総合演習	3				(1) 2	3 (3)		11			
	古典演習	4				4 (4)			16			
地理歴史	世界史A	2	2 (7)							14	77	
	世界史B	4		3 (4)		(2) 3			18			
	日本史B	4		3 (4)	(1) 3 ※	(3)	(1) 3 ※		27			
	地理B	4			(3)		(3)		18			
公民	現代社会	2	2 (7)							14	34	
	倫理	2				2 (4)			8			
	政治・経済	2				3 (4)			12			
数学	数学Ⅰ	3	3 (7)							21	130	
	数学Ⅱ	4	1 (7)	4 (4)	4 (4)				39			
	数学Ⅲ	5			1 (4)		3 (4)		16			
	数学A	2	1 (7)						7			
	数学B	2		2 (4)	2 (4)				16			
	数学演習α	2				(3)			6			
	数学演習β	3				(3) 3	(1) 4		13			
	数学演習γ	4					(3)		12			
理科	物理基礎	2	2 (7)							14	109	
	物理	4			(2) 3 ※		(3) 4 ※		18			
	化学基礎	2		2 (4)	2 (3)				14			
	化学	4			2 (3)		4 (3)		18			
	生物基礎	2	2 (7)						14			
	生物	4			(2)		(2)		14			
	化学基礎演習α	2				2(3)			6			
	化学基礎演習β	1				1(0)	3		0			
	生物基礎演習α	2		2 (4)					8			
	生物基礎演習β	1				1(3)			3			
	生物演習	3				(0)			0			
保健体育	体育	7~8	3 (9)	2 (12)	2 (文系へ)	2 (10)	2 (文系へ)		71	92		
	保健	2	1 (9)	1 (12)	1 (文系へ)				21			
	ライフスポーツ	3				(0)			0			
芸術	音楽Ⅰ	2	(4) 2						8	24		
	美術Ⅰ	2	(4)						8			
	書道Ⅰ	2	(4)						8			
外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	3 (7)							21	141	
	コミュニケーション英語Ⅱ	4		4 (4)	4 (3)				28			
	コミュニケーション英語Ⅲ	4				2 (4)	2 (3)		14			
	英語表現Ⅰ	2	2 (7)						14			
	英語表現Ⅱ	4		2 (4)	2 (3)	3 (5)	3 (4)		41			
	英語演習α	3				(2)			6			
	英語演習β	3					(1)		3			
	英語演習γ	2				2 (4)	2 (3)		14			
家庭	家庭基礎	2	2 (7)						14	14		
SGH	LWI	1	1 (7)						7	21		
	GW	2		2 (4)	2 (3)				14			
教科合計				32	32	32	32	32		754		
羅針盤				3~6	I<	I><	I>	I>	21	21		
合計				33	33	33	33	33		775		
特別活動	ホームルーム活動			1	1	1	1	1	0			
備考				1年次数学は、10月まで数学Ⅰ、10月から12月までを数学A、その後数学Ⅱを履修する。 2年次文系数学は、11月まで数学Ⅱ、その後は数学Bを履修する。 2年次理系数学は、10月まで数学Ⅱ、10月から1月まで数学B、その後数学Ⅲを履修する。 2年次理系理科は、9月まで化学基礎、その後化学を履修する。 3年次理系数学は、7月まで数学Ⅲ、その後数学演習βまたは数学演習γを履修する。 3年次外国語は、9月までコミュニケーション英語Ⅲ、その後英語演習γを履修する。2年次SGHのGWは、社会と情報の代替科目として履修する。								

2 学校設定科目シラバス 平成30年度

LWI (Local Water Issues)

教科	SGH	単位数	1単位	学年	1年	集団	必修・全クラス
使用教科書	橋本淳司『通読できてよくわかる 水の科学』（ベレ出版）						
副教材等							

1 学習の目標

「富士山の恵みの水を守る・生かす」をテーマに、地域と水問題に関する課題を設定し、その課題の解決を図る学習を通して「SGH課題研究」の目標に示された能力と態度を育てる。

2 科目の特色

SGH課題研究では、学習方法として課題基盤型学習（PBL）、反転学習、アクティブラーニングを活用する。

3 学習の計画

（次ページに掲載）

4 評価の観点・方法

評価は、次の4つの観点から行います。

社会課題に対する関心	地域的な水についての問題に関心をもち、主体的に問題の解決をしようとする意欲とともに、他者とコミュニケーションを図ろうとする態度を身に付けている。
問題解決力	水についての問題を自ら設定し、その解決策を創造的に探究する過程を通して論理的・批判的な思考力を活かしている。また、他者と協働して問題を解決している。
コミュニケーション能力	コミュニケーションの基礎的・基本的な技能を身に付け、考えを言語やデータを用いて論理的に伝えている。また、非言語的な要素を取り入れて共感的に表現し、聴いたことに対して質問などを適切にしている。
深い教養	教科横断的に、水に関する科学的な基礎知識を身に付け、自ら設定した水についての問題に関する国際的、社会的、文化的な背景を理解している。

このため、評価は、具体的には次のものを対象とします。

- ・グループディスカッション、アクティビティ（観察）
 - ・相互評価・自己評価（振り返りシート）
 - ・地域と水問題（日本語レポート）
 - ・フィールドワーク（レポート・プレゼンテーション）
 - ・地域と水（日本語レジュメ・日本語ポスター・日本語ポスターセッション）
 - ・地域と水（英語ポスター・英語ポスターセッション）
- これらを総合的に判断し、年度末に評価します。

5 特に強調しておきたい点

- ・授業は主に話し合いなどの言語活動を中心に行われる。家庭学習として事前に授業に関する資料等を読んだり、調べたりして理解しておく必要がある場合がある。
- ・研究をチームで共有したり、途中経過の様子を報告したりするために、Classiを活用することが必要である。

★テストを実施しないので、単元名ごとの区切りで示してあります

月	単元名	指導項目	主な学習活動（指導内容）と評価のポイント	留意点
4	課題発見の準備とチームビルディング	初期指導	- 課題図書（水の科学）を読み、水に関する基礎知識を得る。 - 初期指導 （午前）2年生によるアクティブラーニング指導を受け、グループ内で協力しながらタスクに取り組む。4つのテーマに関する外部有識者によるショートレクチャーを受け、テーマの概要を理解する。 （午後）グループに分かれて外部有識者による講義を聴き、得た知識や問題提起について、他の講義を聞いてきた生徒と共有する。 [LWIの概略を知り、水に関する科学的な基礎知識を身に付ける【深い教養】]	グループによる活動のやりかたに慣れ、グラウンドルールに則った活動をする。
		アクティビティとチーム作り	- 外部有識者による問題提起(Blue Traveller)の活動に取り組む。 - 地下水の汚染に関する活動(A Grave Mistake)に取り組み、問題解決の流れを理解する。 - 過年度の先行研究の概略や発表の様子を動画で視聴し、自分たちのゴールイメージをつかみ、関心のあるテーマごとにチームを作る。 [社会課題を発見することができる【社会課題に対する関心】]	アクティビティで用いた英語の単語は2学期以降発表で用いる。電子辞書等を用い各自で語彙を増やしておく。
5	課題設定とフィールドワーク	課題設定	- 問題解決の流れに則り、「現状」と「理想」を隔てるものが何かを考察し、理想の状態にするためにどのような課題を設定して研究するかチーム内で話し合う。 - 課題設定の妥当性について外部有識者の指導を受け、課題の練り直しをする。 [課題探究活動の手法を知る【問題解決力】]	セッションシートを作成し、これまでの問題解決の流れや質問事項を整理しておく。
6		フィールドワークの計画と実践	- チーム研究計画ガントチャート（英語ポスター制作まで）の策定 - 探究活動（フィールドワーク・実験等）準備 - フィールドワークの作法 [水に関する科学的な基礎知識を身に付ける【深い教養】] [コミュニケーションの基礎的・基本的な技能を身に付け、考えを論理的に伝えている【コミュニケーション能力】] - フィールドワーク、実験、観察等 - フィールドワーク報告書作成	外部の団体や施設を訪問する場合や、調査に協力をお願いする場合、事前にアポを取り、責任ある対応をする。
7		フィールドワークの振り返り	- 探究活動（フィールドワーク・実験等）成果をワールドカフェ方式で発表・共有する。 - 外部有識者により、フィールドワークを経た後の研究の方向性について指導を受け、問題解決の流れの妥当性を見直す。 [他者と協働して問題解決している【問題解決力】]	セッションシートとプレゼンスライド案を作成し、問題解決の流れや質問事項を整理しておく。
10	課題解決方法のグループ発表	日本語紙芝居プレゼンと日本語ポスターセッション	- 日本語紙芝居プレゼン準備と練習 - 日本語レジュメ作成 - 日本語紙芝居プレゼン（クラス発表）で相互評価する。 - 日本語ポスターセッション準備と練習、クラス代表を決める。 - 三北ウォーターフォーラム（日本語ポスターセッション） [水に関する科学的な基礎知識を身に付け、自ら設定した水問題に関する背景を理解している【深い教養】] [水問題を自ら設定し、その解決策を創造的に探究する過程を通して論理的・批判的な思考力を活かしている【問題解決力】] [コミュニケーションの基礎的・基本的な技能を身に付け、考えを言語やデータを用いて論理的に伝えている【コミュニケーション能力】]	プレゼンやポスターを制作する過程でも、研究は進めていく。
12		英語ポスターセッション	- 英語ポスター制作・日本語レジュメ修正 - 発表原稿作成（英語） - 英語ポスターセッション練習とクラス代表決定 [水についての問題を自ら設定し、その解決策を創造的に探究する過程を通して論理的・批判的な思考力を活かしている【問題解決力】] [コミュニケーションの基礎的な技能を身に付け、考えをデータ等を用いて論理的に伝えている【コミュニケーション能力】]	単なる英訳にならないよう、表現の工夫をする。ポスターを制作する過程でも、研究は進めていく。
1		(事業報告会)		
2		個人レポート	個人レポート	自分のチームの1年間の研究を個人で日本語レポートにまとめる
3	2年次課題研究に向けて	課題研究準備	- 外部有識者による講義（SDGs、2年次課題研究に向けて） - 自分が研究したいことを日本語でレポートにまとめる。（春休みの宿題） [水問題に関心を持ち、主体的に問題の解決をしようとする意欲とともに、他者とコミュニケーションを図ろうとすることができる【社会課題に対する関心】]	

平成30年度

GWI (Global Water Issues)

教 科	SGH	単位数	2 単位	学 年	2 年	集 団	必修・全クラス
使用教科書	沖 大幹『水の未来』（岩波新書）						
副教材等	沖 大幹『水の世界地図 第2版』（丸善）パーフェクトガイド情報（実教出版）						

1 学習の目標

- ・世界の水問題に関する課題を設定し、その課題の解決を図る学習を通して「SGH課題研究」の目標に示された能力と態度を育てる。
- ・情報社会を支える情報技術の役割や影響を理解させる。
- ・情報と情報技術を問題の発見と解決に効果的に活用するための科学的な考え方を習得させる
- ・情報社会の発展に主体的に寄与する能力と態度を育てる。

2 科目の特色

- ・SGH課題研究では、学習方法として課題基盤型学習（PBL）、反転学習、アクティブラーニングを活用する。
- ・文書作成・デザイン（ワードソフト）、統計分析（エクセルソフト）、プレゼンテーション（パワーポイントソフト）などのパソコン演習や情報通信ネットワークを活用した情報モラル・セキュリティと情報分析の演習などを行う。

3 学習の計画

（次ページに掲載）

4 評価の観点・方法

評価は、次の4つの観点から行います。

社会課題に対する関心	国際的な水についての問題に関心をもち、主体的に問題の解決をしようとする意欲とともに、他者とコミュニケーションを図ろうとする態度を身に付けている。
問題解決力	水についての問題を自ら設定し、その解決策を創造的に探究する過程を通して論理的・批判的な思考力を活かしている。また、他者と協働して問題を解決している。
コミュニケーション能力	英語・日本語によるコミュニケーションの技能を身に付け、考えを言語やデータを用いて論理的に伝えている。また、非言語的な要素を取り入れて共感的に表現し、聴いたことに対して質問などを適切にしている。
深い教養	教科横断的に、水に関する科学的な基礎知識を身に付け、自ら設定した水についての問題に関する国際的、社会的、文化的な背景を理解している。

評価は、具体的には次のものを対象とします。

- ・グループディスカッション、アクティビティ（観察）
 - ・相互評価・自己評価（振り返りシート）
 - ・世界の水問題（英語レポート）
 - ・フィールドワーク（レポート・プレゼンテーション）
 - ・世界の水（英語レジュメ・日本語レジュメ・英語ポスター・英語ポスターセッション）
- これらを総合的に判断して評価します。

5 特に強調しておきたい点

- ・授業は主に話し合いなどの言語活動を中心に行われる。家庭学習として事前に授業に関する資料等を読んだり、調べたりして理解しておく必要がある場合がある。
- ・研究をチームで共有したり、途中経過の様子を報告したりするために、Classiを活用することが必要である。

★テストを実施しないので、単元ごとの区切りで示してあります。

月	単元名	指導項目	主な学習活動（指導内容）と評価のポイント	留意点
4 5	課題発見の準備	GWIについて論理的に文章を組み立てる	- 外部有識者による問題提起 - アクティビティ [国際的な水問題を設定し、その解決策を創造的に探究することができる【問題解決力】]	個人で考えた課題について復習して授業に臨む。
	課題解決方法の個人探究	個人レポートを英文で仕上げる	- 個人課題探究活動（テーマ・仮説・検証・結果の流れ） - GWI英語個人レポート作成（1年次：GWI日本語レポート作成を受けて） [国際的な水についての問題に関心をもち、主体的に問題の解決をしようとする【社会課題に対する関心】]	ここで利用した英単語や表現はプレゼンやポスターに利用できるもので、しっかりおさえておく。
		副教材 2章	情報：文書作成（Wordの操作・レポートの組み立て方）：情報機器とデジタル表現、情報とメディア [適切に文書作成が行える]	
5 6	チームビルディングと課題研究計画	チームでの課題策定	- チーム作り - チーム課題（テーマ）の設定と発表 - チーム研究計画（英語ポスター制作まで）の策定（ガントチャート作成） - 課題策定指導（第1回外部有識者指導） [コミュニケーションの技能を身に付け、考えを論理的に伝えている【コミュニケーション能力】]	設定課題に対して同じアプローチを考えている生徒同士でチーム作り。必ずしも自分のテーマがチームのテーマとならないケースもある。
		副教材 1章	情報：PCの基本操作とWeb検索（ルールとマナー）	
		副教材 5章	情報：マルチメディアの活用[画像や動画を活用することができる]	
6 7	フィールドワーク	フィールドワークの計画と実践	- フィールドワーク準備（異文化理解講座、県や市町の国際交流協会主催研修会への参加や実験・観察等、計画案作成） - フィールドワーク実践 - 修学旅行課題策定準備 [国際的な水についての問題に関心をもち、主体的に問題の解決をしようとする【社会課題に対する関心】]	外部の団体や企業等への依頼方法や、依頼内容は適切か等確認し、責任ある対応をする。 ※修学旅行における質問事項準備も行う。
		副教材 3章	情報：表作成（Excelの操作：関数の利用法、グラフの作成、データ並べ替え等） [表やグラフ作成を適切に行うことができる]	
9		フィールドワークの振り返り、および外部有識者からの指導を受け、探究を深める	- フィールドワーク計画書まとめ作成とクラス発表 - チーム探究活動（チーム課題に対する探究） - 外部有識者による日本語レジュメ・プレゼン制作前指導（第2回外部有識者指導） - 日本語レジュメ・プレゼン作成 [コミュニケーションの技能を身に付け、考えを論理的に伝えている【コミュニケーション能力】] [水問題を設定し、その解決策を創造的に探究する過程を通して論理的・批判的な思考力を活かしている【問題解決力】]	セッションシートを利用して、問題解決の流れや質問事項を整理しておく。
		副教材 4章	情報：プレゼンテーションの方法（PowerPointの操作）[効果的なプレゼンを行うことができる] : コミュニケーションとネットワーク	
10		英語プレゼンテーション（準備） 修学旅行における研修	- チーム探究活動 - 英語レジュメ作成・英語プレゼン制作（大学生による支援） - シンガポール研修（現地にプレゼン・聞き取り調査等） [水に関する科学的知識を身に付け、自ら設定した水問題に関する国際的、社会的、文化的な背景を理解している【深い教養】]	単なる英訳にならないよう表現の工夫をする。
11	課題解決方法のグループ探究と発表	英語プレゼンテーション（発表）	- 英語レジュメ作成・英語プレゼン制作 - 英語プレゼン用原稿作成・プレゼン練習（進捗状況に応じて） - 英語プレゼン（クラス発表・代表決め） - 三北ウォーターフォーラム（英語プレゼンテーション）	ポスターを制作する過程でも、研究を深めていく。（実験の継続や、アクションの実行と振り返りの繰り返し等）
		英語ポスターセッション（準備）	- 英語レジュメ修正・英語ポスター制作 - ポスターセッション練習 [水に関する科学的な基礎知識を身に付け、自ら設定した水問題に関する国際的、社会的、文化的な背景を理解している【深い教養】] [コミュニケーションの技能を身に付け、考えを論理的に伝えている【コミュニケーション能力】]	
12			- 英語レジュメ修正・英語ポスター制作 - 発表原稿作成（英語）	プレゼンの発表とは違い、セッションであることを意識する。
1		英語ポスターセッション（発表&質疑応答）	- 英語ポスターセッション練習 - 英語ポスターセッション（英語ポスターを用いた英語による発表・クラス代表決め） [水問題を設定し、その解決策を創造的に探究する過程を通して論理的・批判的な思考力を活かしている【問題解決力】] [コミュニケーションの技能を身に付け、考えを論理的に伝えている【コミュニケーション能力】]	
		（事業報告会）	事業報告会（ポスターセッション）	
2	課題研究まとめ		修学旅行報告英語プレゼン作成・プレゼン練習	SDGsに関して個人的に関心ある課題についてレポートをかいいて、身につけてきた力を確認する。
3			- 修学旅行報告プレゼン大会（校内発表・3月） - SDGsにおける課題 個人レポート作成（日本語／3年次の英語表現Ⅱで英語にする）	

3 生徒対象アンケート

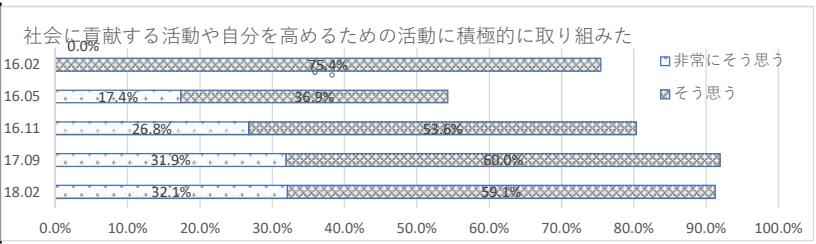
(1) アンケート用紙 ※平成30年度は2回ともClassiで実施。項目の変更はなし。

三島北高校 S G H 活動に関する調査					
HRNo. () 氏名 ()					
以下の1～16の項目について、自分の気持ちを「思わない」「あまり思わない」「そう思う」「非常にそう思う」の4段階から選び、該当する欄に○をつけてください。 また17、18の質問に対し、自分の考えを自由に記述してください。		非 常 に そ う 思 う	そ う 思 う	あ ま り 思 わ な い	思 わ な い
1	社会に貢献する活動や自分を高めるための活動（読書等も含む）に積極的に取り組みたい。				
2	高校在学中に留学や、海外への研修に行きたい。				
3	高校卒業後、留学や海外への研修に行きたい。				
4	将来、国際関係や英語を使う職業に就きたい。				
5	社会問題に対して興味や関心を持ち、ニュースや新聞を意識してみるようになった。				
6	地域課題に対する興味や関心を持ち、ニュースや新聞を意識してみるようになった。				
7	自分で設定した水に関する課題が、その他の国際的・社会的・文化的課題と関係していることがわかった。				
8	S G H の学習で身に付けた思考のプロセスを、他の学習や日常といった様々な場面でも応用するようになった。				
9	考える力が身に付いた。（洞察力、発想力、論理力）				
10	課題解決をしていく上で、物事を多面的に見る姿勢が身に付いた。				
11	自分の考えを他者が理解できるよう伝える力が身に付いた。				
12	日本語で自分の意見や考え、探究の成果を多くの人に伝える力が身に付いた。 （レポート作成、プレゼンテーション）				
13	英語で自分の意見や考え、探究の成果を多くの人に伝える力が身に付いた。 （レポート作成、プレゼンテーション）				
14	周囲と協力して取り組む姿勢が身に付いた。（協調性、リーダーシップ）				
15	学習に対して、自分から意欲的に取り組む姿勢が身に付いた。				
16	学習以外のことに對して、自分から意欲的に取り組む姿勢が身に付いた。 （自主性、やる気、挑戦心）				
17	（自由記述）あなたが思うグローバル人材とは、どのような人ですか？				
18	（自由記述）17番で記述したような人にあなた自身になるためには、どのような行動や考えが必要だと思いますか？				

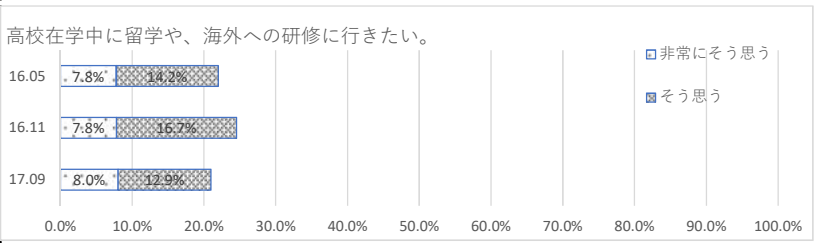
[illegible]

(2) アンケート集計結果
ア 平成27年度入学生

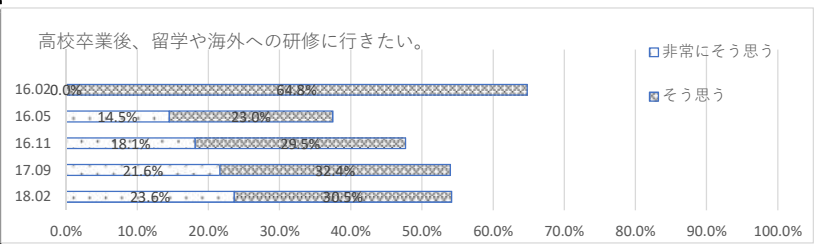
	18.02	17.09	16.11	16.05	16.02	15.10
非常にそう思う	32.1%	31.9%	26.8%	17.4%	0.0%	
そう思う	59.1%	60.0%	53.6%	36.9%	75.4%	
	0.0%	0.0%	0.0%	35.5%	0.0%	
あまり思わない	7.3%	6.3%	16.1%	9.9%	24.6%	
思わない	1.5%	1.8%	3.6%	0.4%	0.0%	
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	



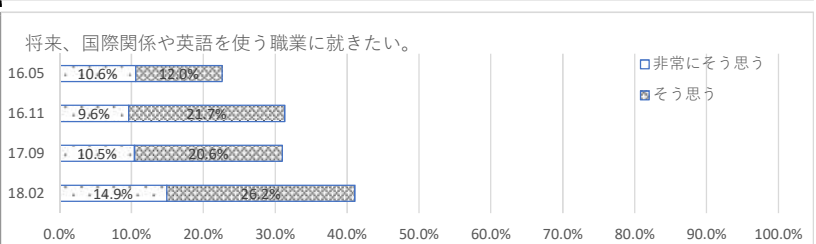
	18.02	17.09	16.11	16.05	16.02	15.10
非常にそう思う		8.0%	7.8%	7.8%		
そう思う		12.9%	16.7%	14.2%		
		0.0%	0.0%	25.5%		
あまり思わない		35.7%	37.4%	22.7%		
思わない		43.4%	38.1%	29.8%		
		100.0%	100.0%	100.0%		



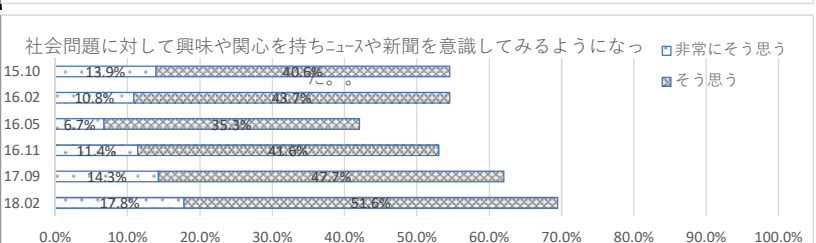
	18.02	17.09	16.11	16.05	16.02	15.10
非常にそう思う	23.6%	21.6%	18.1%	14.5%	0.0%	
そう思う	30.5%	32.4%	29.5%	23.0%	64.8%	
	0.0%	0.0%	0.0%	21.9%	0.0%	
あまり思わない	29.5%	25.1%	31.0%	20.1%	35.2%	
思わない	16.4%	20.9%	21.4%	20.5%	0.0%	
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	



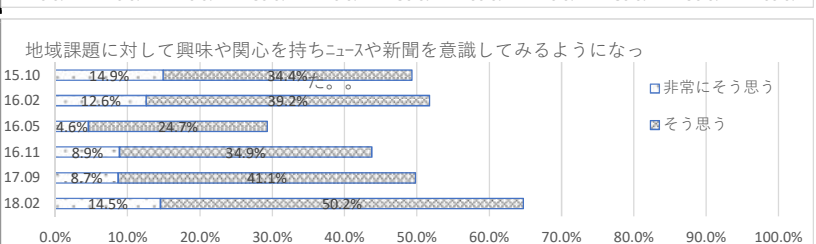
	18.02	17.09	16.11	16.05	16.02	15.10
非常にそう思う	14.9%	10.5%	9.6%	10.6%		
そう思う	26.2%	20.6%	21.7%	12.0%		
	0.0%	0.0%	0.0%	28.3%		
あまり思わない	34.5%	38.0%	38.1%	27.9%		
思わない	24.4%	31.0%	30.6%	21.2%		
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		



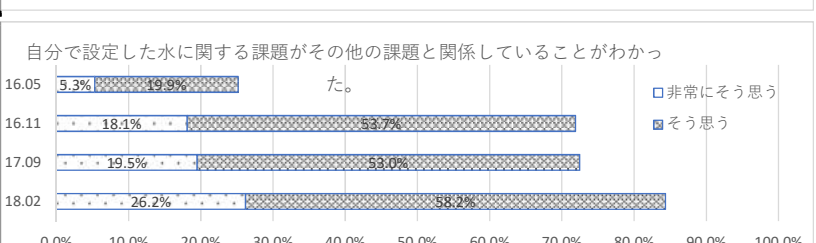
	18.02	17.09	16.11	16.05	16.02	15.10
非常にそう思う	17.8%	14.3%	11.4%	6.7%	10.8%	13.9%
そう思う	51.6%	47.7%	41.6%	35.3%	43.7%	40.6%
	0.0%	0.0%	0.0%	42.8%	31.5%	35.1%
あまり思わない	23.3%	30.0%	39.1%	12.0%	12.2%	9.4%
思わない	7.3%	8.0%	7.8%	3.2%	1.7%	1.0%
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%



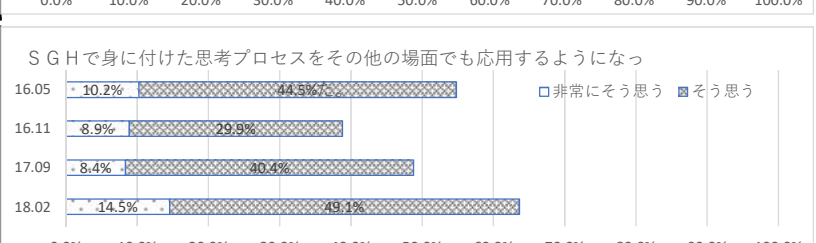
	18.02	17.09	16.11	16.05	16.02	15.10
非常にそう思う	14.5%	8.7%	8.9%	4.6%	12.6%	14.9%
そう思う	50.2%	41.1%	34.9%	24.7%	39.2%	34.4%
	0.0%	0.0%	0.0%	53.0%	33.6%	37.8%
あまり思わない	27.3%	38.3%	43.1%	13.4%	12.2%	11.5%
思わない	8.0%	11.8%	13.2%	4.2%	2.4%	1.4%
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%



	18.02	17.09	16.11	16.05	16.02	15.10
非常にそう思う	26.2%	19.5%	18.1%	5.3%		
そう思う	58.2%	53.0%	53.7%	19.9%		
	0.0%	0.0%	0.0%	45.4%		
あまり思わない	12.4%	20.6%	23.1%	22.7%		
思わない	3.3%	7.0%	5.0%	6.7%		
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		

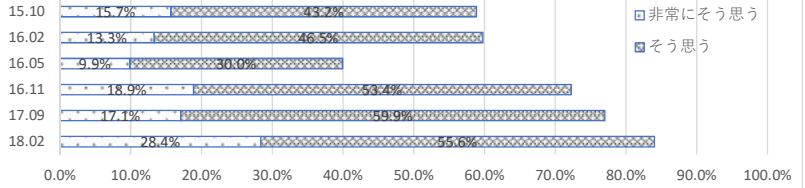


	18.02	17.09	16.11	16.05	16.02	15.10
非常にそう思う	14.5%	8.4%	8.9%	10.2%		
そう思う	49.1%	40.4%	29.9%	44.5%		
	0.0%	0.0%	0.0%	34.6%		
あまり思わない	29.8%	38.0%	46.3%	9.5%		
思わない	6.5%	13.2%	14.9%	1.1%		
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		



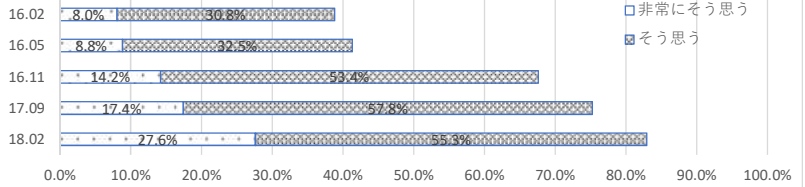
9	18.02	17.09	16.11	16.05	16.02	15.10
非常にそう思う	28.4%	17.1%	18.9%	9.9%	13.3%	15.7%
そう思う	55.6%	59.9%	53.4%	30.0%	46.5%	43.2%
	0.0%	0.0%	0.0%	47.3%	31.8%	34.5%
あまり思わない	12.7%	17.1%	22.4%	12.0%	6.6%	5.9%
思わない	3.3%	5.9%	5.3%	0.7%	1.7%	0.7%
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

考える力が身に付いた。



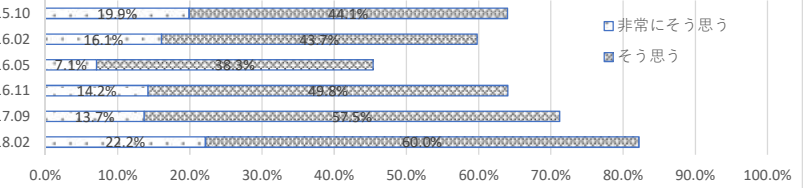
10	18.02	17.09	16.11	16.05	16.02	15.10
非常にそう思う	27.6%	17.4%	14.2%	8.8%	8.0%	
そう思う	55.3%	57.8%	53.4%	32.5%	30.8%	
	0.0%	0.0%	0.0%	46.6%	45.1%	
あまり思わない	14.2%	19.2%	26.0%	11.0%	13.6%	
思わない	2.9%	5.6%	6.4%	1.1%	2.4%	
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

課題解決をしていく上で、物事を多面的に見る姿勢が身に付いた。



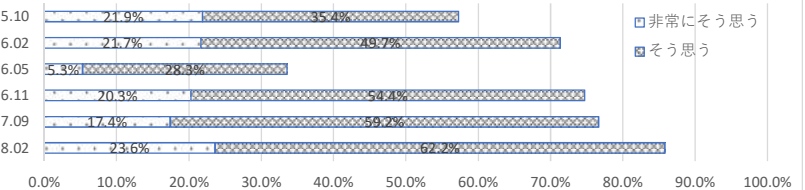
11	18.02	17.09	16.11	16.05	16.02	15.10
非常にそう思う	22.2%	13.7%	14.2%	7.1%	16.1%	19.9%
そう思う	60.0%	57.5%	49.8%	38.3%	43.7%	44.1%
	0.0%	0.0%	0.0%	44.3%	31.5%	28.3%
あまり思わない	15.6%	24.9%	31.0%	8.9%	8.4%	6.6%
思わない	2.2%	3.9%	5.0%	1.4%	0.3%	1.0%
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

自分の考えを他者が理解できるよう伝える力が身に付いた。



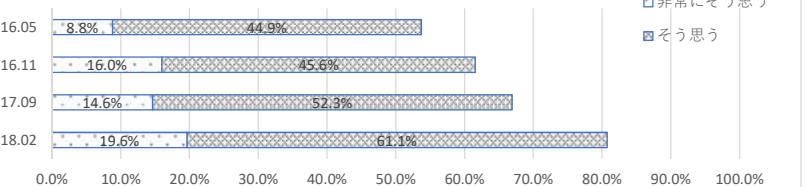
12	18.02	17.09	16.11	16.05	16.02	15.10
非常にそう思う	23.6%	17.4%	20.3%	5.3%	21.7%	21.9%
そう思う	62.2%	59.2%	54.4%	28.3%	49.7%	35.4%
	0.0%	0.0%	0.0%	44.5%	21.3%	33.7%
あまり思わない	11.3%	19.9%	22.4%	19.8%	5.9%	8.0%
思わない	2.9%	3.5%	2.8%	2.1%	1.4%	1.0%
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

日本語で自分の意見や考え、探求の成果を多くの人に伝える力が身に付いた。



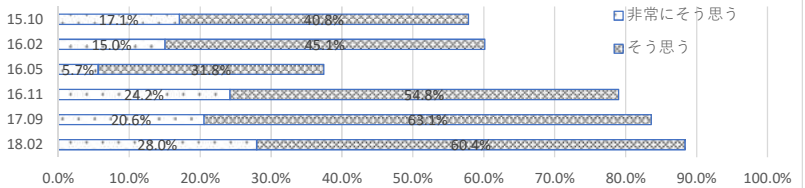
13	18.02	17.09	16.11	16.05	16.02	15.10
非常にそう思う	19.6%	14.6%	16.0%	8.8%		
そう思う	61.1%	52.3%	45.6%	44.9%		
	0.0%	0.0%	0.0%	37.1%		
あまり思わない	16.0%	27.5%	33.1%	8.5%		
思わない	3.3%	5.6%	5.3%	0.7%		
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		

英語で自分の意見や考え、探求の成果を多くの人に伝える力が身に付いた。



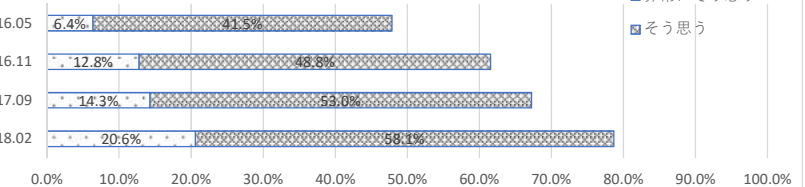
14	18.02	17.09	16.11	16.05	16.02	15.10
非常にそう思う	28.0%	20.6%	24.2%	5.7%	15.0%	17.1%
そう思う	60.4%	63.1%	54.8%	31.8%	45.1%	40.8%
	0.0%	0.0%	0.0%	45.6%	31.1%	35.5%
あまり思わない	9.1%	12.9%	18.1%	12.0%	7.7%	5.2%
思わない	2.5%	3.5%	2.8%	4.9%	1.0%	1.4%
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

周囲と協力して取り組む姿勢が身に付いた。



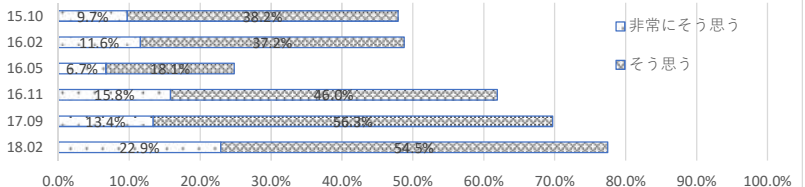
15	18.02	17.09	16.11	16.05	16.02	15.10
非常にそう思う	20.6%	14.3%	12.8%	6.4%		
そう思う	58.1%	53.0%	48.8%	41.5%		
	0.0%	0.0%	0.0%	40.1%		
あまり思わない	17.6%	26.5%	30.6%	10.3%		
思わない	3.7%	6.3%	7.8%	1.8%		
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		

学習に対して自分から意欲的に取り組む姿勢が身に付いた。

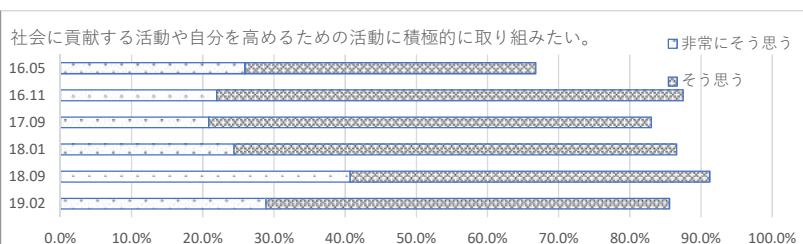


16	18.02	17.09	16.11	16.05	16.02	15.10
非常にそう思う	22.9%	13.4%	15.8%	6.7%	11.6%	9.7%
そう思う	54.5%	56.3%	46.0%	18.1%	37.2%	38.2%
	0.0%	0.0%	0.0%	39.7%	37.2%	41.3%
あまり思わない	17.8%	25.0%	31.3%	25.5%	13.0%	9.7%
思わない	4.7%	5.3%	6.8%	9.9%	1.1%	1.0%
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

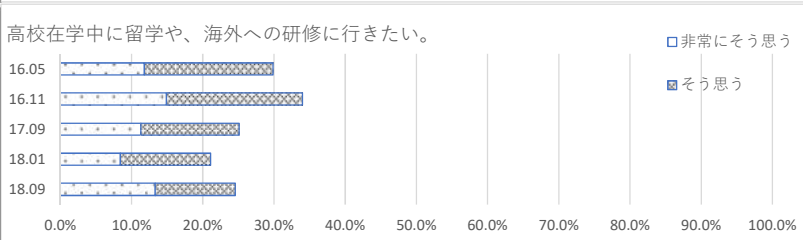
学習以外のことに対して自分から意欲的に取り組む姿勢が身に付いた。



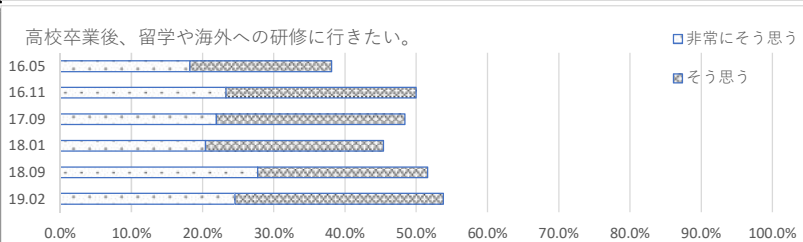
1	19.02	18.09	18.01	17.09	16.11	16.05
非常にそう思う	28.9%	40.7%	24.4%	20.8%	22.0%	26.0%
そう思う	56.7%	50.5%	62.2%	62.2%	65.5%	40.8%
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	26.3%
あまり思わない	12.6%	7.0%	11.7%	13.8%	9.4%	4.5%
思わない	1.8%	1.8%	1.8%	3.2%	3.1%	2.4%
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%



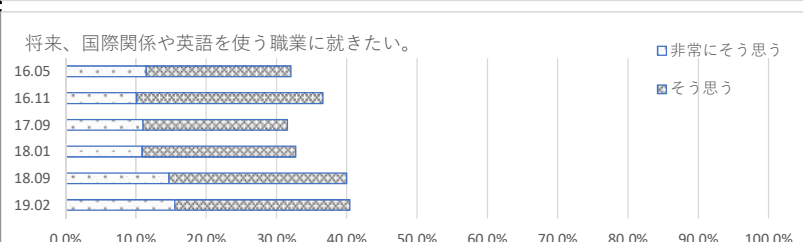
2	19.02	18.09	18.01	17.09	16.11	16.05
非常にそう思う		13.3%	8.5%	11.3%	14.9%	11.8%
そう思う		11.2%	12.7%	13.8%	19.1%	18.1%
		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	21.9%
あまり思わない		32.6%	36.3%	41.7%	37.8%	24.3%
思わない		42.8%	42.6%	33.2%	28.1%	24.0%
		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%



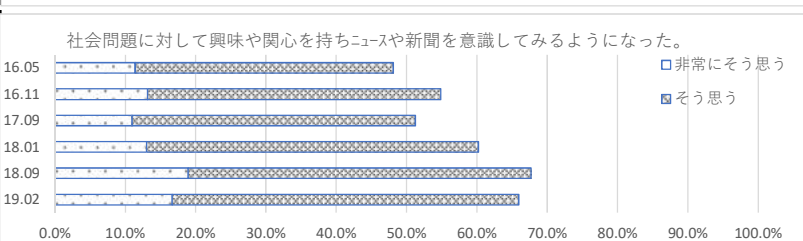
3	19.02	18.09	18.01	17.09	16.11	16.05
非常にそう思う	24.5%	27.7%	20.4%	21.9%	23.3%	18.2%
そう思う	29.2%	23.9%	25.0%	26.5%	26.7%	19.9%
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	24.5%
あまり思わない	23.8%	26.0%	29.6%	29.7%	28.1%	17.8%
思わない	22.4%	22.5%	25.0%	21.9%	21.9%	19.6%
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%



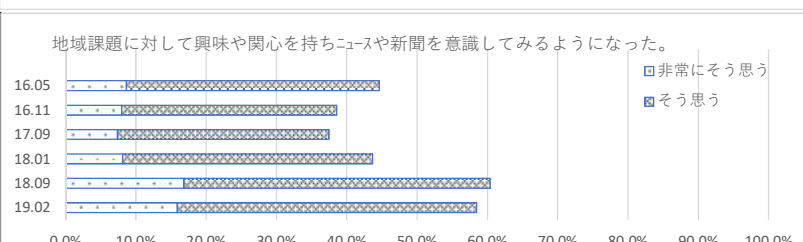
4	19.02	18.09	18.01	17.09	16.11	16.05
非常にそう思う	15.5%	14.7%	10.9%	11.0%	10.1%	11.5%
そう思う	24.9%	25.3%	21.8%	20.6%	26.5%	20.6%
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	30.3%
あまり思わない	36.1%	36.1%	39.1%	44.7%	40.4%	24.4%
思わない	23.5%	23.9%	28.2%	23.8%	23.0%	13.2%
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%



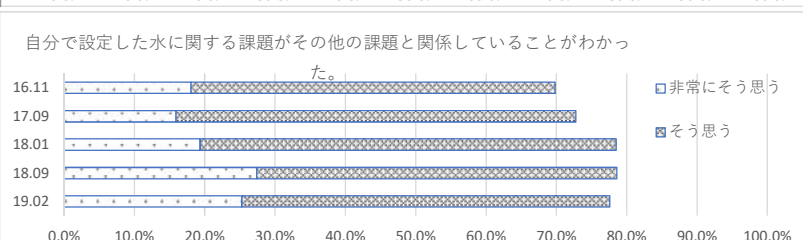
5	19.02	18.09	18.01	17.09	16.11	16.05
非常にそう思う	16.7%	18.9%	13.0%	11.0%	13.2%	11.4%
そう思う	49.3%	48.8%	47.2%	40.3%	41.7%	36.7%
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	39.4%
あまり思わない	25.7%	23.5%	31.3%	39.2%	34.4%	10.7%
思わない	8.3%	8.8%	8.5%	9.5%	10.8%	1.7%
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%



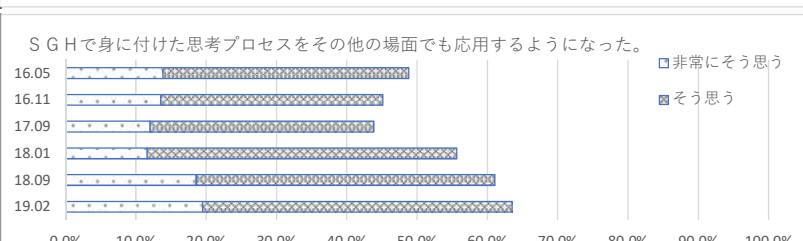
6	19.02	18.09	18.01	17.09	16.11	16.05
非常にそう思う	15.9%	16.8%	8.1%	7.4%	8.0%	8.7%
そう思う	42.6%	43.5%	35.6%	30.0%	30.6%	36.0%
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	36.7%
あまり思わない	31.0%	29.8%	43.3%	48.8%	45.8%	14.9%
思わない	10.5%	9.8%	13.0%	13.8%	15.6%	3.8%
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%



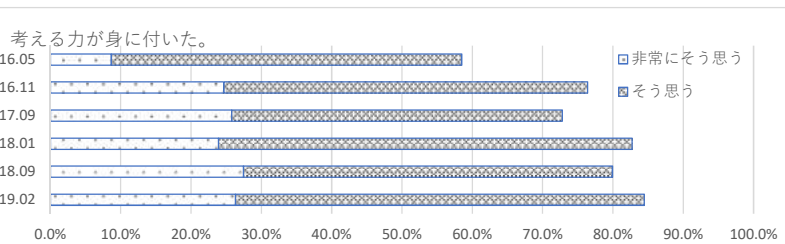
7	19.02	18.09	18.01	17.09	16.11	16.05
非常にそう思う	25.3%	27.4%	19.4%	15.9%	18.1%	
そう思う	52.3%	51.2%	59.2%	56.9%	51.7%	
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
あまり思わない	14.8%	14.7%	15.5%	20.5%	24.3%	
思わない	7.6%	6.7%	6.0%	6.7%	5.9%	
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	



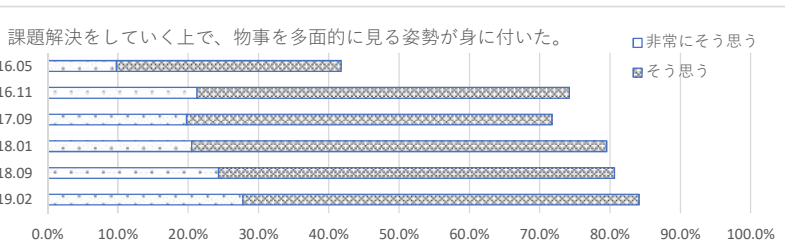
8	19.02	18.09	18.01	17.09	16.11	16.05
非常にそう思う	19.5%	18.6%	11.6%	12.0%	13.5%	13.8%
そう思う	44.0%	42.5%	44.0%	31.8%	31.6%	34.9%
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	38.8%
あまり思わない	27.4%	31.2%	35.9%	44.2%	43.8%	9.0%
思わない	9.0%	7.7%	8.5%	12.0%	11.1%	3.5%
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%



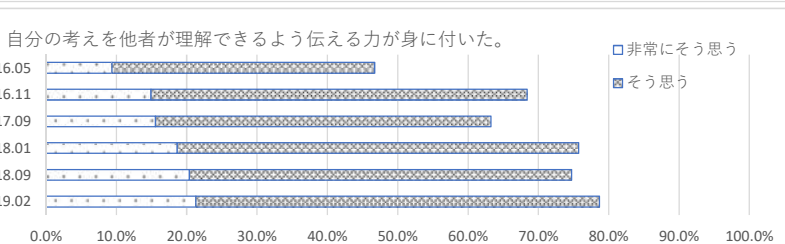
9	19.02	18.09	18.01	17.09	16.11	16.05
非常にそう思う	26.4%	27.5%	23.9%	25.8%	24.7%	8.7%
そう思う	58.1%	52.5%	58.8%	47.0%	51.7%	49.8%
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	33.6%
あまり思わない	10.8%	16.5%	14.4%	21.6%	19.1%	6.6%
思わない	4.7%	3.5%	2.8%	5.7%	4.5%	1.4%
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%



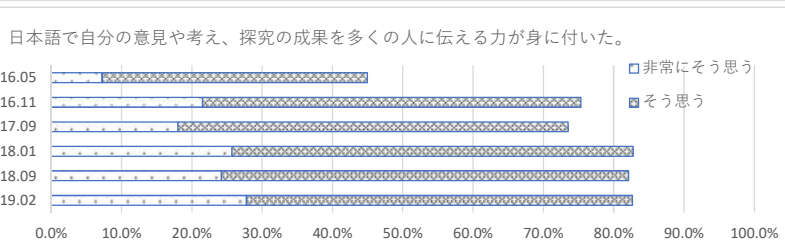
10	19.02	18.09	18.01	17.09	16.11	16.05
非常にそう思う	27.8%	24.3%	20.5%	19.8%	21.3%	9.8%
そう思う	56.3%	56.3%	59.0%	51.9%	53.0%	31.9%
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	46.0%
あまり思わない	10.5%	15.5%	17.3%	23.3%	22.3%	9.5%
思わない	5.4%	3.9%	3.2%	4.9%	3.5%	2.8%
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%



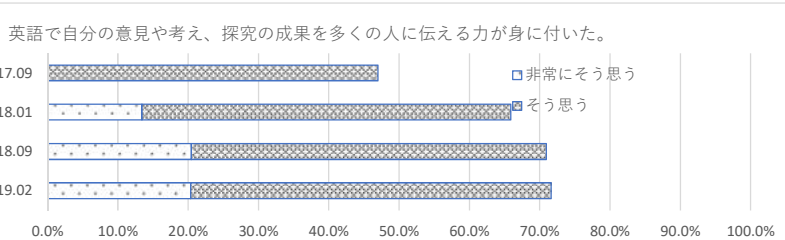
11	19.02	18.09	18.01	17.09	16.11	16.05
非常にそう思う	21.3%	20.4%	18.7%	15.5%	14.9%	9.3%
そう思う	57.4%	54.4%	57.0%	47.7%	53.5%	37.4%
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	43.9%
あまり思わない	17.3%	20.0%	20.4%	30.4%	27.8%	7.3%
思わない	4.0%	5.3%	3.9%	6.4%	3.8%	2.1%
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%



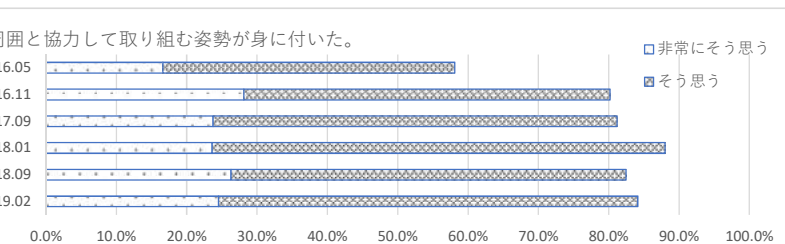
12	19.02	18.09	18.01	17.09	16.11	16.05
非常にそう思う	27.8%	24.2%	25.7%	18.0%	21.5%	7.3%
そう思う	54.9%	57.9%	57.0%	55.5%	53.8%	37.7%
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	43.3%
あまり思わない	13.7%	13.3%	15.1%	20.5%	22.6%	9.0%
思わない	3.6%	4.6%	2.1%	6.0%	2.1%	2.8%
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%



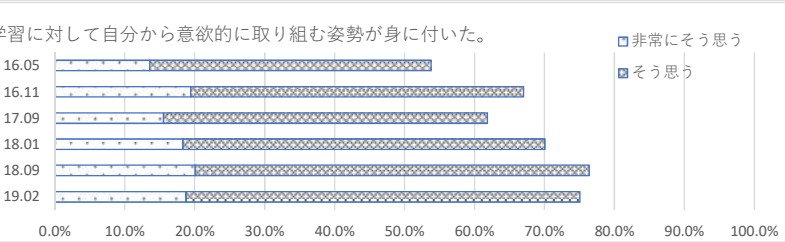
13	19.02	18.09	18.01	17.09	16.11	16.05
非常にそう思う	24.2%	20.4%	20.4%	13.4%		
そう思う	51.3%	50.5%	52.5%	47.0%		
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
あまり思わない	18.8%	23.2%	22.5%	32.5%		
思わない	5.8%	6.0%	4.6%	7.1%		
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%



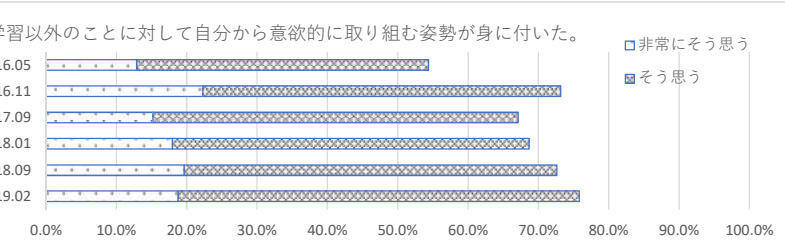
14	19.02	18.09	18.01	17.09	16.11	16.05
非常にそう思う	24.5%	26.3%	23.6%	23.8%	28.1%	16.6%
そう思う	59.6%	56.1%	64.4%	57.4%	52.1%	41.5%
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	33.9%
あまり思わない	12.3%	12.6%	9.2%	14.5%	16.7%	5.9%
思わない	3.6%	4.9%	2.8%	4.3%	3.1%	2.1%
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%



15	19.02	18.09	18.01	17.09	16.11	16.05
非常にそう思う	18.8%	20.1%	18.3%	15.5%	19.4%	13.5%
そう思う	56.3%	56.3%	51.8%	46.3%	47.6%	40.3%
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	35.4%
あまり思わない	17.7%	18.0%	26.1%	31.8%	28.8%	8.3%
思わない	7.2%	5.6%	3.9%	6.4%	4.2%	2.4%
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

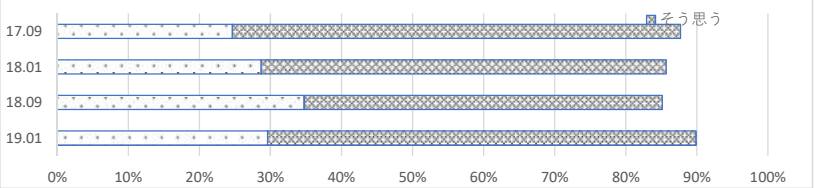


16	19.02	18.09	18.01	17.09	16.11	16.05
非常にそう思う	18.8%	19.6%	18.0%	15.2%	22.3%	12.9%
そう思う	57.0%	53.0%	50.7%	51.9%	50.9%	41.5%
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	36.2%
あまり思わない	17.0%	20.4%	25.7%	26.5%	21.6%	7.0%
思わない	7.2%	7.0%	5.6%	6.4%	5.2%	2.4%
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%



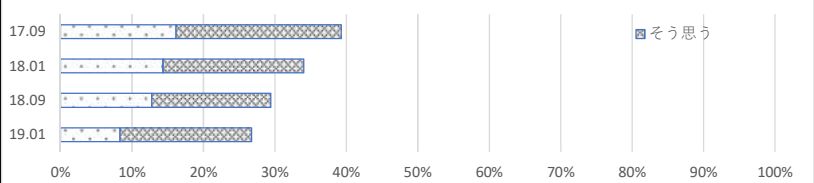
1			19.01	18.09	18.01	17.09
非常にそう思う			29.6%	34.8%	28.7%	24.6%
そう思う			60.3%	50.4%	57.0%	63.0%
あまり思わない			8.3%	11.7%	13.6%	10.9%
思わない			1.8%	3.2%	0.7%	1.4%
			100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

社会に貢献する活動や自分を高めるための活動に積極的に取り組みたい。



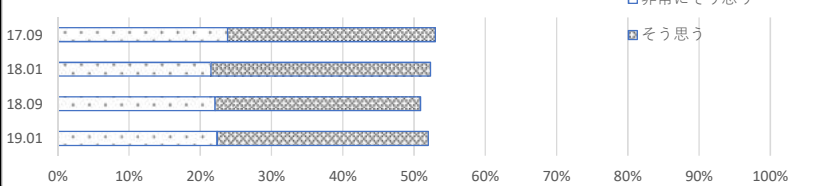
2			19.01	18.09	18.01	17.09
非常にそう思う			8.3%	12.8%	14.3%	16.1%
そう思う			18.4%	16.7%	19.7%	23.2%
あまり思わない			37.5%	39.4%	44.1%	44.2%
思わない			35.7%	31.2%	21.9%	16.5%
			100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

高校在学中に留学や、海外への研修に行きたい。



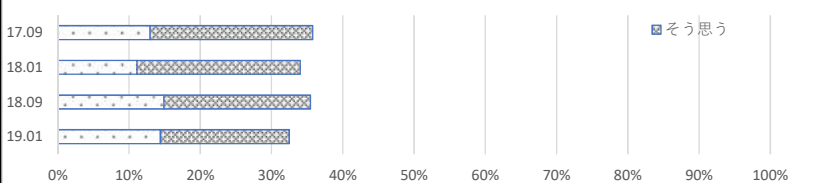
3			19.01	18.09	18.01	17.09
非常にそう思う			22.4%	22.1%	21.5%	23.9%
そう思う			29.6%	28.8%	30.8%	29.1%
あまり思わない			26.7%	30.2%	32.3%	33.3%
思わない			21.3%	18.9%	15.4%	13.7%
			100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

高校卒業後、留学や海外への研修に行きたい。



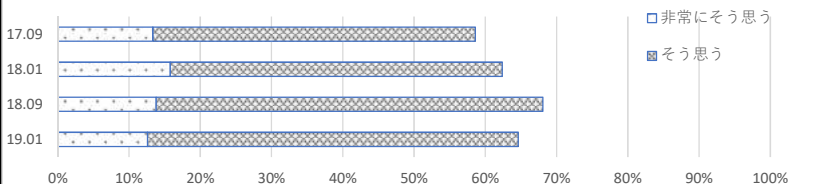
4			19.01	18.09	18.01	17.09
非常にそう思う			14.4%	14.9%	11.1%	13.0%
そう思う			18.1%	20.6%	22.9%	22.8%
あまり思わない			46.2%	38.3%	43.7%	42.1%
思わない			21.3%	26.2%	22.2%	22.1%
			100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

将来、国際関係や英語を使う職業に就きたい。



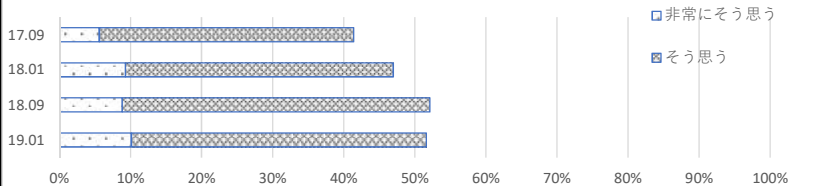
5			19.01	18.09	18.01	17.09
非常にそう思う			12.6%	13.8%	15.8%	13.3%
そう思う			52.0%	54.3%	46.6%	45.3%
あまり思わない			28.2%	23.0%	30.8%	35.1%
思わない			7.2%	8.9%	6.8%	6.3%
			100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

社会問題に対して興味や関心を持ちニュースや新聞を意識してみるようになった。



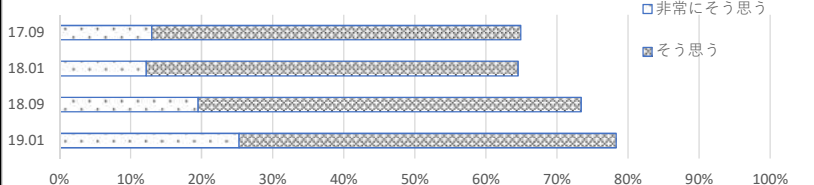
6			19.01	18.09	18.01	17.09
非常にそう思う			10.1%	8.9%	9.3%	5.6%
そう思う			41.5%	43.3%	37.6%	35.8%
あまり思わない			39.4%	37.6%	43.7%	47.7%
思わない			9.0%	10.3%	9.3%	10.9%
			100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

地域課題に対して興味や関心を持ちニュースや新聞を意識してみるようになった。



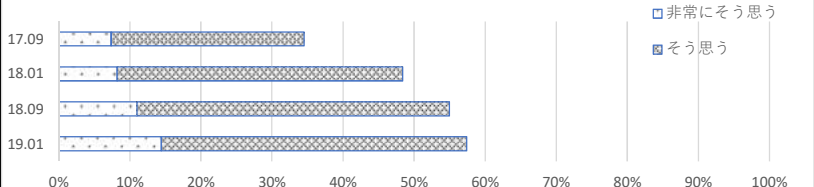
7			19.01	18.09	18.01	17.09
非常にそう思う			25.3%	19.5%	12.2%	13.0%
そう思う			53.1%	53.9%	52.3%	51.9%
あまり思わない			15.9%	23.0%	31.2%	30.9%
思わない			5.8%	3.5%	4.3%	4.2%
			100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

自分で設定した水に関する課題がその他の課題と関係していることがわかった。



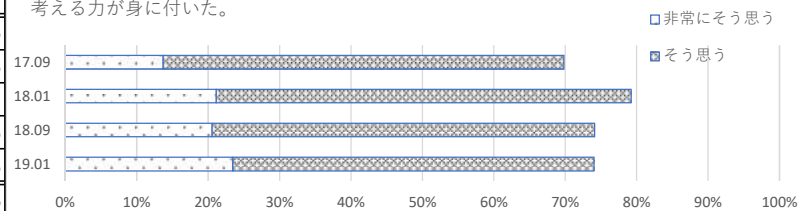
8			19.01	18.09	18.01	17.09
非常にそう思う			14.4%	11.0%	8.2%	7.4%
そう思う			43.0%	44.0%	40.1%	27.1%
あまり思わない			33.9%	34.4%	41.2%	53.5%
思わない			8.7%	10.6%	10.4%	12.0%
			100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

S G Hで身に付けた思考プロセスをその他の場面でも応用するようになった。



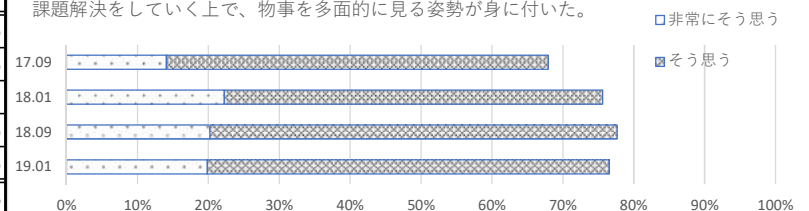
9			19.01	18.09	18.01	17.09
非常にそう思う			23.5%	20.6%	21.1%	13.7%
そう思う			50.5%	53.5%	58.1%	56.1%
あまり思わない			18.4%	19.9%	17.2%	25.6%
思わない			7.6%	6.0%	3.6%	4.6%
			100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

考える力が身に付いた。



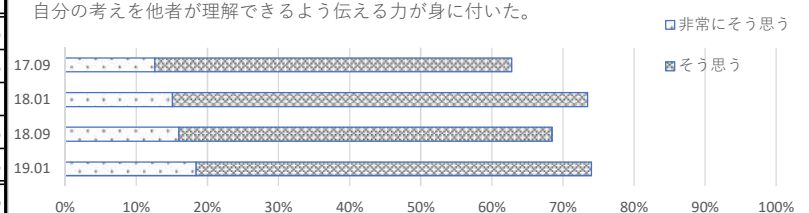
10			19.01	18.09	18.01	17.09
非常にそう思う			19.9%	20.2%	22.2%	14.1%
そう思う			56.7%	57.4%	53.4%	53.9%
あまり思わない			17.0%	17.7%	21.9%	27.1%
思わない			6.5%	4.6%	2.5%	4.9%
			100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

課題解決をしていく上で、物事を多面的に見る姿勢が身に付いた。



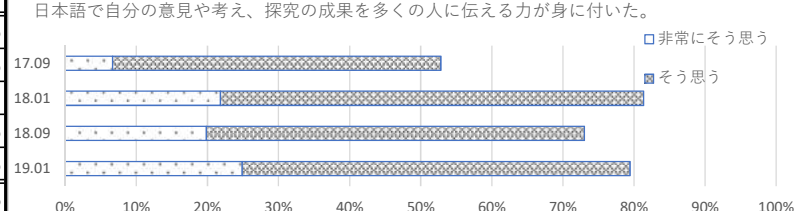
11			19.01	18.09	18.01	17.09
非常にそう思う			18.4%	16.0%	15.1%	12.6%
そう思う			55.6%	52.5%	58.4%	50.2%
あまり思わない			19.1%	24.8%	23.3%	30.5%
思わない			6.9%	6.7%	3.2%	6.7%
			100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

自分の考えを他者が理解できるよう伝える力が身に付いた。



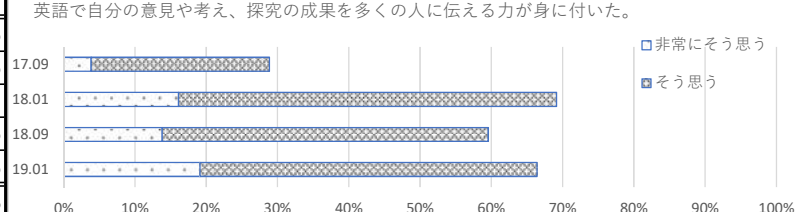
12			19.01	18.09	18.01	17.09
非常にそう思う			24.9%	19.9%	21.9%	6.7%
そう思う			54.5%	53.2%	59.5%	46.1%
あまり思わない			15.5%	20.2%	16.5%	36.6%
思わない			5.1%	6.7%	2.2%	10.6%
			100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

日本語で自分の意見や考え、探究の成果を多くの人に伝える力が身に付いた。



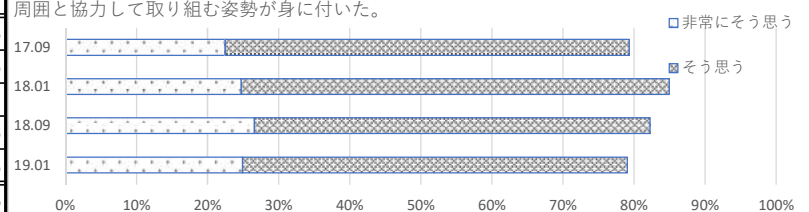
13			19.01	18.09	18.01	17.09
非常にそう思う			19.1%	13.8%	16.1%	3.9%
そう思う			47.3%	45.7%	53.0%	25.0%
あまり思わない			27.4%	30.9%	26.9%	44.7%
思わない			6.1%	9.6%	3.9%	26.4%
			100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

英語で自分の意見や考え、探究の成果を多くの人に伝える力が身に付いた。



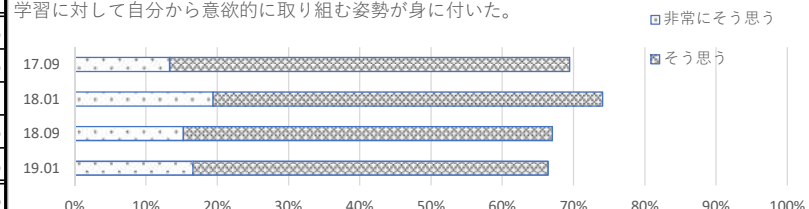
14			19.01	18.09	18.01	17.09
非常にそう思う			24.9%	26.6%	24.7%	22.5%
そう思う			54.2%	55.7%	60.2%	56.8%
あまり思わない			17.3%	12.1%	12.5%	16.8%
思わない			3.6%	5.7%	2.5%	3.9%
			100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

周囲と協力して取り組む姿勢が身に付いた。



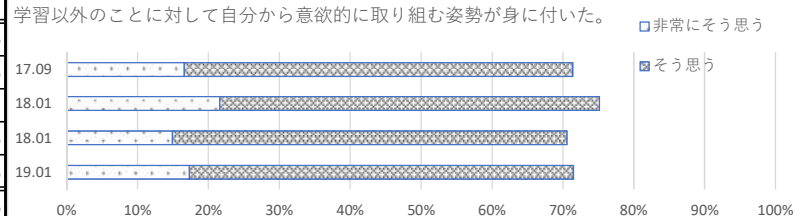
15			19.01	18.09	18.01	17.09
非常にそう思う			16.6%	15.2%	19.4%	13.3%
そう思う			49.8%	51.8%	54.7%	56.1%
あまり思わない			26.7%	25.5%	21.2%	24.6%
思わない			6.9%	7.4%	4.7%	6.0%
			100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

学習に対して自分から意欲的に取り組む姿勢が身に付いた。



16			19.01	18.01	18.01	17.09
非常にそう思う			17.3%	14.9%	21.6%	16.6%
そう思う			54.2%	55.7%	53.6%	54.8%
あまり思わない			22.7%	23.0%	20.5%	25.1%
思わない			5.8%	6.4%	4.3%	3.5%
			100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

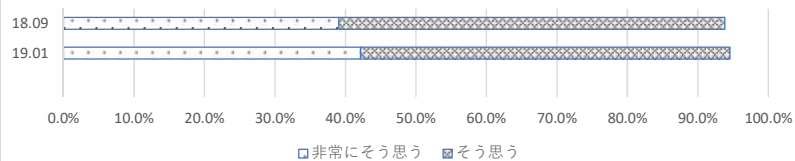
学習以外のことに対して自分から意欲的に取り組む姿勢が身に付いた。



エ 平成30年度入学生

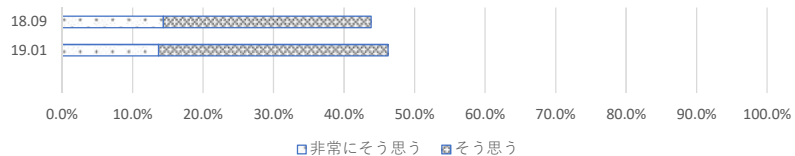
1					19.01	18.09
非常にそう思う					42.1%	39.0%
そう思う					52.4%	54.8%
あまり思わない					4.8%	5.5%
思わない					0.7%	0.7%
					100.0%	100.0%

社会に貢献する活動や自分を高めるための活動に積極的に取り組みたい。



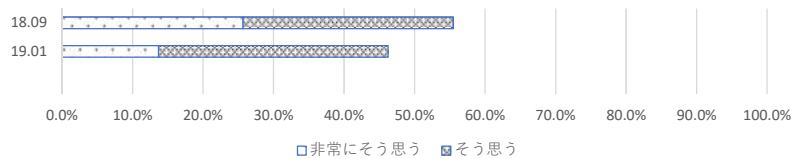
2					19.01	18.09
非常にそう思う					13.7%	14.4%
そう思う					32.5%	29.5%
あまり思わない					40.1%	41.8%
思わない					13.7%	14.4%
					100.0%	100.0%

高校在学中に留学や、海外への研修に行きたい。



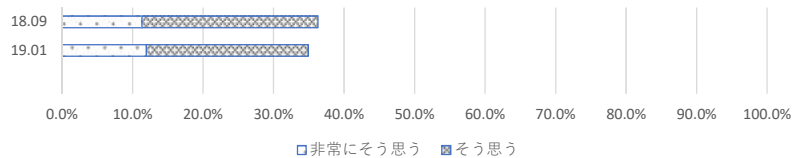
3					19.01	18.09
非常にそう思う					13.7%	25.7%
そう思う					32.5%	29.8%
あまり思わない					40.1%	33.6%
思わない					13.7%	11.0%
					100.0%	100.0%

高校卒業後、留学や海外への研修に行きたい。



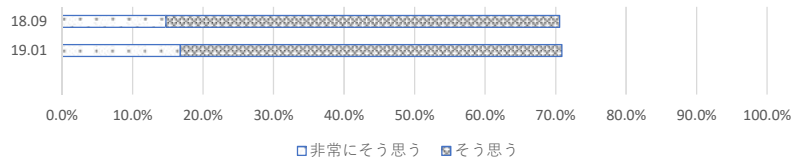
4					19.01	18.09
非常にそう思う					12.0%	11.3%
そう思う					22.9%	25.0%
あまり思わない					47.3%	45.5%
思わない					17.8%	18.2%
					100.0%	100.0%

将来、国際関係や英語を使う職業に就きたい。



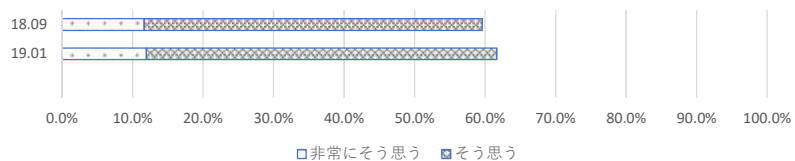
5					19.01	18.09
非常にそう思う					16.8%	14.7%
そう思う					54.1%	55.8%
あまり思わない					24.0%	25.0%
思わない					5.1%	4.5%
					100.0%	100.0%

社会問題に対して興味や関心を持ちニュースや新聞を意識してみるようになった。



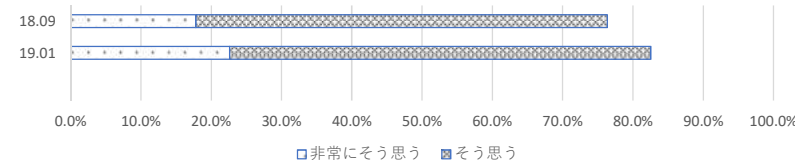
6					19.01	18.09
非常にそう思う					12.0%	11.6%
そう思う					49.7%	47.9%
あまり思わない					33.2%	35.6%
思わない					5.1%	4.8%
					100.0%	100.0%

地域課題に対して興味や関心を持ちニュースや新聞を意識してみるようになった。



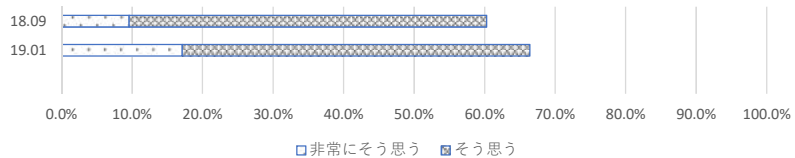
7					19.01	18.09
非常にそう思う					22.6%	17.8%
そう思う					59.9%	58.6%
あまり思わない					14.4%	20.9%
思わない					3.1%	2.7%
					100.0%	100.0%

自分で設定した水に関する課題がその他の課題と関係していることがわかった。



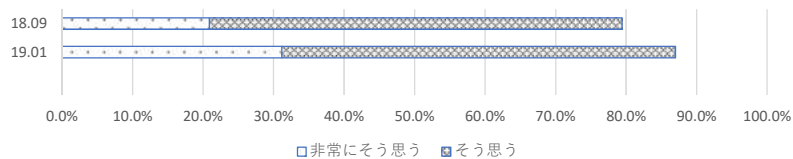
8					19.01	18.09
非常にそう思う					17.1%	9.6%
そう思う					49.3%	50.7%
あまり思わない					29.5%	33.2%
思わない					4.1%	6.5%
					100.0%	100.0%

S G Hで身に付けた思考プロセスをその他の場面でも応用するようになった。



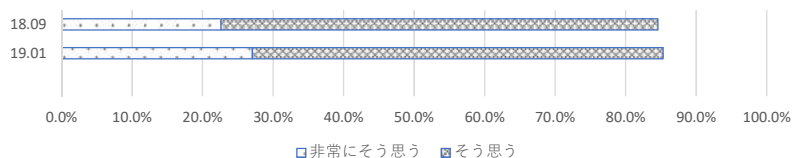
9					19.01	18.09
非常にそう思う					31.2%	20.9%
そう思う					55.8%	58.6%
あまり思わない					11.0%	18.8%
思わない					2.1%	1.7%
					100.0%	100.0%

考える力が身に付いた。



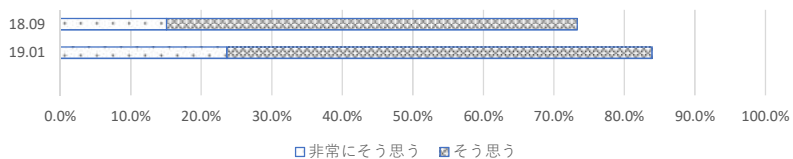
10					19.01	18.09
非常にそう思う					27.1%	22.6%
そう思う					58.2%	62.0%
あまり思わない					12.3%	13.0%
思わない					2.4%	2.4%
					100.0%	100.0%

課題解決をしていく上で、物事を多面的に見る姿勢が身に付いた。



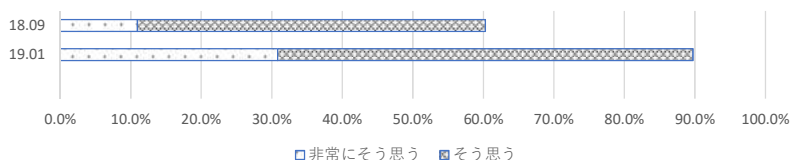
11					19.01	18.09
非常にそう思う					23.6%	15.1%
そう思う					60.3%	58.2%
あまり思わない					14.0%	25.3%
思わない					2.1%	1.4%
					100.0%	100.0%

自分の考えを他者が理解できるよう伝える力が身に付いた。



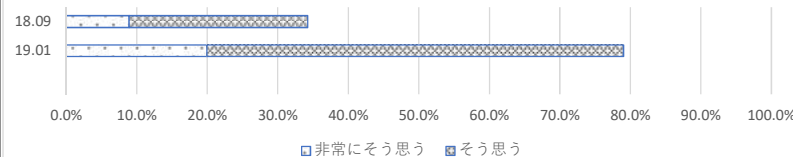
12					19.01	18.09
非常にそう思う					30.8%	11.0%
そう思う					58.9%	49.3%
あまり思わない					8.9%	37.7%
思わない					1.4%	2.1%
					100.0%	100.0%

日本語で自分の意見や考え、探究の成果を多くの人に伝える力が身に付いた。



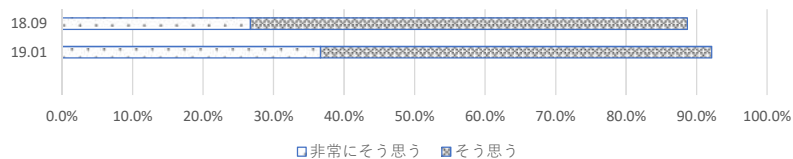
13					19.01	18.09
非常にそう思う					19.9%	8.9%
そう思う					59.1%	25.3%
あまり思わない					18.2%	47.6%
思わない					2.7%	18.2%
					100.0%	100.0%

英語で自分の意見や考え、探究の成果を多くの人に伝える力が身に付いた。



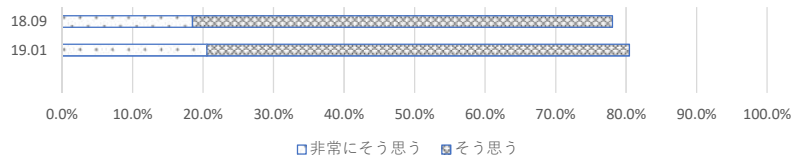
14					19.01	18.09
非常にそう思う					36.6%	26.7%
そう思う					55.5%	62.0%
あまり思わない					6.5%	11.0%
思わない					1.4%	0.3%
					100.0%	100.0%

周囲と協力して取り組む姿勢が身に付いた。



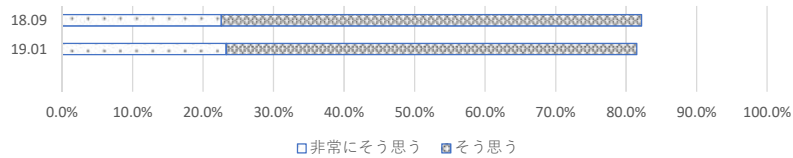
15					19.01	18.09
非常にそう思う					20.5%	18.5%
そう思う					59.9%	59.6%
あまり思わない					17.5%	19.9%
思わない					2.1%	2.1%
					100.0%	100.0%

学習に対して自分から意欲的に取り組む姿勢が身に付いた。



16					19.01	18.09
非常にそう思う					23.3%	22.6%
そう思う					58.2%	59.6%
あまり思わない					16.1%	15.4%
思わない					2.4%	2.4%
					100.0%	100.0%

学習以外のことに対して自分から意欲的に取り組む姿勢が身に付いた。



4 教員対象アンケート

先生御自身について

あなた自身の信念や実績について伺います。以下の1～14の項目は、**あなた自身にどの程度あてはまりますか？**

「まったく当てはまらない」「当てはまらない」「当てはまる」「非常によく当てはまる」の4段階から選び、該当する欄に○をつけてください。

また15は、あなた自身の感想を自由に記述してください。

先生御自身について		回答の割合	肯定的な (参) H29	(参) H28
あなた自身の信念や実績について伺います。以下の1～14の項目は、あなた自身にどの程度あてはまりますか？				
「まったく当てはまらない」「当てはまらない」「当てはまる」「非常によく当てはまる」の4段階から選び、該当する欄に○をつけてください。				
また15は、あなた自身の感想を自由に記述してください。				
1	教員としての私の役割は、生徒自身の探究を促すことだと思う。	95.7%	93.8%	88.6%
2	生徒は、問題に対する解決策を自ら見出すことで、最も効果的に学習すると思う。	89.1%	87.5%	94.3%
3	他の教員の授業を見学し、感想を述べることがある。	47.8%	50.0%	48.6%
4	同僚と教材をやり取りしたり、共有したりすることがある。	80.0%	90.6%	94.3%
5	特定の生徒の学習の向上について議論することがある。	75.6%	80.6%	74.3%
6	生徒に勉強ができると自信を持たせるようにしている。	68.9%	81.3%	80.0%
7	生徒が学習の価値を見出せるよう手助けをしている。	88.6%	81.3%	88.6%
8	生徒のために発問を工夫している。	77.8%	93.8%	91.4%
9	勉強にあまり関心を示さない生徒に動機付けをしている。	73.3%	71.9%	74.3%
10	自分が生徒にどのような態度や行動を期待しているか明確に示している。	68.9%	68.8%	77.1%
11	生徒の多面的思考・批判的思考を促している。	62.2%	71.9%	50.0%
12	多様な評価方法を活用している。	42.2%	53.1%	57.1%
13	生徒が理解できていないようなときには、別の説明のしかたを工夫している。	93.3%	90.6%	88.6%
14	アクティブ・ラーニングの手法を取り入れて授業を行っている。	51.1%	68.8%	71.4%
15	(自由記述) 本校がSGH指定校となり、あなた自身の意識の変容はありましたか？ (1～14の項目の内容の補足でも、それ以外の内容でも構いません。)			
授業の中で対話や協働、発信といったプロセスを意識して授業をおこなうようになった。／生徒が主体的な学びができるような工夫を意識するようになった。／主体的・対話的で深い学びを意識するようになった。／生徒の自主性や問題解決能力を尊重している。／一貫性をもたす等、論理的思考力を身に付けさせるように、担当教科でも意識している。／課題設定や、解決に向けての方向性の立て方など参考になった。／生徒が多面的なものの見方ができるよう授業構成を考えるようになりました。／新しい入試に必要とされる学力、グローバル化社会で必要とされる力を意識するようになった。／様々な課題が1つの課題に関わってきていることが意識されるようになった。／他の活動や指導においてもSGH取り組みを意識するようになり、変容はありました。／SGHも含め、生徒が他の授業で学んだことを自身の授業に関連付けたいという思いが強まった。／他教科でやったこととの結びつきのひとつにLWIが加わった。問題解決の流れに則り、教材の本文を見る視点が生まれた。／共働的な活動に関する意識、手法の参考になりました。／アクティブラーニングに対する理解が高まった。／SGH事業をとおしてかどうかはわからないが、昨今の流れを鑑みて生徒の主体的な活動をできる限り授業に取り入れるようにしている。／一方的な講義形式の授業を変えていかなければならないと考えさせられた。／自分の指導の幅を広げる機会を得た。				
理科で行っている「科学的探究」とのギャップを感じた。／SGHでの取り組みが、教科の学力とどのようにに関連していたり、相乗効果をもたらす予定であるかが見えにくい。／ありました。生徒が思ったように活動してくれなかったので、シラバスに従ってやってもうまくいきませんでした。自分なりの工夫ではうまくいかず、スキルの必要性を実感しました。橋本先生や望月先生のアドバイスが大変有効でした。／生徒のグループ活動をうまく促進していくことの難しさを実感した。				
当初の予算から大幅に削減されたり（環境づくりをするのに中途半端。タブレット300台入ると聞いていたが）事業の運営上学校への負担がかなり多い。一部生徒には成果はあったと思われるが、授業時間、課題、調査、発表準備等生徒の負担も多く、特に本校のような補習、宿題、模試の多い学校には、全員共修でやるのが良いのか疑問があった。携わった先生方の御苦労には経緯を表します。／一つの課題に対して学校のSGHの組織が中心となって授業の組み立てから教材の提供をしてもらったため行うことができました。このような活動は生徒にとってもプラスになりました。これを年間通してのアクティブラーニングや定期的に行うだけでも負担度が大きくなってしまいます。また進度との兼ね合いもあります。考え方の転換が必要な時期かもしれません。				
特にこれといった変化には気づきません。／今年度1年だけだったので、あまり変容したとはいえません。／意識の変容、とまではいかない。				

4 教員対象アンケート

生徒の変容について		ほとんどの生徒	ある程度の生徒	一部の生徒	ほとんど変化なし
以下の16～30の項目について、SGH事業をととして、どの程度の割合の生徒に変化があったと思いますか？「ほとんどの生徒（100～70%程度）に変化があった」「ある程度の生徒（70～40%程度）に変化があった」「一部の生徒（40～10%程度）に変化があった」「変化はほとんどなかった（10～0%）」の4段階から選び、該当する欄に○をつけてください（感覚で構いません。また空欄でも結構です）。また31は、あなた自身の感想を自由に記述してください。					
16	社会貢献活動や自分を高めるための活動（読書等も含む）に積極的に取り組むようになった。	8.9%	51.1%	37.8%	2.2%
17	進路選択に影響を与えた。	0.0%	22.7%	63.6%	13.6%
18	社会問題に対して興味や関心を持つようになった。	8.7%	50.0%	39.1%	2.2%
19	地域課題に対する興味や関心を持つようになった。	15.2%	41.3%	43.5%	0.0%
20	SGHの学習で身に付けた思考のプロセスを、他の学習や日常といった様々な場面でも応用するようになった。	6.5%	34.8%	52.2%	6.5%
21	考える力が身に付いた。（洞察力、発想力、論理力）	6.7%	37.8%	51.1%	4.4%
22	課題解決をしていく上で、物事を多面的に見る姿勢が身に付いた。	6.7%	42.2%	48.9%	2.2%
23	自分の考えを他者が理解できるよう伝える力が身に付いた。	15.2%	65.2%	19.6%	0.0%
24	日本語で自分の意見や考え、探究の成果を多くの人に伝える力が身に付いた。（レポート作成、プレゼンテーション）	26.1%	54.3%	17.4%	2.2%
25	英語で自分の意見や考え、探究の成果を多くの人に伝える力が身に付いた。（レポート作成、プレゼンテーション）	10.9%	45.7%	43.5%	0.0%
26	周囲と協力して取り組む姿勢が身に付いた。（協調性、リーダーシップ）	26.1%	56.5%	17.4%	0.0%
27	学習に対して、自分から意欲的に取り組む姿勢が身に付いた。	4.3%	39.1%	50.0%	6.5%
28	学習以外のことに対して、自分から意欲的に取り組む姿勢が身に付いた。（自主性、やる気、挑戦心）	0.0%	37.0%	56.5%	6.5%
29	大学生や外部指導者の支援により、生徒の心的態度（主体性、意欲等）が高まった。	30.4%	32.6%	34.8%	2.2%
30	大学生や外部指導者の支援により、生徒の能力（論理的思考力、課題設定力、表現力等）が高まった。	15.2%	41.3%	37.0%	6.5%
31	（自由記述）あなたは、SGH活動の生徒への効果は、どのようなものがあると思いますか？（16～30の項目の内容の補足でも、それ以外の内容でも構いません。） 課題解決型学習は大学・社会人になってからも役立つはず。そのノウハウをつかむことができています。また学年全体で取り組むことができたのは素晴らしいことです。個人差があったり、大学のAO推薦入試で使うときにもう一度考え直すことがありましたが、授業でやったことが言える一つとしてSGHであったことはよかったと思います。／大学でやる活動の予習になっているのではないかな。//話し合いの場面で話をする生徒が増えた。面接や面談で話をする生徒が増えた。／他の人に説明する能力の向上を感じました。／周りに自分の考えを伝えようとする姿勢は育成されたような気がします。／人前で発表する力が上がった。授業のスピーキングテストにもそれは表れていた。／一部生徒のプレゼン能力・コミュニケーション力が身に付いた。／聞く力や伝達する力といったコミュニケーション能力が身に付いてきたと思われる。／意見を聞く力。表現する力・プレゼン（効果的に）する、しようと工夫する生徒は多いと思います。発表の機会が多いほど、うまくなる。／プレゼンテーション等の他に伝える力は確実に高まったと思う。／プレゼンの経験はこれからつながると思う。／「物事を多面的に見る姿勢」および「プレゼンテーション力」はほとんどの生徒が身に付けることができたと思います。／課題を発見する力とプレゼン力／表現力（伝える力）、協調性が特に伸長されているのでは。／学校内外での活動で、例えば委員会や地域防災やボランティア活動等でも主体性や課題解決力、協調性等が高まり、効果が上がった面があると思います。／本校のような進学校では、社会とかかわる活動があまりないので、学校外の人々と関わりができた事はよかったと思う。//活動の質が高いかどうかは別として、グループでの活動に抵抗がなくなっていると感じる。他者と関わりあう姿勢は身に付いた。／協調性やリーダーシップがある生徒が多いように感じます。／社会問題への関心を持つようになっている。論理的思考という意識をもって展開できるようになっている。／身近な社会問題を自分たちの問題として捉えるようになること。／社会問題に目を向け、論理的に考え解決していくことの重要性を理解した生徒が少しでも増えたことは、効果があったと思う。／課題をみずから発見し、問題解決に向けて考察できるようになった。ホームルーム活動や部活動でその姿勢を見ることができた。／受け身の生徒と、リーダーシップを発揮した生徒で、獲得したスキルは変わってきますが、比較的多くの生徒が身に付いていると言えば、課題解決のための方法などは(たとえ受け身であったとしても)身に付いたのではと思います。ただし、それを即座に応用できる生徒はあまりいないかもしれません。／データを示して意見を述べることの重要性に開眼した、と思います。／知識どうしを、細切れでなく、結びつけようとする力がついている。正解がないものへの違和感を克服し、前に進めようとする力がついている。//判断できない項目もありよくわからない。コミュニケーションをとる機会が増えたと思うが、「誰とでも気軽に」というレベルにはなかなかならないかな？／正直なところ、週2回の授業でやらされ感が強い中でどれだけの効果があったかわかりません。／自分の考えをしっかりと発信できる生徒がいるが、それがSGHの成果なのか元々そういう生徒が入学してきているのかは検証できない。また、そうでない生徒もいる。／入学前からSGHに関心を持っている生徒は意識が高いが、そのような生徒は半分に満たない。／2年生のGWIの1時間（情報）を5クラス担当していますが、英語でレポートやポスターを作り、英語力や操作スキルは向上していると思いますが、情報発信で配慮したり、個人情報保護への態度は、あまり指導していないので、今後そのような場面に直面した時がやや不安です。				